
「理」の能力者陵人

小竹 啓樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「理」の能力者陵人

【Nコード】

N4213X

【作者名】

小竹 啓樹

【あらすじ】

最強の能力「理」を操る神崎 陵人。その能力を駆使し、様々な怪異に立ち向かっていく。

第一章 出会い

プロローグ

9月15日。残暑が厳しく、昼間の気温が30度を越える日が続いてきた。夕方以降はいくらか過ごしやすいものの、いまだ夜は寝苦しい。そんな夜21時。神崎陵人は友人との約束のため都心の街にいた。時間にはきっちりしている陵人は約束の10分前には必ず約束の場所にいることにしている。今日もそうだった。20時50分には約束の場所にいた。喫煙スペースで煙草を吸いながら、友人を待つ。街は仕事が終わわり、さー飲みに行くぞ！と言わんばかりのサラリーマン達。早くもテンションマックスで大声で喋りあっている学生達。これから食事がたら飲みに行つて、そのままホテルに行き、朝まで「素敵」な時間を過ごそうとしているカップル達と、完全に浮かれているピンク、黄色といった華やかな色を醸し出している「者」であふれている。

一方で、忙しそうに携帯電話片手に早歩きで歩いて行く者。冷めた目で周りをボーッと見ている若者。疲れてきつた顔で駅に向かう者。そんな街を陵人は無表情で観察していた。この限られた空間に全く違う色をした「者」達が自分の人生の一瞬を過ごしている。様々な想いが今自分の目の前で乱雑に混ざり合い、一つの「街」として形を成している。陵人はそんな「街」を見るのが嫌いではなかった。むしろ好んでいた。人間の生涯はせいぜい80年。普通に生きていけば、途方も無く長い時間に感じるかもしれないが、それは一瞬のことである。そんな一瞬の人生のさらに一瞬のこの時間を、様々な「色」を常に変化させながら歩んでいる「者」達が、陵人は好きだった。

第一章「出会い」

「わりー遅くなった」そうやって陵人の隣に座り、煙草に火をつけ

たのは立石駿^{たていししゅん}。陵人が約束をしていた友人だ。「おせーよ」そう言
つて陵人も新しい煙草に火をつける。「15分じゃ早い方だろ」詫
びる様子もなく子供のような屈託の無い笑顔を見せながら駿は笑っ
ている。「まーそうだな」つられて陵人にも笑みがこぼれる。「て
かお前こんなところで堂々と煙草なんか吸ってていいのか？イメージ
に関わるだろ？」「問題ねーよ！未成年じゃねーんだから！」そう
言つて今度はまた別の笑顔を見せる駿。立石駿の職業は俳優。つま
り芸能人だ。ただの芸能人ではない。現在若手実力派俳優NO1の
超スーパースターだ！180cmの長身に絞まった身体。爽やかさ
と男らしさを兼ね備え、27歳にして高校生役から名医の役まで
なんでもこなし、ドラマに映画、舞台と幅広く活躍している。歌が
へたくそなのが唯一の欠点くらいか。（世の中には知られていない
が）そんなスーパースターが繁華街の喫煙スペースで煙草を吸って
いたら嫌でも人目につく。すでに駿に気づいた連中がざわざわと騒
ぎだしている。「めんどくせーことになる前に行こう」そう言つて
まだ半分くらいの煙草を消し、立ち上がった駿に「そーだな」と陵
人も煙草を消し、予約してある店に向かって歩き出した。

陵人と駿が出会つたのは10年前。お互い高校2年生の時である。
最初は仕事だった。駿からの依頼を陵人が受け、見事に解決し、そ
の後交流を続け、今では友人と呼べる中になつたのである。駿が出
した依頼は「心霊現象の解決」だった。

当時の駿は今ほど有名では無かつたが、すでにドラマや映画に出演
しており、立派な芸能人であつた。芸能人はメディアを通じ、多く
の人の目に触れる職業である。そのため、様々な感情の「標的」に
なることが多い。もちろんそれがなければ芸能人としては成功しな
いし、ファンがつかなくてはとうしようもない。しかし、芸能人に
向けられる感情はそんな正の感情だけではない。嫉妬、妬み、そし
て度を越えた愛情、憎悪。そんな負の感情が理不尽に向けられるこ
とも少なくないのである。駿はそんな理不尽な感情の「標的」にな
つてしまった。

ある日駿のもとに小包が送られてきた。中には手作りの小さなクマのぬいぐるみと手紙が入っていた。手紙には「応援しています。頑張ってください」と書かれていた。駿はファンからの贈り物だと思い、事務所の決まりで返事こそ出さなかったものの、ぬいぐるみを部屋に飾ることにした。それから毎週のように小包が送られてくるようになった。駿は少し怖くなった。事務所に相談したが、「そういうことはよくあることだから気にしないでいい。人気が出てきた証拠だよ」と言われてしまった。まあそれもそうだなと思い、駿も気にしないように努めたが、ある晩。部屋で寝ているとふいに目が覚めた。時計を見ると2時を指していた。「まだこんな時間か。水でも飲むかな」と部屋を出て一階に行き、冷蔵庫からミネラルウォーターを出してコップに注ぎ、一気に飲み干した。「さ、寝よ」部屋に戻って眠ろうと階段を上り、部屋に入ろうとした時に異変に気づいた。「誰かいる」自分の部屋の中に知らない誰かがいる。部屋のドアは閉まったままだし、中は見えないが、間違いなく誰かいる！駿は混乱と恐怖にかられた。「こんな時間に！？いったい誰が！？どうやって入った！？」そんなことが頭の中をぐるぐると駆け巡る。しかし、部屋の前でじっとしていても始まらない。駿は覚悟を決め、ドアを開けて中に入った。女が立っていた。部屋に飾ってあったクマのぬいぐるみを手に取りじっと眺めている。駿は渾身の勇気を振り絞って「誰だ！人の部屋で何してる！？」と女に向かって叫んだ。すると女はゆっくり振り返り、「飾ってくれているんですね。嬉しい」そういつて不気味な笑みを浮かべた。「うわぁー！！」駿は叫びながらベッドから飛び起きた。そこに女の姿はなく、時計も7時を指していた。「夢・・・だったのか・・・？」全身汗だくになりながら安堵する駿に再び恐怖が襲った。ダッシュボードに飾ってあったはずのクマのぬいぐるみが、枕の横に置いてあった。その横に見たことのない、ピンクの可愛らしいリボンをつけたクマのぬいぐるみが寄り添うように座っていた。ぬいぐるみは小さなメッセージカードを持っていた。そのカードには「またきます」と書か

れていた。

その夜から毎晩のように夢に女が現れるようになった。時間は決まっていたも2時。目を開けると自分の目の前で不気味に微笑んでいることもあった。最初は事務所も「夢だろ？気にし過ぎだ」と取り合ってくれなかったが、日に日にやつれていく駿に事務所も事態を重く見るようになり、遂に陵人に依頼がだされた。

事務所の応接室のソファーには社長の赤間、マネージャーの大塚そして駿が横並びになって座っていた。駿はすっかり精気を失い、体重は5kgも落ち、心身共に疲れきっていた。毎晩正体不明の不気味な女が自分に会いにきているのだから当たり前だ。そこに「失礼します。神崎様がおこしになりました」「入ってくれ」社長の赤間が秘書に答える。秘書に連れられて入ってきたのは、駿と同じ年くらいの若者であった。180cm近い身長にスリム体系、健康的な色黒の肌で、端正な顔立ち、モデルをやっていますといっても誰も疑わないような好青年である。（こんなんで大丈夫か・・・？）駿は心の中で呟いた。「ご依頼をいただきました。神崎陵人といえます」「お待ちしました。まあかけて下さい」「失礼します」赤間と陵人のやり取りをどこか遠くの方で駿は聞いている。「早速ですが、今回の依頼内容を確認させてください。」赤間に促され、駿は重たい口を開き、今自分に起きている不可解な現象は話始めた。陵人は駿の顔をじっと見つめながら話を聞いている。一通り内容を話したあと、「いくつか質問があります。」そういつて陵人が話し出した。「毎晩送られてくるというぬいぐるみはどうされているんですか？」「もちろん全て処分しています。女が出てきたあと、最初に送られてきたぬいぐるみも処分しました。手紙も何もかも。」駿の顔が恐怖に満ちていく。「そうですか。なぜ、それまでぬいぐるみを飾っておいたのですか？普通毎週送られてくるようになった時点で気味が悪くなって処分しようと思うのですが？」「いや、毎週送られてくるようになってからはさすがに気味が悪くなったので、送られてくるものは処分していましたよ」「ではなぜ最初に送られて

きたものは処分しなかったんですか？」 陵人がすぐに切り替えしてくる。そう言われて初めて駿は思った。「何故だろう？」 陵人の言っていることはもつともだ。送られてくるものは全て処分しているのに、何故最初に送られてきたぬいぐるみだけは捨てず、律儀にも飾っておいたのだろう。いくら考えても答えがでない。しばらくの沈黙が流れる。「たぶん、忘れていたんだと思います」 そう答えるしかなかった。「そうですか」 陵人はやや考え込むように右手を口もとにもつていった。少しの沈黙のあと、「ぬいぐるみはもう一つも残っていませんか？」 「いや今日置いてあつたぬいぐるみは持つてきました。あなたが来るということだったので、何かの手がかりになればと」 そう言つて駿はぬいぐるみを取り出し、テーブルの上に置いた。ピンクのリボンをつけた可愛いぬいぐるみを見て、陵人はそのぬいぐるみに右手をかざした。何かを感じている様子だったが、すぐに「やはり『能力者』か」 陵人が呟く。「能力者？」 三人が声を揃えて問いかける。「ええ」 陵人は短く答える。「その能力者というのは？」 大塚が再度質問する。「この世には『能力者』と言われる特殊な力を持った者が存在するんです。分かりやすく言えば超能力ですね。このぬいぐるみも能力者の力で作ったものでしょう。キーワードは『夢』『ぬいぐるみ』『進入』。しかし、幸い素人のようです。きちんと修行を積んだわけではないようだ」とさも当たり前のように話を進めていく陵人。「まあそれが厄介といえは厄介か」 目の前の三人を完全に置いてけぼりにし、ぶつくさとして一人考え込んでいる。「さつきから何言ってるんだこいつは？」 事態が全く呑み込めない駿は、心身の疲れからかやや苛立っていた。「もう少し分かりやすく言ってくれませんか？ 何言ってるか全然わからないんですけど？」 と陵人に喰つてかかる。陵人は表情を崩さず、「今からお宅を拝見してもよろしいですか？ 早ければ今日中にかたをつけることが出来ます。」

1時間後、陵人、駿、の2人は駿の自宅の前にいた。大塚も付き添うと言っていたが、大丈夫と駿は断った。何故かは分からないがそ

のほうが良いと思ったのだ。実家暮らしの駿は両親、妹の4人家族。2階建ての少々年期の入った一軒屋で暮らしていた。2階の窓際に面した部屋を指差し、「あれが俺の部屋です」と陵人に説明した。陵人は少し目を細めるように部屋を見ていた。「どうぞ」と陵人を家に招き入れ、部屋に案内する。幸い家には誰もいなかった。階段を上がり、一番奥の部屋の前で「ここです」と一度立ち止まった。昼間に女が出てきたことはないが、駿はこの部屋自体に恐怖を感じるようになっていた。しかし、17歳にもなって嫌な夢をみるからこの部屋で寝たくないなどと子供じみたことを言うわけにもいかず、この数日間駿はずっと恐怖と戦いながらこの部屋で過ごしてきた。「失礼します」そう言って陵人はなんの迷いもなく部屋に入った。部屋の中をぐるっと見渡し、「やはりそうか」と呟いた。「何がですか!？」といった自分の部屋に何が起きているのだろうと駿は恐る恐る聞いてみる。「能力者の念で満ち溢れています。よくこんな部屋でいままで眠れていましたね。数日でやつれてしまうのも無理ない」別に眠れていたわけではないが、やはりこの部屋は異常なんだと改めて感じさせられた。「なんとかしてください!俺もうこれ以上は耐えられません!お願いします!」と半分泣きそうな声で駿は陵人にすがった。「もちろんです。このままじゃ私も気分が悪い。少し離れていてください」そう言うのと右手の人指し指と中指を立てて印を結び、それを口元を持っていくと『息吹』と唱えた。部屋中に風が吹いたと思うと、今までの不快は空気が一瞬で洗われたように清々しい空気に変わった。「さて、次は・・・」何が起きたのか全く分からず、口をぽかんと開けていた駿に「さっきのぬいぐるみを出してください」と陵人は息つく暇もなく指示をした。状況が飲み込めないまま駿は言うとおりにぬいぐるみを差し出した。陵人はぬいぐるみを机の上に置くと、再び印を結び『追捜』と唱えた。するとぬいぐるみがやんわりと光始めたと思うと、強い光を放ちそのまま消えてしまった。「さて仕上げは・・・」そう言うて駿の背中に右手を置き、『快來』と唱えた。今まで重苦しいかった身体が嘘の

ように軽くなり、何事もなかったような活力が沸いてきた。顔色も戻り、なんと体重まで戻っていた！「これはいつたい・・・!?」狐につままれたような顔をしている駿に「これでもう大丈夫です。あの女が現れることはありません。大元もあとで処理しておきます。」と陵人は微笑む。初めて見せた陵人の笑みに駿は心の底から安堵した。陵人の微笑みは、そのな力を持っていた。これは今まで使った力とは違う。陵人の人として器がそうさせていた。しかし、この短時間で目まぐるしいことが目の前で当然のように繰り広げられた駿は、真相が知りたかった。陵人に説明を求めたが、「まだ全てが終わった分けではありません。これから大元を処理してきます。話は全てが終わってからきちんとお話ししましょう」そう言っ陵人は去って行った。

陵人の言葉通り、その日の夜から女が現れることはなくなった。数日後、自宅にいた駿に陵人が訪ねてきた。「真相をお話します。」と。部屋に招き入れ、「適当に座ってください。今母がお茶を入れてくれています。」すると陵人は「おかまいなく。それより一つお願いがあります。」「なんですか?」妙に真剣な顔つきに駿も思わず姿勢を正した。

「タメ語でいい?」「はい!?!」思わず口から出てしまった。「だって俺らタメでしょ?そもそも敬語ってどーも苦手なんだよねー。明らかに堅苦しいじゃん?だいたいお願いされてんのはこっちなよ!?!なのになーんでこっちが気使って敬語になんきゃならねーの?おかしくない?師匠が依頼人にはきちん敬語で接しなさいって言うから使っつけてどさー。しかも今回はその依頼人がタメだぞ!最後くらい使わなくなっついていいだろ!?!」駿は開いた口が塞がらなかった。今までの陵人のイメージが正に音を立てて崩れていったと同時に腹の底から笑えてきた。何だかんだ言っつこいつは俺と同じ17歳なんだ。てかタメだったのか!?若いとは思っていたがまさかタメだったとは・・・。そんなこともおかしくなっつて遂には大声で笑ってしまった。「お願いじゃねーだろ!もう思いつきりタメ語

で喋ってんだから！」「そー硬いこと抜かすな。男が落ちるぞ。」
そういつて陵人も笑っている。今までの緊張が馬鹿みたいに思えて、
しばらく二人で笑っていた。そこに駿の母典子がお茶とお菓子を
持って入ってきた。「あらあらずいぶん楽しそうね。下まで笑い声が
聞こえてたわよ。はい、お茶とお菓子。」「ありがとうございます」
そういつた陵人の顔はやわらかく、5分前とはまるで別人のようだ
った。「ゆっくりしていつてね。」「そうやさしく微笑んで典子は部
屋を出ていった。」

「さて」出されたお茶を一口飲み、陵人が真相を語りだした。「犯
人はお前のストーカーだ」そう告げられた時、「やつぱりか・・・」
と思いつながらも「ストーカーにあんなことが出来るのか!？」と切
り替えした。「もちろんただのストーカーじゃない。前にも言った
があんたは『能力者』だ。自分の能力を使って夜な夜なお前に会い
にきていたんだ。」駿は全てが解決した今ですら鳥肌がたってきた。
「つまり夢の中に入ってくる力ってことか!？」「いや違う。やつ
が入ってきたのは夢じゃない。実際にこの部屋に入っていたんだ。」
「そんな・・・!?」だつていつも起きるとあの女はいなかったし、部
屋を荒らされたことだつてない。夜中にふと気付くといつて感じ
だつたんだぞ!？第一窓も何もかも鍵がちゃんとしてあつた!それ
なのに誰にも気付かれずに部屋に進入することなんて・・・!?」
駿は納得が出来ない、というか信じたくなかつた。あの女が実際に
この部屋に来ていた!？実際に俺のすぐ横に!？夢だと思つていた
ことが全て現実だつた!？鳥肌の数が倍増し、顔が引きつつていく。
「落ち着け。だから『能力者』だと言つているだろ。あの女の能力
は『空間移動』だ。自分の念を充満させた空間に、媒体を置くこと
で道を開き、移動する。今回の媒体は最初に送られてきたぬいぐる
みだ。あのぬいぐるみに自分の念を注ぎ込み、標的の家に送りつけ
る。そして空間に少しずつ念を充満させていき、道を開く。だが、
普通そんなぬいぐるみが送られてきたら、いくら自分のファンから
の贈り物だつて気味が悪くなる可能性が高い。すぐに捨てられてし

まったら空間に念を充満させることが出来ない。そこでやつはいくつかの罫をはった。一つはあのぬいぐるみを飾らせるための念を込めた。「飾らせるため?」「そうだ。あのぬいぐるみはお前の部屋に置かれていなくては意味がない。だからお前が確実に部屋に置くという念を込めたんだ。そのおかげでお前はなんの迷いもなくあのぬいぐるみをご丁寧にも飾っておいた。これで下準備は出来た。あとはぬいぐるみから念が溢れだし、この部屋に充満させられれば道が出来るという仕組みだ。ここまではいいか?」

理屈は分かった。なるほどとも思う。だが整理がつかなかった。いままでも芸能界という華々しい世界に身をおき、確かに普通の高校生とは違った人生を歩んできた。それでも駿は自分が普通に暮らしているのだと感じていた。もちろん意識したことはないが、事実そうだった。それがストーリーカーに狙われ、その女が『能力者』で、それを解決してくれたやつもとんでもない力を持っていて今事件の真相を俺に話している。頭では理解しようとしても、心がついていかない。そんな感じだった。それでも聞かなくてはならない。自分の身の上で起きたことをしっかりと受け止めなくてはならない。そうしなければ先には進めない。駿はお茶を一気に飲み干し、「続けてくれ。」と真つ直ぐ陵人を見つめた。

「やつの最終目的は、お前の恋人になることだった」「はあー!?」
「またも思わず口に出してしまった。」「いったいどういう神経してればそんなことして俺の恋人になれると思ったわけ!?」
「陵人はケタケタ笑っている。」「やつのシナリオはこうだ」半分笑いながら話した。」「お前を心身共に完全に疲弊させたところに偶然を装い現れる。そしてお前にかけてた念を解き、お近づきになるつもりだったそうだ。落ちた体重を戻すために料理の勉強もしてみたいだぞ。手料理で落とすつもりだったんだろう。もてる男はつらいねー」

「陵人は楽しそうに喋っている。」「じよ、冗談じゃねーぞ。」「駿は完全に顔が引きつっている。」「で、あの女はどうなったんだ?」「阿頼耶式あやしきの連中に預けてきた。」「阿頼耶式?」「ああ。MAINマインD」

S 特務部隊 阿頼耶式。違法『能力者』の取り締まりをしているやつらだ。そつちに身柄を拘束してもらった。」

「MAINDS ってのは!?」「『能力者』を統括、育成している機関だ。」

「そんなところがあるのか!?」「もちろん世の中には知られていない。政府やいくつかの業界以外はまず出くわすことはないだろう。芸能界とはつながりがあつてな。それで俺が派遣されたというわけだ。」お前もそのMAINDS に属してるのか?」「まあな。めんどくせーからめつたに顔出さねーけど。ただ師匠のつながりが深くてな。俺も仕方なく動いてる。」陵人はそう話すと面倒くさそうな顔を浮かべながらお茶をすすっている。「これが今回の真相だ。お疲れさん。」

「そう言つて駿の肩をポンッと叩く。「まったくだ。」どつと疲れが出たように大きなため息をつく。「そういえば、あの女は素人だと言つてなかつたか?」「ああ。やつはきちんと修行したわけじゃない。」「それでもそんな力を使うことができるのか?」「不可能ではない。能力を使うには『核』が必要なんだ。いわゆる能力を使うことができる素質だな。やつにはそれがあつた。だが、いくら素質があつてもなんの知識もなく能力を開花させることはまず不可能だ。」「どういうことだ?」「つまり、やつに知識ときつかけを植え付けたやつがいるということだ。そして間違いない。そいつも『能力者』だ。一応阿頼耶式の連中にそのことも報告してあるから、探索しているとは思うが。恐らく見つからないだろう。」

「ちょ、ちよつと待て! ! じゃあ何か!? 俺をストーカーに襲わせた張本人はまだどつかにいるってことか!?」「まあそういうことになるな」「全然終わってねーじゃねーか! !」「安心しろ。やつらの目的はお前じゃない。」「どういうことだよ!?」「やつらの狙いは陰湿な心を持った『核』の持ち主。今回はあの女だな。やつらはそういう『核』を見つけては言葉巧みにそそのかし、闇に落とすしていく。今回お前が標的になったのはまあ一言でいうと運が悪かつたつてとこだな。」と肩をすくめてみせる。「やつらつて! !?」

「『あかつき暁』といわれる『能力者』の集団だ。まだ開花していない『核』を闇に引きずり込み、自分たちの力に変えている下種野郎どもだ。」
いままで見たことのない明らかに嫌悪感むき出しの陵人に駿は寒気と恐怖を覚えた。「ちなみに『核』はお前にもあるぞ。駿。」「ええー！？俺にもあるのか！？」「ああ。この前お前に『快來』を使つた時に気付いた。あ！そうだ、そうだ！一つ大事なことを言うのを忘れてた！」「な、なんだよ！？まだなんかあるのか・・・？」物凄く駿の顔が不安になる。「お前にはこれから先いろいろと変な物が寄つてくことになる。」「はー！？」「今までで一番の大声を上げ、おもわず立ち上がってしまった。」「どうのことだよ！？」
「陵人の両肩を掴んで激しく揺さぶる。」「だー！落ち着け！いいから落ち着け！」「ぶるんぶるんに揺らされた陵人はピヨピヨしていた。フラフラになりながらも、「まったく。いいか。お前はこの短時間の間に二人の『能力者』と接触をもつてしまった。しかもお前にはもともと『核』が存在する。俺たちの力の影響を受けて『核』が反応してきちまったんだ。」「核』が放つ気は怪異を引き寄せることが多々ある。分かりやすくいうと、靈感の強いやつにはいろいろと寄ってくるっていうだろ？幽霊とか妖怪とか。それが『核』に怪異が反応しているという状態だ。理解できたか？」「理解はできた。だが完全に戸惑っていた。顔は引きつり、変な汗がジワーと身体全体を包み込むように流れた。不気味な女の一件を陵人が解決してくれた時、全てが終わったんだと思った。これで普通の生活に戻ることができる。そう心の底から喜んだ。しかしそうではなかった。始まりに過ぎなかったのだ。駿の表情を見て、「わかりやすいリアクションだな。教科書通りだ。」と陵人は妙に納得している。「俺はこれからどうなるんだ？どうしたらいい？」今にも泣き出しそうな表情でうつむく駿に陵人は「顔を上げる駿。お前には俺がついてやる」「真っ直ぐに駿の顔を見つめ、力強く肩を掴んでくれた。」「え・・・？」「お前の『核』が反応してしまったことは少なからず俺にも責任がある。お前が怪異にイタズラされるのを黙ってみている

わけにはいかないからな」「守つてくれるのか？俺を？」「まあー
そういうことだ。つっても四六時中付きっ切りでお前を守つてやれ
るほど俺も暇じゃないんでな。何かあつたらすぐに呼べ。駆けつけ
てやる。」「そう言つて笑顔で親指を立てる陵人を見て、駿は今まで
の不安が吹き飛んだ。大丈夫だ。そう心の底から思うことができた。
「ありがとう。陵人」初めて陵人と名前で呼んだことに少し照れく
さい感じがして、おもわず笑つてしまった。陵人も笑っている。落
ち着きを取り戻した駿は気になっていた陵人自身のことを聞いてみ
ることにした。「なあ。お前はどうゆう能力をもってるんだ？こな
いだは三つくらい使つてたる？」「俺の能力名は『理』だ。」「能
力名？」「きちんと修行をした能力者は、能力に応じた名を持つ
んだ。その名に沿つた能力を発動することができる。さつきもいつ
たが、能力を発動するためには『核』が必要になる。その『核』を
磨き上げることによつて能力が開花するわけだ。俺の能力は自ら理
を生み出すことによつて、あらゆる術を操ることができる能力だ」
「無敵じゃねーか！そんな凄い能力なのか！」「まあな。だが万能
なわけじゃない。いくつかの制約が伴う。つってもそれを差し引い
ても最強なことに変わりないけどな！」陵人は自身満々に高笑いし
てる。「制約つてのは？」「まあおいおい話してやるよ」そういつ
て今度は不敵な笑みを浮かべた。「さあ、他に質問がなければ俺は
そろそろ帰るぞ。」「もう帰るのか。もう少しゆっくりしていけば
いいのに。話したいこともたくさんある。」「次の機会にな。これ、
俺の番号とアドレスだ。何かあつたらいつでも連絡してこい」そう
いつて小さな紙切れを手渡した。「必ず連絡する。いろいろありが
とう。陵人」二人は固い握手を交わした。これ以降、二人の関係は
途切れることなく、10年間の歳月を共にし、真の友人となった。

第一章 出会い（後書き）

現在執筆中の作品ですが、一足先に公開したいと思い投稿させていただきますました。実は初めての作品です。今後更新を続け、また、新たな作品にも挑戦していきたいと思っています。どうかあたたかい目で見守ってください。

第二章 「天翼の刻印」

約束の場所から10分程歩き、大通りから路地に入ると、今までの騒がしかった光景が嘘のように静まり返り、人がけは一切なくなった。都心には変わりないのだが、この空間はそんなところだった。

そこに一軒のBarがある。「Bar NYX」(バー ニックス)。常連客しか来ない、いや、くることが出来ないこの店は、カウンターが10席、テーブル席が2卓、その他に個室が3部屋ある。個室の広さは8畳程の大きさで、2、3人なら広々と使うことが出来る。NYXは『能力者』御用達のBarである。よって客もほとんどが『能力者』。普通の人間はたどり着くことさえ出来ない。それがマスターである碓水^{うすい}。美影^{みかげ}の能力でもある。能力名は「隔絶^{かくぜつ}」空間に結界を作り出すことにより、外部からのあらゆる進入を遮断する能力である。『能力者』同士の情報交換も盛んに行われており、難しい案件に対してチームを組んで取り掛かるなど、賞金稼ぎのギルドのような役割も担っている。碓水は陵人の師である神崎^{かんなき} 修一郎^{しゅういちろう}の古くからの友人であり、幼い陵人を修一郎と共に見守り続けたいわば母親の様な存在だ。その為、3部屋ある個室のうちの1部屋は、陵人の為に常に空けておいてくれている。予約もいらぬ。代償として、碓水からの依頼は無条件で受けること。月に一度は必ず顔を出すことが義務付けられている。当初は飲食代金も要らないと言ってくれていたが、陵人はその申し出を断り、飲み食いの代金だけはきちんと払うことにしている。陵人はその個室を仕事の依頼人と会う時に使うこともあり、駿と外で飲む時には決まってNYXと決めていた。駿もこの店が気にいっている。なにせ酒も料理も抜群に美味く、芸能人である駿が人目を気にせず飲める数少ない場所であるからである。そして、マスターの碓水が美人であるということもお気に入りの理由の一つである。年齢的に言えば碓水は40歳を過ぎている。しかし、その抜群のプロポーションは今尚健在であり、大

人の女の色気がムンムンとしている。顔にシワなど一つもない。スラツと伸びた美脚を常に露出させ、豊満な胸元も谷間をもろに強調している。長い栗毛色の髪はフワフワしていて、笑顔はまるで天使のような温かい顔をしている。この天使の笑顔で「いらっしやい」なんて言われた日にやーどんな男だつてメロメロになつてしまふ。21時半。陵人と駿はNYXに到着した。扉を開けるとほぼ満席状態の店内に碓水がいた。「あら、陵人。駿。いらっしやい。」天使の笑顔と甘い声で二人を出迎えてくれた。「今日は見ての通りいっぱいなの。部屋を使ってくれる。」申し訳なさそうに言う碓水に「構わないよ。」そう言つて常連客に軽く挨拶をし、陵人の為に空けてくれている部屋に向かった。部屋に入るとすぐに碓水がやってきた。「繁盛してるじゃない」陵人が言うと「おかげさまでね。何にする？」碓水が笑顔で応える。「とりあえず生二つ。料理は任せろ。」「了解。そうそう。こないだ修が顔出してくれたわよ。」「師匠が？こつちにきてるんだ」「そうみたい。近々あなたのところにも寄るつて言つてたわよ。」「そっか。あの人はいつも突然来るからな。」陵人は苦笑いだが、どこか嬉しそうな表情を浮かべている。「息子が心配なのよ。」「そう言う碓水の笑顔も柔らかい。」「じゃあ、すぐに用意するから。駿もゆつくりしていつてね。」「ありがとうございます。」駿のキラースマイルが光る。「相変わらず美人だな」「碓水さんは。」駿がにやけまかつた顔で言う。「もう40過ぎだけどな。昔からまつたく変わつてない。あんな顔してキレるとめちやくちや怖いんだぞ！」陵人の顔が昔を思い出しながら青ざめる。碓水は元々MAINDSの一員であつた。阿頼耶式の前総長である。現役時代の通り名は「鬼女」。美しい容姿とは裏腹に違法『能力者』を恐怖のどん底に落とし続けた最恐の女である。MAINDSを引退後、NYXを始めたが、今だに彼女を慕い、頼つてくるMAINDS関係者も少なくない。「そっぴやお前のお師匠さんて今なにしてるんだ？」「今はMAINDSの特別顧問をやつてるよ。まあ最近は年に数回しか会わないけどな。ここに顔出したつてことは、美

影さんの言つとおり近いうち会いにくるんだろう。「そうなんだ。」「そんな話をしてる間に、確水がジョッキを二つ持って現れた。「お待たせ。料理もすぐに用意するから」「ありがとう。」「ジョッキを手にして、「とりあえずお疲れー！」といったものように乾杯し、一気にビールを身体に流し込む。残暑が厳しい中歩いてきたため良く冷えたビールが死ぬほど美味かった。半分ほど一気に飲み干し、「それで、頼みつてのはなんなんだ？」陵人が切り出した。「ああ。実はお前に仕事の依頼をしたいんだ。」「依頼？」「ああ。いつでも依頼人は俺じゃない。世話になつてるプロデューサーに頼まれてな。牧村^{まきむら} 茜^{あかね}つて知つてるだろ？」「ああ。最近ちよくちよく見るようになったな」

牧村 茜。現在売り出し中のグラビアアイドルである。165cmと女性にしては長身にDカップの豊満かつ美しいバスト、引き締まったウエストとヒップと完璧なボディを持ち、少女のようなあどけなさから大人な女の色気も感じさせる豊かな表情、若干22歳だが、茜は確実に日本中の男の心を鷲？みにする何かを持っていた。「その子が今回の依頼人つてわけか？」「そういうこと。詳しい内容は聞いてないけど、何か身体に変な紋様が浮かんできちまつたらしい。」「ほー。悪くないな。」「陵人の口元がいやらしく歪んでいく。「わかつてると思うけど仕事だからな陵人」駿がくぎを指す。「当然だ！俺はプロだぞ！」全く説得力のない崩れきつた顔に駿は大きなため息をつくしかない。陵人は無類の女好きである。今までに關係をもつた女は数知れず。一応仕事が付くまでは依頼人との關係は持たないというのが陵人の真情だが、やることはしつかりやっている。以前駿にプロとしてそれはどうなんだ？と突っ込まれたことがあつたが、「俺の仕事は怪異を処理することまでだ。その先は一個人として人生を桜花しているだけだ。」と妙に自信満々に言われてしまった。「まあ、とりあえず頼むは。これが先方が指定してきた日時と場所だ」と駿は半分以上あきれた表情で紙切れを陵人に渡した。「任せておけ！お前の顔に泥を塗るようなことはしない

さ。「僕、企んでます！と堂々と宣言しているような顔で陵人はその紙を受け取った。

三日後、陵人は依頼人である牧村 茜と会うため都内某所のホテルに向かっていた。ホテルに着き、ラウンジにあるカフェに行くと、そこにマネージャーの岩倉と茜が待っていた。芸能人らしく、帽子とメガネで変装しているものの、瑞々しいオーラが溢れているため、陵人はすぐに分かった。「このオーラは。まさか・・・。」と何かを感じとった陵人だが、とりあえずコンタクトをとることにした。「牧村 茜さんですね？ご依頼をいただきました神崎 陵人といいます。」そう挨拶すると、「よろしく願います。」と深々と茜は頭を下げた。これだけでも陵人には非常に好印象だった。「ここでは何ですので、部屋を取ってあります。詳しい話はそちらで」と岩倉に促され、三人は予約してある2334号室に向かった。

客室に着き、茜と岩倉がソファに腰掛ける。陵人はその正面に座り、切り出した。「それでは、詳しい依頼内容をお願いします。」事前に打ち合わせしていたのだろう。岩倉から詳細が伝えられた。岩倉が言うには、一週間ほど前、つまり駿から依頼を受けた四日前に、突然茜の左胸に奇妙な紋様が浮かんで来たということであった。紋様の大きさは約3cmほどで、火の玉のようにも片翼のようにも見え、一見するとタトゥーのようであると。痛みなどはまったくないということだった。「ご存知の通り、この子はグラビアを中心に活動しています。時には過剰な露出をすることもありまして、来週にも撮影が入っています。場所が場所だけになんとも出来なくて。」と一通り岩倉の話聞いた陵人は、「わかりました。とりあえずその紋様というのを見せていただけますか？」とあくまで真顔で答える。(心の中はピンクの天使が舞い踊っているが)「わかりました。茜」岩倉に促され、茜はブラウスのボタンを外し、豊満はバストが顔をだす。(キター!!!) 陵人はあくまで真顔を崩さぬように全身系を両目に集中させた。岩倉の話の通り、茜の左胸に火の玉とも片翼とも言える紋様が浮かんでいた。その紋様を見た瞬間、いまま

で踊り転がっていたピンクの天使が陵人の心の中から消え失せた。「天翼の刻印!？」そうつぶやき、「失礼します」と刻印に右手をかざす。「やはり・・・」その反応を見て、いささかの不安を覚えた茜が口を開く。「なんなんですか?これ?」その問いかけは陵人の耳には入っていないかった。(あの時感じたオーラはこれだったのか)そう確信した陵人の口からとんでもない言葉が発せられた。「服を全て脱いでください。」「ええ!？」岩倉と茜の声が八毛る。「ちよつと待つてください!なんでそんなことしなくちゃいけないんですか!？」と岩倉が声を張り上げる。茜も怪訝な顔をしている。「詳しい説明はあとでします。まずは彼女の身体を調べさせてください。私の考えが正しければ、彼女の身体のどこに同じような刻印が刻まれているはずです。」「そんなものありません!事前私にチエックしましたから!」今日会ったばかりの、しかもこんな胡散臭い男に大事な茜の身体を見せるなんて絶対にしない!といわんばかりに岩倉が否定する。「出来ないのであれば私は手を引くだけです。しかし、事と次第によっては彼女の命に関わるということをお話しておきます。」「陵人は冷たく言い放つ。「命に関わる!？」二人の顔が一瞬にして氷ついた。「どういうことですか!？適当な事言つて、あなた茜の身体が見たいだけなんですよ!？」不安を振り払うように岩倉は喰つてかかる。「言葉通りです。どうするかはあなたの方の判断にお任せします。」「あくまで冷静に言葉を発する。沈黙が流れた。ほんの1、2分の事だが、二人にはとてつもなく長い時間を感じられた。「わかりました。脱ぎます。」「沈黙を破つたのは茜だった。「茜!何言い出すの!？こんな得たいも知れない人に裸を見せるなんて!」「だってこのままじゃ何も分からないじゃない!いきなりこんな模様が浮かんできてただでさえ気持ち悪いのに命に関わるなんて言われたら見せなきゃ仕方ないでしょ?」岩倉は黙つて茜を見つめている。「それに、私この人信用できると思う。」「なんでそんなこと言えるの!？」「わからない!わからないけど・・・この人は大丈夫だと思う。」「そう言つて真つ直ぐに陵人を見つ

める。岩倉も厳しい表情で陵人を見る。「お願いします。」そう言
つて茜は服を脱ぎ始めた。少しずつ茜のパーフェクトボーディーが露
になっていく。透き通るような白い肌、下着から開放された胸は大
きさだけでなく形も極上で、なにかから何まで陵人の好みと合致して
いた。いつも陵人なら全身でその身体を堪能するとのだが、今の陵
人にはそんな想いは欠片もなかった。全ての衣類を脱ぎ、恥じらい
ながら胸元を両手で隠した茜は「お願いします」と小さな声で言っ
た。岩倉はそんな茜を不安でいっぱい表情で見つめている。「失
礼します。」そう言つて陵人は茜の身体を丹念に調べ始めた。全身
くまなく探さなくては、茜を全裸にさせた意味はない。陵人は注意
深く刻印を探した。茜は恥ずかしさからか透き通った白い肌をピン
ク色に染め上げていた。グラビアアイドルの茜は至近距離からの撮
影もされるので、人に見られることには慣れていたが、今回はそれ
とは全く違う。生まれたままの姿を、まだ会つて10分かそこらの
男性に超至近距離から舐めるように観察されている。しかし、不
思議と嫌は気持ちにはしなかった。恥ずかしいという想いはあつたが、
陵人からは下心やいやらしい雰囲気は全く感じられない。むしろ自
分のために必死になってくれているという想いが感じられた。数分
にわたり陵人は茜の身体を調べ尽くした。そして「あつた。」そう
言つて「これを見てください。」と岩倉を呼んだ。茜の右足の付け
根、ちょうど陰部のすぐ下辺りに、左胸の刻印と左右対称の刻印が
あつた。「こんなところに・・・!?」岩倉は言葉を失っている。「
あつたんですか!？」茜も声を上げる。「ええ。左胸の刻印と左右
対象なものも刻まれています。」そう答えると、陵人は茜の正面に
立ち、印を結び、『凝』と唱えた。肉眼では捉えられない怪異や、
気の流れ、『能力者』の念などをみることでできる術である。『凝』
で茜を見ると、左胸の刻印と、右足の刻印が、鎖によって体内で繋
がっているのが見えた。

「やはり、完全に繋がっている・・・。」陵人の表情が曇る。「服を
着ていただいて構いません」そう茜に告げ、陵人は腰を下ろし、思

いつめた表情で考え込んでいる。服を着て、茜と岩倉は再びソファに座り、「わかったんですか？これは何なんですか！？」岩倉が焦りを隠せずに詰め寄る。「これは・・天翼の刻印」といつて、数百年に一度この世に現れる、選ばれた者の証です。「天翼の刻印」！？選ばれたって何に！？」「ある霊穴を封印する者。解りやすく言うと・・生贄です。」「い、生贄・・！？」岩倉と茜の顔が凍りつく。「この刻印が現れた者は、その身を犠牲にし、巨大な霊穴を封じる役目を担っています。これまでも数名の女性に現れ、皆その役目の犠牲になってきました。この刻印から完全に開放された者は、未だかつて一人もいません。」「そ、そんな・・。」「岩倉の顔からみるみる血の気が引いていく。茜は神妙な面持ちで陵人を見つめていた。「具体的に、私はどうなるんですか？」「今、あなたの体内で、二つの刻印が鎖で繋がっています。これはすでに第二段階が終了したということです。これから七日間で、二つの刻印は引き合い、一つの刻印になるうとします。そして刻印が一つになった時、天翼の使者があなたを迎えにくる。その後、あなたはその身ごとと霊穴に落とされることになります。」「岩倉はすでに言葉を失っていた。茜は依然神妙な面持ちのまま陵人の話を聞いていた。「私は助からないということですか？」「茜は表情を崩さずに聞いた。「残念ですが、現状あなたを救う方法はありません。」「陵人は静かに答えた。「そうですか。」「茜は小さく答えた。「な、何か方法はな

いんですか！？お願いします！！茜を助けてください！！お願いします！！」岩倉は泣きながら陵人にすがった。陵人は黙ったまま茜を見つめている。「もういいよ。」「茜は岩倉に告げる。「何言ってるの！？このままじゃあなた死んじゃうのよ！？もういいわけじゃない！！」「この人の話聞いてたでしょ？今まで一人も助かってないって。どうしたって無理なんだよ。そりゃ私だって死にたくないよ！でも、私選ばれちゃったし。きっと私がいないと大変なことが起きちゃうんだと思う。ほんとは今すぐ逃げ出しちゃいたいけどさ。私がやらなきゃいけないことなんだよ。私にしか出来ないこ

となんだよ。せつかくもらった大事な役目だもん。そこから逃げ出すことは私には出来ないよ。」そう言う茜はやさしく微笑んだ。正直怖くてしかたがない。どうして自分が!? そう思う気持ちもあった。だが、茜は自分の運命を受け止めた。この短時間で目の前の世界が音を立てて崩れ去っていく中、茜は必死に現実を受け止めようとしていた。残り一週間しかない命にも関わらず、前を向いていた。目の前に迫ってくる恐怖にガタガタと足が震える。それでも目を逸らさず、懸命に前を向いている。陵人はそんな茜に心を揺さぶられた。まだ22歳という若さで、突然自分の未来を刈り取られた女の子が、懸命に自分の役目を果たそうとしている。陵人にはこの役目がどれほど重いものかということも解っていた。想像を絶する恐怖が茜に降り注いでいることも。そして心を決めた。この子を助ける! 「時間を下さい。対策を考えます。」「え、でも助ける方法はないって・・・。」「確かに現状あなたを救う方法は思いつきません。だから考えます! あなたを救う方法を!」陵人は力強い眼差しで茜を見つめた。茜はすでに自分の運命を悟り、諦めの感情を持っていたが、陵人の目をみた瞬間、そんな感情が吹き飛んだ。「この人なら、私を救ってくれるかもしれない・・・!」そう考えた。今日始めて会ったこの男に、自分の運命を預けてみようと思った。わずかな希望が見えた瞬間。茜の目から涙が溢れ、大声で泣き崩れた。一度は諦めた未来が、もしかしたら返ってくるかもしれない。嬉しかった。嬉しくて嬉しくて。そして同時に寂しさ、心細さ、恐怖心が一気に大粒の涙となって溢れ出た。岩倉は黙って茜を抱き締めた。「明日の夜また会いましょう。」そう告げ、陵人は部屋を後にした。

その足で陵人はNYXに向かった。まだ開店前であったが、確水はすでに準備のため店にいた。「あら、こんな時間に珍しいわね。」そう言う陵人を笑顔で出迎えてくれた。「何かあったの?」グラスビールを差し出して確水は聞いた。出されたビールを一気に飲み干すと、「『天翼の刻印』の者にあった。」そう確水に告げた。確水

の表情が曇る。「そう。つらいわね。」そういつて新しいグラスに
ウイスキーを注いで差し出した。そのウイスキーも一気に飲み干し
「助けたいんだ。」そう呟いた。「いくらあなたでもそれは無理よ
残念だけど。」碓水もこの刻印の重みを充分理解していた。「それ
でも助けてやりたい！」今度は力強く答える。陵人の意思の強さに
碓水は一瞬言葉を失ったが、「ずいぶんと入れ込んでるのね。」と
やさしく微笑んだ。「でもいい？あなたもこの刻印の重みを理解し
ているでしょ？この刻印から開放されたものは未だかつて一人もい
ない。気持ちはわかる。でもね。私たち『能力者』にも超えられな
い壁はあるのよ。最強の能力である『理』の力を持っていてもね。」
諭すように碓水は語りかける。それでも陵人の表情は変わらない。
むしろ何かふつきれたような、そんな表情をしていた。そして、「
一人だけ、あの刻印から生還した人がいるだろ。」碓水の顔が再び
曇る。「確かにあの人は生還したわ。でも開放されたわけじゃない
あなたも知ってるでしょ。あの人がその後どうなったか。」「わか
ってる。でも彼女を救う糸口はそこにしかないんだ。」「それはそ
うかもしれないけど・・・。」「美影さん。今あの人がどこにいるの
か教えてくれないか！？美影さんなら知ってるだろ！？」陵人が美
影に問う。碓水は険しい表情のまま「確かに知ってるけど。あなた
本気なの！？」「ああ。頼む！」陵人は真っ直ぐ碓水を見つめる。
しばしの沈黙の後、「まったく、言い出したら聞かないんだから。
ホント、そういうところ修にそっくりだわ。」そう言っただけで肩をすくめ
る。しかしその表情はすでに柔らかい。そして、メモ用紙にある場
所を書き、陵人に渡した。「一応私からも連絡入れとく。わかって
ると思うけど、相変わらず難しい人だからね。」碓水は苦笑いを浮
かべている。「ああ。俺も十年前に一度会ったつきりだけだ。」陵
人も苦笑いを浮かべた。翌日の夜、陵人は再び岩倉、茜と会ってい
た。「助かる可能性があるってホントですか！？」岩倉が声を張り
上げる。「落ち着いてください。可能性があると言っても、ほんの
一握りもありません。小さな欠片程度です。」「それでもゼロじゃ

ないってことですよね!？」茜が問う。「そういうことです。明日の朝、その可能性に会ってきます。」「どうぞよろしくお願いします!」岩倉が深々と頭を下げる。「それでは。」陵人が去ろうとすると、今まで思いつめた表情で黙っていた茜が口を開いた。「私も連れて行ってください!」「えっ!?!」陵人と岩倉が八毛る。「何言ってるの!? こういうことはプロに任せておけばいいのよ! あなたが行っても何も出来ないんだから!」「その通りです。行った先で状況が変わるとい保障は何もないんですよ? 私に任せておいて下さい。」「岩倉と陵人がたたみかける。しかし、「わかつてる。私には何もできないことくらい。でも、これは私の問題なの! ただ黙って待つてるなんて嫌なの! お願いします! 私も連れて行ってください!」茜は強い眼差しで陵人を見つめる。(この眼には弱いな・・) 陵人はそう心の中で呟く。「わかりました。明日の朝迎えにきます。」「ありがとうございます!」弾けんばかりの笑顔で茜は応えた。

翌朝、陵人は車で茜の住むマンションの前に停まっていた。なぜ一緒に行くことを許したのか、陵人は考えていた。が、すぐに別の考えに変わった。「あの人の所に女連れで行くのか。何を言われるか解ったもんじゃないな・・。」これから行く先にあるのは希望か絶望か。そんな切迫した状況にも関わらず、そんなことを考えている自分が妙におかしかった。待ち合わせ時刻の5分前に茜は現れた。ジーンズにキャミソール、その上に薄手の白いシャツを羽織ったラフな姿。(やつぱり可愛い・・。) 思わずそんなことを思ってしまった。「お待ちせしました。お願いします。」「助手席に乗り込み、茜の未来をかけた戦いに向けて、二人は走り出した。「ここからどれくらいなんですか?」最初に口を開いたのは茜だった。「ここから4時間くらいの山の中だ。それと、これからは俺に敬語を使う必要はない。俺も使わない。俺のことは陵人でいい。」「突然タメ語になった陵人に一瞬ドキツとしたが、「うん! わかった! 私も茜でいいよ。」「そのつもりだ。」「そう言って陵人は微笑んだ。その笑顔を

見た瞬間、茜に電流が走った。(な、なにこの感じ!?) どうかしたか? 「う、ううん! なんでもない!」初めて見た陵人の笑顔に、茜は一発で心を奪われそうになった。駿の時もそうだったが、陵人の笑顔には、男女問わず人を一発で虜にさせる力がある。その笑顔で今まで数多の女性を落としてきた。当然茜も例外ではなかった。

(こ、こんな時に何ドキドキしてるのよ私!) そう自分を戒めるが、陵人の顔を直視できない。「昨日は眠れたか?」「え!? あー、うん。あんまり眠れなかったかな。」なんでもない質問にもどきまぎしてしまふ。「当然だな。この状況でぐっすり眠られていたらどうしようかと思つた。」(意外と毒舌なんだ...) そんなところも茜は無意識だが好意的に捉えていた。しばらくの沈黙が流れる。この状況を打破すべく、茜は勇気を振り絞つて口を開いた。「陵人はこの仕事長い?」「十年になる。」「そんなに!?! いま何歳!?!」

「27。」「じゃあ17歳から仕事してるの!? 学校は?」「高校も大学もちやんと出てるよ。俺を育ててくれた師匠の教えで、世の中を知れ! っるのがあつてな。」「そうなんだ。あれ、育ててくれたつたつてご両親は?」「5歳のときに事故で二人とも死んじまつたよ。」「そうなんだ。ごめん。変なこと聞いて。」「構わねーよ。ほとんど覚えちゃいねーからな。」「5歳の時からお師匠さんと暮らしてきたの?」「ああ。両親ともに天涯孤独だったからな。どこも引き取り手のなかつた俺を養子にしてくれて、俺に『能力者』の道を示してくれた最高の人だよ。」「修一郎の話をするとき、陵人の表情はとても柔らかく、温かみに満ちていた。そんな陵人の顔を見つめ、茜はさらに引き込まれていった。「そういえば、これからどこに何しに行くの? 自分で行きたいって言うておいて何にも聞いてなかつた。」「ある人物に会いに行く。」「ある人物?」「ああ。『天翼の刻印』から生還した唯一の人だ。」「ええー!? だつて助かつた人は一人もいないつて...!?!」「開放された者はいないと言つたんだ。命が助かると刻印から開放されるのでは意味合いが全く違ふ。」「どうということ?」「詳しくはその人に会つた

ときに教えてやるよ。」陵人の顔が真顔に戻っていた。その後何度か休憩を入れ、陵人は茜に『能力者』や能力の話をした。事前学習のようなものだ。そして出発してから四時間後。目的の山に到着した。その山は普段人が立ち入ることはめつたになく、草や木が乱雑に入り混じり、野生動物が外敵に怯えることなく、自然にあるがままに暮らしていた。当然車で入っていけないわけもなく、二人は車を降り、登っていくしかない。「ここを登っていくの・・・？」茜は進む前からギブアップ寸前だ。「そうだ。嫌なら引き返すか？」「いい、行くよ！」まだ残暑が厳しく、山の中ということもあり、都心に比べれば気温は低いものの、歩き出せばすぐに汗だくになりそうな気候である。その上目の前には人を寄せ付けない山。そこを何の準備もせずに登っていきこうというのだから、茜の気持ちはもつともだ。するとうなだれている茜を陵人はグイッと抱き寄せた。「な、何急に！？」陵人の顔が目の前に来て、別の意味で茜はクラクラしてしまう。「普通に登ったら何時間かかるかわからんだろーが。一気に行くぞ。」そう言って左腕に茜を抱えたまま印を結び、『隼』と唱えた。その瞬間茜を抱えたまま陵人は超スピードで進み始めた。地面を一蹴りすると、一瞬で数キロの山道を進んでいく。茜は啞然としながらも必死に陵人にしがみついている。あつという間に山頂付近にたどり着いた。「よし。この辺りだな。」術を解き、辺りを見渡す。茜はというと突然のことに失神寸前だった。「大丈夫か？そろそろ離れて欲しいんだが。」「ご、ごめん・・・！」茜は慌てて離れる。「あそこだな。」陵人が目線を向けた先に、一軒の山小屋があった。山小屋というよりは、外国にありそうなログハウスに近い。結構洒落た外観である。「いくぞ。」まだふらつく足どりで茜は陵人の後に続く。(凄すぎてついていけないかも・・・) 陵人の能力を目の当りにした茜は少々弱気になっていた。扉の前で立ち止まり、大きく深呼吸をする。そして力強くノックをした。「開いてるよ。」中から若い女の声が聞こえた。「失礼します。」陵人は木製の思い扉を開けた。「よー陵人。しばらく見ないうちにすっかりいい男に

なったなー！」そういつて笑っているのは20代前半くらいの美しい女性だった。健康的な色黒の肌に、これまた豊満な胸、身長は茜より高く、170cmはあるだろうか。長くスラッとした足には光沢さえ感じる。茜が可愛い系だとするとその女性は美人系の顔立ちである。「お久しぶりです。天美^{あまみ}さん。」笑顔で挨拶する陵人。「昨日美影から連絡があつたよ。その子が例の刻印の子かい？一緒にくるとは聞いてなかったが？」「すみません。どうしても連れていけないものですか。ほら、茜。」陵人に促され、茜も挨拶をした。「ご挨拶が遅くなりました。牧村 茜といます。」深々と頭を下げる。「天美だ！まあそんなとこに突っ立つてないで中に入つて座りな！今お茶でも入れてやるから！」「お構いなく。それよりもご相談が！」「わかつてるよ！せっかちな子だねー。久しぶりに会つたんだからお茶の一杯くらい付き合つのが礼儀つてもんだろーが！」「はい。」陵人は変わらないといわんばかりの表情で笑っている。その笑顔を見て、茜は少し気持ちが楽になった。しかし、目の前で陵人を子ども扱いしている女性は、どう見ても陵人よりも年下。自分と同年くらいにしかみえない。にも関わらずあのかい態度は何なのか！？陵人も彼女に対しては頭が上がらないように見える。そんな凄い『能力者』なのか！？様々な疑問がグルグルと茜の頭を駆け巡る。「なーにばさつとしてんだい！早くこつちにきて座りな！」陵人はすでに椅子に腰かけている。天美に促され、陵人の隣に腰掛けた。「とこでなかなか可愛い娘じゃないか。どこで引つ掛けてきたんだい！？」天美がニヤニヤと聞いてくる。「人聞きの悪いこと言わないで下さい。この子は私の依頼人ですよ。」呆れた顔で陵人は答える。（こうなると思った・・・）「まったくそんなとこまで修一郎に似たんかい！」ヒツヒと笑う天美にもはや陵人は突っ込まなかった。天美が入れてくれた紅茶はとてもいい香りがして、心地良かった。リラックスマ効果があるのだろうか。一口飲むと全身の疲れが溶けていくようだった。思わず茜の顔もほころぶ。「さて。」と天美が切り出した。「相談つてのはその子に現れ

た『天翼の刻印』のことだね？」「はい。なんとかこの子を救つてやりたいんです。力を貸してもらえませんか！？」陵人が神妙な面持ちで天美に問いかける。すかさず茜も「お願いします。」とたみかけた。「陵人からあなたが刻印から唯一生還した人だつて聞きました。助かる方法を知っていたら教えてください！」天美は茜の様子を見て、やや腑に落ちないものを感じた。「陵人。お前まさかそこから先のことは何も話してないのかい？」陵人はバツが悪そうな顔で、「はい。あなたに直接会ってから話そうと思ひまして・・・」

「天美はタバコに火を付け、呆れたように言った。「まったく。肝心ことを話さないんじゃないか。」「すみません。ことがことだけに刺激が強過ぎるかと思つたんです。「ずいぶんとお気に入りのようだね。」天美がまたニヤつく。「あの、肝心なことつて・・・？」茜が思わず割つて入る。「私は確かに『天翼の刻印』から生還した。しかし、その代わりに大きな代償を背負うことになった。」「大きな代償！？」「死ねない身体になったのさ。不老不死つてやつだ。」茜の顔を驚きで硬直する。「私に刻印が現れたのは今から300年以上も昔の話だ。ちょうどあんたくらいの歳だった。その頃から私の時は止まっちゃうてるんだよ。」天美の態度と見た目のギャップはそういうことだったのか。「でも、どうしてそんなことに・・・！？」「そうだね。まずは、どうやって私が『天翼の刻印』から開放されたのかを話すでしょうか。私に刻印が現れた時、私はすでに能力に目覚めていた。その能力を使つたんだ。」

「天美さんの能力つて？」「陵人。」天美に促され、陵人が話し出した。「天美さんの能力名は『確率』だ。あらゆる物質の存在や現象の起こりうる確率を操る能力。」「えっと・・・。どういうこと??」茜にはチンプンカンプンだった。「百聞は一見にしかずだ。」

「そう言つて天美は目の前に置いてあるTカップに手をかざした。「今からこのカップが存在する確率を下げていく。」そう言つて天美は神経を右手に集中した。すると、目の前のTカップが徐々に揺らめき始め、次第にその形が薄れていき、1分もしないうちに完全

に姿を消してしまった。今の今まで目の前に存在していたカップが
跡形もなく消え失せたのを見て、茜は驚きのあまり言葉を失い、目
を真ん丸くして陵人に顔を向けた。「魚かお前は。」口をパクパク
させていた茜に陵人の冷静な突っ込みが入る。「これが私の能力。
確率を操る力だ。この力を使い、私は『天翼の刻印』から生還した。
」まだ目の前で起きた現象の整理が出来ていない茜を置いていき、
天美は話を続けた。「まず一番大事なことを教えておいてやろう。
この『天翼の刻印』には有効期限が存在するんだ。」「有効期限！
？賞味期限みたいなものですか？」「茜が真面目に質問する。「賞
味期限じゃなく消費期限だな」あくまで陵人は冷静に突っ込む。「
どっちでもいいわ！とにかく、そこがこの刻印から逃れる唯一のポ
イントだ。」「えっと、つまり・・・有効期限が過ぎれば、刻印の
効力は無くなるってことですか！？」「なかなか賢いじゃないか。
そういうことだ。」「馬鹿にされていることにも気付かず、誉められ
たのとわずかな希望が見えたことで茜の顔がほころぶ。「でもどう
やってその有効期限から逃げるんですか？」「まず私は能力を使
い、自分自身が存在する確率を下げた。消えるか消えないかのギリ
ギリまでね。そうすることで同時に刻印が存在する確率も下がる。
やつらは刻印の強い波動を目印にやってくる。存在が薄れた刻印で
は見つけることが出来ないんだよ。その状態で有効期限の一週間を
耐え忍んだ。やつらに見つかからないよう最深の注意を払いながらね
そして、見事期限を過ぎた刻印は私の身体から消え失せた。」「そこ
まで話すと天美はタバコに火をつけた。茜と陵人は天美の話を余す
ことなく聞いていた。吸った煙を勢い良く吐くと、天美は話を続け
た。「見事に刻印が消えたのを確認してから、私は自分の存在確率
を上げた。だが、その反動で今度は不老不死の身体になっちまった
ってわけさ。」「感慨深げに天美は煙を吐く。「反動って？」「茜が
恐る恐る尋ねる。「私の能力で確率を操られたモノは、その反動で
驚異的な力を発揮してしまう。一度存在の確率を下げたモノの確率
を再び上げた場合、反動でその存在する力が異常に上がっちゃう。

逆に一度存在の確率を上げたモノの確率を再び下げたとき、その存在はもろく、はかないものになっちまうってことだ。「茜には当然チンプンカンプンだった。天美、陵人の目には茜の頭上に？マークが良く見えた。(ような気がした)」「すみませんが、見せてやってもらえますか？」陵人が呆れ顔で助け船をだす。天美はさもめんどくさそーに「しょうがないねー」。「今度は茜の目の前に置いてあるカップに右手をかざした。「まず、このカップの存在をギリギリまで下げる。」「すると、先ほどのカップのようにカップがユラユラと揺らめき始め、徐々にその姿が消えていく。今にも消えそうなので、「この状態から今度は確率を上げていく。」「するとカップの姿が徐々に戻り始め、先ほどとなんら変わらない姿に戻った。茜は元に戻ったカップをまじまじと見つめ、「どこも変わった様子はありませんけど・・・?」「見た目はな。陵人。「天美に促され、陵人はカップを手に取ると、それを思いつきり床に叩きつけた。「ちよつと！いきない何するのよ!？」驚いた茜を尻目に、陵人はカップに視線を落とす。「見てみる。」「わけが分からず、茜は言われた通りカップを見てみる。「何これ!？ヒビどころか欠けた様子も全くない!」「これが反動の力というやつだ。これを人間に使った場合、私のような不老不死が生まれてしまう。」「実例を見せられ、ようやく茜にも理解することが出来た。これが天美が『天翼の刻印』から生還し、不老不死の身体を手にした真相だった。話が一段落すると、天美はキッチンに戻り、新しいカップを二つ持ってきて、紅茶を入れなおした。陵人はここまでの話は全て知っていた。これまでのやり取りは全て茜のためだ。自分自身の運命と立ち向かっている茜には、全てを知った上で戦いに望んで欲しいと感じたからである。入れなおした紅茶を一口飲むと、天美が切り出した。「さて、そろそろ本題に入ろうか。陵人。」「ええ。」「お前が望んでるのはこういうことじゃないんだろ?」「はい。『天翼の刻印からの開放完全勝利です。この方法では試合に勝って勝負に負けたようなもの。別の方法を探さなくては。』陵人の顔が決意に燃える。「言ってく

れるじゃないか。「自分は勝負に負けたとはつきり言われ、天美は口元を歪ませた。「失礼だよ陵人。」茜はハラハラしながらも割って入る。「構わないよ。事実だからね。」天美はまたヒツヒツと笑っている。当の陵人も全く気にしていない様子で話を続ける。「他に何か取っ掛かりになるようなものはありませんか?」「そうだね。強いて言うならば鎖かね。」「鎖?」「刻印が完成するまであと何日だい?」「あと五日ですが・・・?」「そうか。」天美は少し考え込んでいる。「何かあるんですか!?」「この刻印は二つの刻印が鎖によって結ばれている。この鎖を断ち切ってしまうえば、刻印は完成されないということだ。五日後の時点で完成されていなければ、刻印は効力を失う。」「それは本当ですか!?」「陵人の顔がまるで勝利を手にしたように活気づく。「話を最後まで聞け。この刻印が天界のものであるということを忘れるな。並大抵の力では傷をつけることさえできない。しかも鎖は体内で結ばれている。そんな強大な力を人の体内で使えば、内臓はことごとく破裂。最悪の場合身体は木っ端微塵だ。まだある。鎖は断ち切られてもすぐに再生を始める。そして一度断たれた鎖は再生後より強固なものになるんだ。」「茜は一瞬自分の身体が木っ端微塵になるのを想像したが、すぐにかき消した。「陵人。お前刻印を別の者に移すことは出来ないのかい?」「天美が唐突に尋ねる。「この刻印に関しては無理でしょう。他の呪いの類であれば可能ですが。この刻印は天界の意思を持って現れていますから。」「私になら出来るんじゃないのかい?」「確かに過去に選ばれたあなたなら刻印も受け入れるかもしれません。ですが今度はあなたが刻印の犠牲になってしまいます。それでは完全勝利とは言えない!」「そうですよ!これ以上迷惑はかけられません!」「茜も声を張り上げる。「しかし、他に手があるかい?」「天美の問いかけに沈黙が流れる。しばらくの沈黙の後、陵人が何かを思いついたように顔を上げる。「天美さん。鎖が存在する確立を下げることができますか!?」「まあ出来ない事はないと思うが・・・?何をする気だい??」「やはり鎖を断ち切りましょう。」「茜の脳裏

に木っ端微塵の自分が再び浮かびあがる。「ちよつ、ちよつと待つて！それはさつき無理だつてことになつたじゃない・・・？」「安心しろ。お前の中でやるわけじゃない。」「どうということだい？」天美も陵人の考えが読めない。陵人は自信ありげな表情で天美に問う。「刻印の片翼のみを天美さんに移せば、わずかですが鎖は茜の身体から出ますよね？」天美は陵人が何を考えているのかようやく理解することができた。「なるほどな。さすがというべきかね。」「天美は不敵に笑っている。が、すぐに表情を戻すと、「しかし陵人この方法もかなりのリスクを要するぞ？本当に出来るのかい？」「いくつか準備は必要になると思いますが、やれます！」「どれくらい抑えてられる？」「丸三日くらいなら問題ないでしょう。」「まあ鎖の長さから考えてもそれが限界だろうからな。」「茜はこれまた当然二人の考えは理解できずにいる。ここまでくると茜も申し訳なさそうに質問する。「あの・・・。どういうことでしょう？」「てつきりまた馬鹿にされ、呆れた顔を見せると思っていたが、意外にも陵人は茜を馬鹿にする様子もなく、真剣な面持ちで戦法を話し出した。「いいか？まず、お前の身体の刻印を半分だけ天美さんに移動させる。そうすることで、体内に埋まっている鎖がお前と天美さんを繋ぐように外に出てくる。その出てきた鎖を断ち切るんだ。そして再生が始まる前に、両側の鎖の根元を封じる。その状態で期限を過ぎることが出来れば、俺たちの完全勝利というわけだ。さほど難しくないだろ？」確かにこの方法は茜にもすぐに理解することができた。しかし、理解した今、先ほどの陵人と天美の会話が気になつた。「丸三日つてさつき言つてたけど、まさか丸三日鎖を封じているつもり！？」「その通りだ。」「陵人はさも当然のように答える。「そ、そんな・・・。無理だよ！？丸三日も休みなしで力を使うなんて！陵人の方が死んじゃう！」茜はこんなやり方には賛成できませんと声高々と言い放つた。しかしあっさりと返されてしまった。「余計な心配だな。余裕とは言わんが問題ないレベルだ。これ以上の策はない。お前は残り時間ぼけつとしてりゃーいい。」「そんなの

無理だよ！陵人と天美さんが頑張ってくれてる時に何も出来ないなんて・・・！」天美は冷静に割って入る。「じゃあお前さんに何かできることはあるのかい？『能力者』でもないお前に何が出来る？何もできないから陵人を頼ってきたんじゃないのかい？」茜は何も言えなかった。天美の言うとおりだったからである。自分は何も出来ない無力な存在だ。そのせいで天美や陵人を危険なことに巻き込んでしまった。茜は悔しかった。何も出来ない無力な自分に腹を立てた。そして、悔しさの涙をこぼした。そんな茜を陵人は優しく抱きしめた。茜は突然のことに涙が止まった。陵人は静かに語りかける。「お前は自分が助かることだけを考える。俺もお前を助けることしか考えていない。信じる。」茜は陵人の身体に手を回し、力いっぱい抱きしめた。そしてまた大粒の涙をこぼした。最後に陵人はこう呟いた。「二人で帰ろう。」茜は黙ってうなずいた。

陵人は早速準備に取り掛かった。今回陵人は『転異』、『封縛』、『天剣』という術を使う。『転異』は呪いや霊障などを他の者に移し、『封縛』は怪異の動きを封じ、拘束する術である。この術は普通の怪異や『能力者』に対しては絶大な効果を示すが、今度の相手はまがりなりにも天界である。天界は気の波動が根本から違う。よって陵人の術も大きな効果は望めないのである。そのため、対天界用に術を強化しなければならぬ。『天剣』はもともと天界の者にも効果を発揮するように構築しているため、このまま使うことができる。陵人は『封縛』の強化に取り掛かった。今後のことも考え、陵人は新たな術を構築することにした。いうなれば対天界用の『封縛』である。新たな術を生み出すには、まず頭の中で術のイメージを構築する。次に陵人の血液を使い、それを文字に起こす。必要なのは術の名称、発動条件、効力の三項目である。最後に起こした文字に右手をかざし、『理と成す』と唱える。文字が陵人の身体に吸収され、術の構築が完成する。陵人は対天界用の『天障封縛』を生み出した。決戦は期限の三日前。今から二日後である。それまでの時間、二人は天美のログハウスに泊まることにした。まだ時間があるため、一

度戻ってもよかったが、その方がいいだろうということになった。
「ちようどいろいろ不足していたもんがあつたんだ。お前たち買出しにいつて来い！これから何日間かここにいるんだから必要な物もあるだろう。」天美に言われ、二人は滞在中必要なものを揃えるため、山を降りてから車で30分ほど走つたところにある街に向かつた。「街に下りる前にお前に術をかけておく。有名人が男と二人で買い物しているところを見られたらまずいだろ。」そういつて『擬立』を使った。人の認識を惑わす術で、他人からみるとまるで別人のように見える術である。これで堂々と二人で買い物ができる。茜はちよつとうれしかった。二人は食料や天美に頼まれていたものを手際よく購入していく。あらかた買い終えたところで、二人は休憩をとることにした。ファーストフード店に入り、ハンバーガーと飲み物を購入し、店内の座席に着く。茜は楽しそうにハンバーガーをパクついている。陵人はサクツと食べ終わると、早々に煙草に火をつけ、ハンバーガーよりも旨そうに煙を吐いた。「食欲はあるんだな」「緊張したらお腹すいちゃつて。それにこんなどうとうと店内でハンバーガー食べるのなんて久しぶりだからさ！」「茜がうれしそうに笑っている。「また連れて来てやるよ」「ホンとに！？やつたー」「弾ける笑顔が光る。陵人の顔もほころぶ。命をかけた戦いの前のほんの束の間の休息を二人は楽しんでた。二日後には茜の未来をかけた戦いが始まる。勝てるという保障は何はない。だが、大丈夫だと思つていた。何の根拠もないが、二人は勝てると確信していた。いや、勝つんだ！という強い気持ちを持つていた。束の間の休息を終えると、二人は大荷物を抱えて車に戻り、天美の口グハウスへと戻つた。「ずいぶん買い込んできたね。」「天美は二人の抱えている大荷物を見て呆れ顔でいつた。「茜はあと五日間ここに滞在することになりますからね。職業柄いろいろとお手入れが必要なんだそうです。」「陵人が答えると、茜はテへつと舌を出した。その後の二日間で、三人は綿密な打ち合わせをした。といつても茜は横に座っているだけで、ほぼ陵人と天美が喋っている。術の発動の夕

イミングや、不足の事態に陥った際の対処法など、事細かに作戦を立てた。それが終わると、今度は茜が喋る番である。仕事の事や、私生活の話などを楽しそうにお喋りした。茜の緊張をほくそうと、二人も出来る限り参加した。そして、あっという間に二日が過ぎ、とうとう決戦の日が訪れた。

「いよいよだね。覚悟は出来てるかい？」天美が二人に問う。二人は黙ったまま見つめ合い、天美の問いに大きく頷いた。「よし。茜、服を脱ぎな。恐らく刻印はすでに上半身に移動しているはずだから上着だけでいい。」「わかりました。」「茜が上着を脱ぐと、刻印が丁度へソ下辺りまで上がってきていた。胸の刻印との長さは30cmほどである。」「予定通りだね。最後にもう一度作戦を確認しておくよ。」「まず俺が刻印を天美さんの右手の掌に移します。」「そして私とその刻印を通して鎖の存在確立を下げる。」「限界まで下げたところで、『天剣』を使つて鎖を切り、すぐに『天障封縛』で鎖を封じる。」「茜も黙って頷いている。」「よし。始めよう。」「陵人は印を結び、刻印に触れると、『転移』を唱えた。刻印が印を結んでいる陵人の指に張り付く。「あ、熱い……！」茜は陵人の印から発せられる念の熱を感じ、表情を曇らせる。陵人はそのままゆつくりと刻印をもち上げようとしますが、刻印が重く、なかなか茜の身体から離れようとしない。「ぐ……！やはりかなり重いな……！」陵人の表情が険しくなる。全神経を集中させ、念を右手に注ぎ込む。すると次第に刻印が茜の身体から離れていく。完全に刻印が茜の身体から離れたところで、「天美さん！お願いします！」右手を前に突き出し、掌を広げて待っている天美に陵人は刻印を移動させた。「この感じ……！懐かしいね……！」天美は不敵な笑みを浮かべながらも、全神経を右手に集中させた。「いくよ！」天美は鎖の存在を下げていく。といっても、天美と茜にはこの鎖は見えていない。鎖は天界の代物であるため、現世のものはいかに刻印に選ばれたものであっても、自身の能力に「見る」能力が無い限り鎖を見る事は出来ないのである。今の鎖が見えているのは『凝』を使つた陵人だ

けだ。「いいかい！私と茜にも鎖が見えるようになったら、勝負だよ！現世の者にも見えるくらい存在が下がれば、断ち切った時の衝撃も少なくすむ！」。「わかりました！『天剣』」「『天剣』はその名の通り「剣」である。陵人の能力によって具現化されたもので、日本刀のような形状をしている。この剣は怪異、つまり現世のものではないものを切る剣である。天界の力にも等しく効力を発揮するが、生身の人間を傷つけることは出来ない。陵人は天剣を構え、天美の合図を待っている。天美は全力で鎖の存在を下げしていく。「さすがにしぶといじゃないか・・・！」天美の額から汗が滴り落ちる。どれくらい時間が経ったかわからない。恐らく数分のことだと思われるが、極度の緊張感から、逆にその時間が異常に長く感じられた。「天剣』を握る陵人の手も汗ばんでいる。茜に関しては天美の念を至近距離で浴びているため、疲労感が半端なく、全身汗だくになっていた。「そろそろだよ・・・！」そう天美が言うと、徐々に鎖がその姿を現し始めた。刻印の鎖は太さが2cmほどで、細かい鎖が何重にも絡みあつて出来ていた。「陵人・・・！！これが限界だ・・・！！やりな！！」天美の合図で陵人は『天剣』を構え、一気に振り下ろす。「おおおおおー！！！！キンツ！！！！という金属を切った時の音とともに『天剣』が見事に鎖を切り裂いた。具現化された鎖の破片があちこちに飛んでいく。鎖を断ち切った衝撃で、茜と天美も後方1メートルほど吹き飛ばされた。天美はなんとか体制を整え、倒れることはなかったが、茜はおもいつきり尻餅をついた。「キヤー・・・！！」茜の叫び声がかきまわす中、陵人はすぐに『天剣』を解除し、間髪いれず鎖の封縛にとりかかる。両の手を伸ばし『天障封縛』を発動させた。すでに再生を始めていた鎖の動きが止まる。同時に天美の能力から開放された鎖は再び肉眼では捉えられなくなった。陵人は『凝』を発動させたため、鎖の行方が見えている。状況が見えない茜と天美。「陵人、どうなった！？」天美が問いかける。「大丈夫です。封縛に成功しました。鎖の動きは止まっています。」陵人が冷静に答える。「そうか。まずは一安心だ

な。「天美が安堵の息を漏らす。茜はというと、強大な『能力者』達の攻撃的な念の影響で疲労困憊である。「大丈夫か、茜？」陵人は静かに問いかける。「うん・・。大丈夫。ちよっとお尻が痛いけど・・。」笑顔を浮かべる余裕はないが、精一杯の元気を振り絞って答えた。「そうか。よかった。」陵人はやさしく答える。「あとは残りの3日間、陵人が持ちこたえれば、我々の勝利だ!」「任せてください。必ず勝ちます!」陵人は強く答える。陵人は鎖の封縛がやりやすいよう、『天障封縛』を加工した。『玉』という術を使い、手元にバレーボールほどの念の塊を作り、そこを循環器にして鎖の封縛を行なった。「これで二人は自由に動けます。ただし、このログハウスからは出ないようにしてください。術の効力はこの建物内でしか効きません。」二人に注意事項を告げ、陵人は座禅を組み、封縛に集中した。なんとか起き上がることができた茜が陵人の側に寄る。「こんな状態で三日間も過ごすの・・!？」茜が心配そうに陵人を見つめる。「大丈夫だ。前にも言ったが、余裕とは言わんが問題ない。それよりもお前は休め。俺と天美さんの念を至近距離で浴びたんだ。身体が疲れきってるだろ?天美さん、風呂にでも入れてやってください。」「あいよ。」天美は風呂の準備をしにその場を離れる。二人きりになると、沈黙が流れた。茜は自分の為に命がけで頑張っている陵人にどう言葉をかけていいのか解らなかった。ただ側にいることしか出来なかった。「あまり近くでじろじろ見るな。気が散る。」陵人はあっさり茜の心を打ち砕く。しかし茜はそんないつもの陵人に心から安心した。しばらくして天美が戻ってきた。「おや?お邪魔だったか?」「余計な気遣いです。」陵人があっさり答える。天美はニヤニヤしながら「風呂が沸いたよ。ゆっくり入っといで。」と茜に伝える。「でも・・。」「俺は大丈夫だ。まだあと三日もあるんだぞ。今は休め。全てが終わってからたっぷり礼はしてもらおう。」陵人はフツと微笑む。「うん!なんでも言って!」茜は元気に答えると、よろける身体をなんとか支えながら浴室に向かった。

それから三日間、陵人は不眠不休で刻印の封縛を続けた。天美から集中が途切れるからあまり話しかけるなと言われた茜は、ただただ側にいることしかできなかったが、自分にできることはこれくらいだと、陵人の側で見守り続けた。そして運命の三日目午前0時。今まで一言も言葉を発せず封縛を続けていた陵人に反応があった。

「刻印の力が薄れていく・・・。」天美もその場に駆けつける。陵人の言葉通り、徐々に鎖が短くなっていき、茜と天美の刻印も薄くなっていく。そして数分後・・・二人の刻印は完全に消滅した。刻印が消えたのと同時に天美は外に出た。辺りを注意深く確認する。使者がくる気配はない。「やったね。陵人。」天美が小さく呟く。口グハウスに戻り、「使者が来る気配はない。私たちの完全勝利だよ！」その言葉を聞き、陵人は術を解いた。「ふうー・・・。」大きいため息を吐き、おもいつきり伸びをする。「大丈夫かい?」「ええ。問題ありません。茜、大丈夫か?」陵人が問いかけると、茜は言葉よりも先に陵人に抱きついた。「ありがとう・・・!」茜が涙声で呟く。陵人は優しく茜を抱きしめた。「無事でよかった。これで帰れるぞ。」「うん・・・。一緒に帰ろう・・・!」「ああ。」「二人は強く抱きしめあう。」「ほらほら、あんまり無理するんじゃないよ。問題ないにしても力を酷使したことには変わらない。とりあえず今はゆっくり休みな。」「天美に促され、二人はゆっくりと腕を解く。」「時間も時間だしな。明日の朝出発にしよう。茜も休んでくれ。」「わかった・・・!」「今風呂沸かしてやるから入ってきな!三日も入ってないんだ。気持ち悪いだろ!?」「ありがとうございます。ついでに食い物と酒をお願いできますか?」「あいよ!」天美は気持ちのいい笑顔で答えてくれた。風呂に入り、疲れをお湯の中に逃がした陵人は三日分のエネルギーを取り戻すべく、食べて、飲んで、飲んで、食べてを繰り返した。目の前で魔法のように食べ物が消えていくのを茜は口をポカンと開けたまま見つめていた。「す、すごいね・・・。」「身体が取り戻そうとしているんだろうよ。」「天美はタバコを吹かしながら笑っている。ひとしきり食べ終えた陵人は夕

バコに火をつけ、旨そうに煙を吐いた。「落ち着いたかい?」「ええ。ごちそうさまでした。」陵人が満足気に答える。「もう大丈夫なの!?三日間全く休んでなかったのに!」「体内に吸収したエネルギーをそのまま念に変換できるよう理を作っているからな。問題ない。」「眠くないの!」「寝れないことはないけど、寝なくても大丈夫だ。」「そ、そうなんだ…。能力者って凄いなだね。」「そういつてみたが、内心はいつたいどんな身体してんだと呆れていた。自分のために死力を尽くしてくれた手前口には出さなかった。」「お前は食べないのかい?」「天美に言われ、ようやく茜は自分がまだ何も食べていないことに気付いた。だが、陵人の食いつぶりに圧倒された茜はそれだけでお腹な一杯になっていた。それでもせつかく天美が用意してくれたからと思い、少しだけ食べることにした。ホントに少しだけ…。」「しかしまーホントになんとかしちゃうとはね。さすがというかなんと言うか。けど、大丈夫なのかい?末端とはいえ天界に逆らったことには変わりない。立場的にまずいんじゃないのかい?」「大丈夫ですよ。へたしたらこの件を知りもしない可能性するあるやつらですからね。ごちゃごちゃ言ってきたら逆切れしてやりますよ!」「陵人は意味深な笑みを浮かべて答える。「あの、立場的にまずいつてどういうことですか?」「茜が心配そうに尋ねる。「陵人はね、天上理事会常任理事の一人なんだよ。」「天上理事会!?常任理事??」「茜は久しぶりにチンプンカンプン顔を浮かべて見せた。「天上界にも理事会つてのがあるんだ。メンバーのほとんどが神だ。陵人は人間界で唯一の理事会メンバーなんだよ。」「

「陵人、神様と知り合いなの!?てか神様ってホントにいるの!?」「お前の思い浮かべている神様とはだいぶ違うと思うけどな。神についていても元は俺たちと同じ人間だ。」「そうなの!?」「はるか昔に俺たちのような能力者が突然変異で生まれた。それが今の神々だ。やつらはその驚異的な能力を使って天上界を造ったわけだ。そして人間界をはじめ、魔界、冥界、霊界の管理を始めた。天界って

のはいわば管理体制の総称を言うんだ。」「天界って世界があるわけじゃないってこと?」「この数日で理解力が上がったな。天界は神々が住む神界、死者の統制を司る霊界、人間外の突然変異によって生まれた者たちが住む幻獣界の三つからなりたつ管理システムの総称だ。」「魔界とか冥界っていうのは?」「魔界は人間界の闇の部分、冥界は神界の闇の部分だ。これらは二つの世界のもう一つの顔。無くすことは出来ないが、しっかりと管理、統制していかねればならない連中だからな。また枠組が違うんだ。」「へー・・・!なんか陵人ってとっても凄い人だったんだね・・・!!ん・・・!?てか今馬鹿にしたでしょ!」「遅いんだよ。まあお前にはまったく関係のない世界の話だ。お前は今まで通り芸能界で頑張ればいい。」「うん!わかってる!」茜は元気に即答してみせた。興味がないわけではなかった。ホントはもつと話を聞いてみたかった。しかし、陵人がこれ以上踏み込むなど言っているのがわかった。自分にこれ以上関わって欲しくないという想いが直感的に伝わったのだ。しかし茜は密かにまた聞けるチャンスを狙っていた。だからあえて今はこれ以上聞かないことにしたのだ。「さて、話はまとまったかい?それじゃー、今夜はとことん付き合ってもらおうよ!」天美はすでに一升瓶を抱えてうずうずしていた。「相変わらず容赦ないですね。いいいでしよう!」陵人もやる気満々である。(やつぱりついていけないかも・・・)茜は目の前のバケモノ達にただただ啞然とするしかなかった。

この日の夜、陵人と天美は明け方まで飲んでた。茜も途中までは付き合っていたが、途中で限界に達し、先に寝てしまった。「そういえば、最近『暁』の連中の動きが活発のようだね。」「ええ。阿頼耶式も相当力を入れて捜査してますけど、中々捕らえられないようです。このままでは恐らく『時の番人』も動きだすことになるでしょうね。」「『時の番人』が!? MAINDSもいよいよ本気でやつらを潰す気になったんだね。」「いい加減鬼ごっこも飽きましたからね。」「しかし陵人、そうなるとお前も知らん顔してられな

いだろうか?」「まあそうなりますね……。単独で行動する方が性に
あつてるんですが。」「時の番人」MAINDS最強勢力であり、
最高クラスの能力者達13名で構成されている。陵人もそのメンバ
ーの一人である。普段あまりMAINDSとは関わりを持たない陵
人だが、時の番人としての召集には応じなければならぬ。「今の
ところそういった報告は受けてませんから、しばらくは大丈夫だと
思いますよ。」「そうかい。まあ暁の連中でさせお前には迂闊に手
はだせんだらうが。用心することだ。」「ええ。俺の前でちよろち
よろふざけたまねしたら、その時は容赦なく皆殺しにしてやります
」凍りつくような笑みを浮かべて答える陵人に、さすがの天美も寒
気を感じた。(最強の能力者が……。)

明け方まで飲んでいた陵人は、昼前まで休むことにした。三日分の
睡眠には程遠いが、陵人には十分、むしろ寝すぎたくらいだった。
固まった身体をほぐしながら、陵人が寝室から降りてくると、茜は
すでに荷支度を済ませ、天美とお茶を飲んでいた。「おはよー！よ
く眠れた?」「茜の爽やかな声が届く。「ああ。ちよつと寝すぎたな
今何時だ?」「11時過ぎだよ。」「もうそんな時間か。わりー、
すぐに準備するから。天美さん、シャワー借りますよ。」「気だるそ
うに浴室に向かう陵人に「ゆつくりでいいよ!」と茜が声をかける。
15分ほどで浴室から出てくると、着替えを済ませ、天美が入れて
くれた最後のお茶を味わうように飲んだ。「いろいろとお世話にな
りました。この借りは必ず。」「気にするな!久しぶりに私も楽し
かったよ!またいつでも遊びにきな。そうだ!今度は駿つて子も連
れてくるといい。」「ありがとうございます。あいつも喜びますよ。
美人には目がないですから。」「300歳超えたババアにもかいかい!
?」「三人の笑い声がこだます。「本当にありがとうございます。
このご恩は生涯忘れません。」「茜は別れにちよつとウルウルきてい
る。「ああ。元気だな!」「はい!天美さんも!」「私は不死身だ
よ!?!」「そうでした。」「再び三人の笑い声が響きわたる。「それ
じゃあ。」「ああ!」「硬い握手のあと、陵人と茜は天美のもとをあ

とにした。二人が見えなくなるまで天美は手を振っていた。「さて、あの二人はうまくいくのかね・。」「楽しそうにそう眩き、天美はログハウスに戻っていった。

第三章「三人一泊温泉旅行」

刻印の事件から数日後、茜は無事芸能界に復帰した。関係者には体調不良ということにして仕事を休んでいた茜は、失いかけた信用を取り戻すべく、精力的に仕事をした。もともと人を惹きつけるオーラをもっていた茜は、すぐに信用を取り戻し、グラビアだけでなくバラエティーやドラマにも出演するようになり、あつという間にトップアイドルまで上り詰めた。事件以後も陵人と茜は途切れることなく関係を持ち続けた。といっても男と女の関係ではない。茜は告白こそしなかったが、正直身も心も陵人に捧げるつもりでいた。しかし陵人がそれを拒んだ。決して茜のことが嫌なわけではなかった。いつもの陵人ならとくに手を出しているが、茜に関しては違った。陵人自身そんな気持ちに自分がなってしまったことに戸惑っていた。そんな陵人を見るのが駿は面白くてたまらなかった。

駿はなんとか二人の間を取り持ってやろうと積極的に動いた。それまではメールや電話でしか連絡を取っていなかった陵人に二人で飲みに行つて来いと散々促したが、なかなか陵人が動かないため、業を煮やした駿はまず、自分も加わった三人で飲みに行こうと提案した。茜は当然行くと返事をし、陵人も三人ならと了承した。事件から数日後、三人は集まることになった。場所はもちろんNYXである。久しぶりに陵人に会う茜は明らかに緊張していた。前の晩はドキドキして眠れなかったほどだ。一方陵人も同様に緊張していた。(この俺が女相手に緊張！？) 陵人は心のモヤモヤを振り払うようにこの数日の間に二桁の怪異を退治して回った。

そして当日、最初に待ち合わせ場所に到着したのは陵人だった。喫煙スペースでタバコを吸いながら待っていると、そこに茜が現れた。「久しぶり。でもないか・・・」おどけた顔を見せる茜に陵人の心臓は鼓動を強くする。「そうだな。元氣そうでよかった。とりあえず座れ。」そういつて茜を隣に座らせ、『擬立』を唱えた。「あり

がと！ホント便利な術よね。私たちには持つてこい！」「駿だけなら使わないんだけどな。さすがにお前と駿が街中で一緒にいたらまずいだろ。」「そうだね。」久しぶりに陵人の笑顔をみた茜は自分の気持ちをあらためて思った。（私は陵人が好きだ・・！）茜の笑顔を見て陵人も何か暖かく、そして熱いものを感じていたが、それが何なのか良く分からず、若干の戸惑いを覚えたが、不思議と心地良く感じられた。そのためか、陵人は特に考え込むことなく、茜と接することができた。

しばらくお互いの近況を話していると、15分ほど遅れて駿が到着した。「わりー、待たせたな！」「いつものことだ。さつさと行くぞ。」陵人が立ち上がると、茜は陵人の袖を引っ張り、「ねー、一応私初対面なんだけど・・。」「なんだそうなのか？てつきり仕事で会ってるのかと思った。」「そんな話はしてねーだろ、陵人。」「そーいやそーうだな。でも今さら自己紹介が必要か？お互いトップスター同士。周りの人間はみんなお前たちのこと知ってるぞ。」「そりゃそーだけど。でも今私別人に見えてるんでしょ？」「それなら心配ない。駿にはお前が牧村 茜だつてちゃんと認識できている。」「そうなの！？」「うん。ちゃんと見えてるよ。茜ちゃん！」「そうなんだ。えっと、初めまして！よろしくお願いします！」茜が深々と頭を下げる。「こちらこそ。気は使わなくていいよ。陵人と同じように接してくれればいい。もちろん敬語もいらぬい。」「陵人とはまた違った魅力をもった駿に、茜は好印象だった。」「ありがと！じゃーいこっか！」「うん！」そして三人はN Y Xに向けて歩き出した。

N X Yではいつものように碓水が陵人達を待つていてくれた。「いらつしやい。陵人。駿。それに、牧村 茜ちゃん。」初めて碓水に会う茜は天使のようなその容姿と声に女ながらドキドキしてしまつた。「は、初めまして。牧村 茜です。」これまた深々と頭を下げた。「碓水 美影です。こないだは大変だったわね。今日はゆっくりしていつて。」「はい！ありがとうございます！」三人はいつも

の部屋に行き、酒と料理を適当にオーダーした。「ねえ！美影さんてメチャメチャ綺麗だね！私女同士なのに思わずうつとりしちゃった！」興奮気味に話す茜に駿がかぶせていく。「だろ！？美人だし、優しいし、料理も最高に美味いんだよ！」「そうなんだー！楽しみー！」二人で盛り上がっていると、陵人がため息混じりに付け足す。「お前らはあの人の恐ろしさを知らないからな・・・」「そりゃそうだろ！俺らはNYXのマスターで美人の美影さんしか知らないんだから。」駿が笑っていると、「美影さんと陵人ってどういう関係なの？」茜が興味深深の様子で聞いてくる。「一言で言えば母親みたいなもんだな。ガキの頃から師匠と一緒に面倒を見てくれてる。」「ええ！？美影さんていくつ！？」「正確には知らんけど40過ぎなのは間違いないな。」「うそー！？陵人とそんな変わらないと思ってた・・・。」「まあ年齢聞かなきゃわかんないよな。俺も最初に聞いたときは信じられなかった。」駿が大きく頷いている。「俺がガキの頃はまだ阿頼耶式総長だったからな。あの顔でいつたい何人の能力者を血祭りに上げたかわからん。」「そ、そうなんだ・・・。」「茜が若干ビビッているところに確水が酒と料理を持って現れた。」「なーに陵人。自分のことを棚に上げてよく言うじゃない。やってることはあなたの方が凄いと思うけど。」「伝説の『鬼女』には敵わないよ。」「時の番人の一人がよく言うわよ。」「好きでやってるわけじゃないからね。」「最強の能力者が聞いて呆れるは。」「二人の静かな戦いに二人はただただじっとしていた。迂闊に動いたらまずいと本能的に感じたからだ。そんな二人の様子に気付いた確水が二人に笑顔を向ける。「ごめんなさい。この子ったら昔からこうなのよ。いつものことだから気にしないで。」「そういつて確水は部屋を出ていった。緊迫した空間からやっと開放された二人は一斉にため息をついた。

「なんかすごい迫力だったね・・・。」「史上最恐の親子喧嘩だな。」「二人は苦笑いを浮かべていると、「くだらねーこと言ってるんじゃないか。」「と陵人に一蹴されてしまった。「さ、さて、じゃー飲みます

か！」「う、うん！乾杯しよー！」「まったく・・・。」陵人は呆れながらもグラスを高々と上げた。この日から三人は時間が合えばこうして集まるようになった。陵人と茜の進展はなかったが、陵人はなんとなくこのままでもいいと感じていた。茜はチャンスとタイミングさえあればと思いつつ、もう少しこの関係でもいいのかなつと感じていた。そんな二人の様子を感じ取った駿も、あえて気を使わず、二人の友人として接していた。

そんな関係がしばらく続き、11月も終わりに挿しかかろうとしていたある日、いつものように三人で飲んでいると、「ねえ、私陵人の家に行ってみよう！駿君はいつたことあるんでしょ！？」「何回かね。」「私も行きたい！！ねー陵人！」甘えた声で陵人の袖を引つ張って見せる。最初こそダメだと突っぱねていた陵人だったが、こういうことに関しては茜の方が数倍上手である。あつという間に落とされ、宅飲みを決定させられてしまった。たじたじになる陵人を見て駿は腹を抱えて笑った。日時まで設定されてしまった陵人もはやどうすることも出来ず、「好きにしてくれ。」と捨て台詞をはくしかなかった。

数日後、陵人の自宅マンションに荷物が届いた。中には大量の日本酒が入っていた。送り主は神崎 修一郎。「これが届いたってことはほちぼちか・・・。」修一郎が陵人のもとを訪れる時は、その数日前にいつもこうして大量の酒が送られてくるのだ。そしてその酒を二人で飲むというのが最近のパターンだった。それから三日後、修一郎が来ないまま、陵人のマンションで宅飲みが開催された。陵人の住むマンションは都心に近い住宅街にある高級マンションである。閑静な街中にそびえる高層マンションの最上階に陵人の部屋があった。2LDKの間取りだが、一部屋一部屋が以上に広く、部屋を分割すれば、4Lにも5Lにもなる広さである。当然ながら陵人はそこに一人で住んでいる。「すっごーい！！」初めて陵人の部屋に入った茜は感嘆の声を上げた。「相変わらず何にもない部屋だなー。無駄に広い。」「嫌なら帰れ。おい、コラ茜！走り回るな！」そん

な陵人の言葉が虚しく響きわたるほど茜ははしやぎまくっていた。茜も駿も超売れっ子芸能人だが、ここまでリッチな生活はまだ出来ていない。茜も一応都内のマンションに住んではいるが、間取りは1LDKだし、部屋もそんなに広いわけじゃない。まして普通の家庭に育った茜はこんな広い部屋には入ったことすらない。完全に子どもに返っていた。「すごいね陵人！ここ家賃いくら！？」「家賃なんてねーよ。買ったんだから。」「そーなの！？すっごーい！」「茜は目をキラキラさせながら陵人に熱い視線を送っている。「わかったからあんまりはしゃぐんじゃねー。お前が触ると危ないものも置いてあんだから。」陵人に「危ない」といわれたとたん茜は条件反射で警戒体制に入った。実際陵人の部屋には怪異を封印した瓶やら得体の知れない箱やらがいくつも存在する。「そ、そーなの。??？」「普通にしていれば問題はない。とにかく走り回るな！」「わ、わかった！」

そんな二人をよそに駿は慣れた様子ですでに飲み会の準備に取り掛かっている。グラスを準備し、買い込んできたお菓子やらなんやらを広げている。「陵人。今日はなんか作ってんのか？」「ん？あ。冷蔵庫にいろいろ用意してある。あともう何品か作るつもりだ。茜！女なら手伝え！駿は冷蔵庫の刺身やらサラダを頼む。」「あいよ！」「私も頑張るー！！」三人は手分けして飲み会の準備を始めた。陵人は幼い頃から修一郎と二人で暮らしていたため、料理の腕前はかなりのものである。修一郎は料理がからつきしダメだった。そのため陵人が上手くなるしかなかったのだ。美影にしごかれたおかげで、プロ級の腕前である。鮮やかな手つきで酒に合うイタリアン、フレンチ、中華、和食の料理を次々に作っていく。茜はというと、これまた料理はまったくできない。包丁を持たせれば自分の指を切り落とそうとし、鍋を見ていろといわれれば、噴出すまでただじっと見ているだけ。しまいには盛り付ける皿を用意しろと言われ、高級な食器を数枚廃棄処分にした。

「お前はもういいから座つてろ！」陵人に怒鳴られ、茜は泣きそう

になりながら席についた。「気にしなくていいよ。陵人が出来過ぎるんだよ。」駿がフオローに入るが、「こいつが出来なさ過ぎるんだ！」陵人が一蹴する。茜は陵人にいいところを見せられなかったのと、怒られたことにテンションが激落ちしていた。(はー。。。) せっかく陵人の家にこれたのに。やつちやっただなー。。。) そんな茜をよそに陵人のスペシャル料理が完成し、テーブルにズラツと並べられた。酒もビール、焼酎、日本酒、ワイン、シャンパン、カクテルとあらゆる種類の酒が用意され、もはや宅飲みレベルをとうに超え、高級レストランのバイキングのようである。目の前に並んだ料理の数々を見て、茜の激落ちしたテンションはグングン上がっていき、すっかり通常時ちよい上くらいまで戻っていた。

「さて、じゃあ乾杯しようか！」駿の一声で二人もグラスを持ち、「じゃあ、カンパーーーイ！」盛大に飲み会がスタートした。陵人の部屋にはテレビゲームはおろかトランプの類も一切なく、50インチの液晶テレビがドカンと置いてあるだけ。三人はテレビを見ながらこの芸人はこうだのあのアイドルはふぬだの芸能界の裏側を暴露しながら大いに盛り上がった。茜はそれほど酒が強くはないが、それなりに飲める。駿も普通に比べたらかなりいける口だが、陵人はまさに策だ。長い付き合いの駿ですら、陵人が酔ったところを見た事が無い。「お前能力で酔わないようにしてんじゃないのか!？」駿が突っ込むが、「好きな酒を飲むのにそんなバカなことするわけなーだろ。師匠と美影さんに鍛えられたんだよ。まー元々強かったけどな。」「そーいやお前のお師匠さんも半端ないんだつたな。」駿が苦笑いをしていると、「ねー、陵人のお師匠さんにも会ってみたいー!」茜がトトロトの声で陵人におねだりする。「俺ですら年に数回しか会わねーんだよ。でも三日前に酒が送られてきてたからもうぼちぼち来るとは思っただけだな。」「そーなんだー! 今日来てくれないかなー!？」「そんな都合良いかねーよ!」陵人は笑いながら答えたが、(もしかしたら。。。) そんな予感がしていた。その時、(ピンポン)。インターホンが鳴った。三人は目を

合わせ、「もしかして・・・!?」陵人の部屋に人が尋ねてくることなんて滅多にない。「マジで誰だ・・・!?」陵人が用心しながら玄関先に行く。二人も玄関先を窺っていた。陵人が玄関の扉を開けると、「やあ、久しぶり。」そこには20代後半から30代前半くらいで、180センチ近い身長にスマート体型、白シャツに黒のデニム姿、縁無しメガネをかけたいかにも優しそうな青年が立っていた。

「なんだ。お師匠さんではないみたいだね。」「うん。お師匠さんならもつとおじさんだろーし。大学のお友達とかかな?」そんなことを茜と駿が話していると、「師匠。来るなら前もって言ってくださいといつも言っているでしょう。酒を送ってくるだけじゃわかりませんよ。」「ええー!?お師匠さん!?」茜と駿がきれーにハモる。「いやーすまんすまん。なかなかタイミングが難しくくてね。連絡しようしようと思いなながら気付くといつも家の前にいるんだよ。」そう笑いながら答えたこの男こそ、陵人の師匠であり、MAIN DS特別顧問の神崎 修一郎だった。「それより、お客さんのようだね。また日を改めた方がいいかな?」陵人が返事を返す前に奥で様子を窺っていた二人が飛び出してきた。「始めまして!俺陵人の友達で立石 駿っていういます!」「私、牧村 茜です!あの、よかつた一緒に飲みませんか!」「ちよつ、お前ら何言ってる・・・」「いいんですか??」「もちろんです!どうぞどうぞ!」「じゃあ、遠慮なくお邪魔させてもらいますね」修一郎の笑顔が光る。陵人のとき同様、駿と茜はこの笑顔に一発で虜にされた。陵人のキラースマイルは修一郎から受け継がれたものらしい。「マ、マジかよ・・・?」一人玄関に取り残された陵人はしばらく呆然と立ち尽くしていた。

陵人が我に返り、リビングに戻ると、三人はすでに酒を酌み交わしていた。「君が駿君か。陵人から話は聞いているよ。仲良くしていただいでるそーで。ありがとう。」「いえ、世話になってるのは俺の方ですよ。陵人にはいつも助けてもらってます。」「茜さんだっ

たかな？もしかして『天翼の刻印』の子かい？」「はい、そーです！ 陵人に命を助けてもらいました。」「そーかそーか。大変だったようだね。美影から話を聞いたよ。」「そーだったんですか！」なごみムードの三人に陵人は呆れて言葉が出なかった。「陵人。何をそんなところでポーっとしてるんだい？早く座りなさい。」「あなたは酒が飲めればお構いなしですか！？」「何を言うんだ。君が普段お世話になつていいる友人に挨拶するのは師匠として当然のことじゃないか！」「よく言いますよ。まったく。」「まったく君はすぐにすねるんだから。いい加減大人になりなさい。」「そーだよ陵人！」「茜が面白そうにかぶせてくる。」「てめーにだけは言われたくねー！」「まーまー。ほれ、陵人。」「駿が陵人にグラスを渡す。」「じゃー、陵人のお師匠さんが加わったところで、もう一度乾杯しますかー！」「賛成　！」「いやー恐縮です」まんざらでもない修一郎の顔を見て、陵人はため息しかでなかった。「かんぱーい！」「飲み会第二幕が開幕された。

「あのー、陵人の小さい頃つてどんな子どもだったんですか？」「茜がここぞとばかりに切り込んだ。「そーだなー。まああまり可愛げがあつたとは言えないね。妙に大人びたところがあつたから。」「やつぱり……。」「二人は大きく頷いた。「お前らそのリアクションはどういう意味だ！？」「そのままの意味だよ。」「駿が笑いながら答える。「陵人はもともと私の友人の子だったんだ。」「そうだったんですか。ということは、陵人のご両親も能力者だったつてことですか？」「今度は駿が質問する。「いや、二人ともごくごく普通の人だったよ。そーだな。ちようど君たち三人のような関係だった。」「俺たちみたい……。？もとは依頼人だったつてことですか？」「その通り。二人は別々の依頼で私のところに来て、事件を通して親睦を深めていった。そして、依頼人同士の二人が結ばれたつてことだね。」「つまり、その流れで行くとお前たち二人が結ばれるつてことだな。」「陵人が楽しそうに笑う。（私は陵人がいい！！）と喉まででかかった言葉を茜はなんとか飲み込んだ。「それが陵人が五歳

の時だ。もともと凄まじい才能があることには気付いていたんだよ。二人にその事を話したら、もしこの先何か困ったことが起きた時には、陵人を頼むと言われていてね。二人が事故で亡くなって、私は迷わず彼を引き取ることにした。」「陵人はその時のことあんまり覚えてないんでしょう？」「茜が以前陵人が話してくれたことを思い出し、聞いてみた。」「ああ。うつすら両親の顔を覚えてる程度だ。師匠に引き取られてからが俺の人生の始まりみたいなもんだから。事実普通の生活から飛び出して能力者として歩み始めたわけだし。」

「五歳にして二度目の人生を歩み出したわけか。」「駿が感慨深げに言葉を漏らす。」「そーだね。大変だったと思うよ。私が言うのもなんだけど、厳しい毎日だったからね。」「そーなの陵人？」「修行はメチャメチャだったな。いくら才能があつたとはいえ五歳のガキが一から能力者として生きていかなきゃならないわけだし。何度死に掛けたかわからん。こんな顔して容赦ない人だからな。」「私より美影の方が厳しかっただろ？」「美影さんは能力の修行というより人生の修行の方が多かったですよ。炊事、洗濯に始まり礼節に身だしなみ。」「そうだったね。」「修一郎が笑っていると、「笑いごとじゃないですよ。師匠が何もしないから俺がやらされたんじゃないですか。」「だって家事全般はどーしても苦手だったんだよ！」

「二人のやりとりに駿も茜も胸の中を掻き乱すものと同時に、何か温かいものを感じた。実際、こつやつて笑いながら話しているのが嘘のような壮絶な日々だったはずである。幼くして両親を失った陵人。親友を同時に亡くし、その子どもを引き取り能力者として育てた修一郎。お互いのつらい境遇を理解し、支え合ってきたからこそ、本当の親子以上の絆がある。そう二人は感じる事ができた。それは奇しくも自分自身が怪異という普通ではありえなかつたモノに遭遇し、それを乗り越えてきたからである。人の痛みを感じる事が出来るのは、痛みを知っているからである。痛みを乗り越えて初めて、人は他人の心に触れる事が出来る。駿も茜も人の痛みに触れる事が出来る人間に成長していた。

「そうだ！私の友人が温泉旅館の支配人をしているんだけど、最近リニューアルオープンしたらいいんだ。私の紹介で行けば格安で泊めてくれるはずだから、今度三人で行つてくるといい。少し遠いが、すごくいい所だよ。」「温泉！？行きたーい！！ねーねー行こうよ
陵人！」

茜のおねだり攻撃が始まった。「あのなー。俺はともかくお前らはスーパースターなんだぞ！スター同士が温泉宿にお忍びで宿泊なんて世間に知れてみる！大スクープになるじゃねーか！だいいちお前らが二人同じ日に休みが取れんのか？お互い超忙しーつてのに！」
「んとー、スクープに関しては陵人の能力でなんとかなるじゃない！？スケジュールもなんとかなるんじゃないかな！？実際明日二人とも休みだしさ！」「そうだな！俺もなんとかなると思うぞ！」茜と駿はすでに行く気満々である。「お前らなー・・・。」

「陵人が『陽神』^{ようしん}を使えばいいじゃないか。そうすればスケジュールに關係なく行けるだろ？」「ちよつ、師匠！軽はずみなことを言わないで下さい！今までこれだけは使わないようにしてきたんですから！」「いいじゃないか！たまには自分の為に能力を使つたつて。」
「修一郎はニコニコと悪びれた様子もなく笑っている。「あの一・・・その『陽神』^{ようしん}っていつのは？？」「な、なんでもない！忘れる！」
明らかに動揺している陵人に茜も駿も喰いついた。

「『陽神』^{ようしん}というのはね、念を練り上げてその人と全く同じコピーを作ることができる術だよ。そのコピー自体に意志を持たせることによつて、本物と同じように行動させることが出来るんだ。」
「師匠！！いい加減にして下さい！」「もう言つちやつたし。」
「もう聞いちゃつたし！」三人のニヤニヤした顔に陵人は思わず後ずさつた。「待て待て！誰も使うとは言つてないぞ！」
「いいじゃないか陵人。三人で温泉！楽しいと思うよー！」
「師匠・・・！！」「てかなんでそんなすばらしい能力を今まで隠してたんだ！？」
「そーよそーよ！」
駿と茜が陵人に詰め寄る。「言えるわけねーだろ。この術は普通の人間にとつては反則技みたいなもんだぞ！そんなしよつ

ちゅう使つてたら人間が腐つちまうからな。」「じゃあたまにならいいのよね!? ねー、お願い! 私どうしても三人で温泉に行きたいの!」「まわりの人間を騙すことになるんだぞ!」「大丈夫! 心の中でちゃんとごめんなさいするから!」「そーいう問題じゃねー!」「二人のやり取りを見ながら駿と修一郎は嬉しそうに笑っている。ふと目が合った二人は、小さく乾杯した。茜は甘えに甘えぬいた。人生でここまで甘えたことはないというぐらいに甘え尽くした。結果陵人は落ちた。宅飲みを決定させられた時と全く同じ状況である。あつという間に日時を決められ、二人は集合時間の打ち合わせに入っていた。

「なんてことだ・・・。」陵人はすっかりテンションが落ちていた。温泉に行きたくないということではない。むしろ楽しみでさえあつたが、今まで自分が遊びに行く為に能力を使ったことなど一度もなかった。陵人自身がそれを禁じていた。事実、能力の制約の一つに、自分自身の治癒に関する術は使えないというものがある。陵人は能力者として自分のためだけに能力を使うことを恥と感じていた。今回は見事にその禁を破ることになる。うなだれる陵人に修一郎の言葉が届く。

「陵人。今回は君自身のためではなく、この二人のために術を使うんだ。制約を破るわけじゃない。」「しかし・・・。」陵人。君はもう少し肩の力を抜いて生きる必要があるね。彼らのおかげで大分丸くなってきたようだけど。まだ力が入り過ぎている。もう少し気楽になりなさい。」「はあ・・・。」「そうだよ陵人! 人生楽しまないとー!」「お前は楽しみ過ぎなんだよ!」

このあとも四人の飲み会は続いた。最初に潰れたのはやはり茜だった。早々にベッドに寝かされ、気持ち良さそうに眠っている。次に駿がダウンした。バケモノ二人を相手に健闘したほうだろう。そしてやはり陵人と修一郎が残った。「これでいつもの感じになりましたね。」「陵人がほつと漏らす。」「いやーなかなか楽しい子たちだね。いい友人にめぐり合えたじゃないか。」「ええ。俺もそう思います。

「普段本人たちの前では決して出さないが、陵人は心から二人に会えてよかったと感じていた。高校、大学を出ている陵人は、それなりに知り合いも多い。しかし、その中に陵人の正体を知っている者は一人もいない。無理に隠していたわけではないが、自分から話そうとも思わなかった。それでいいと思っていた。10年前、駿に出会うまでは。」

「彼と出会ってから君はまた一段といい顔になったからね。私も美影も嬉しかったよ。自分から友人について話しをする君がとても新鮮だった。」「そういえばそうでしたね。」「大事にしなさい。」「はい。」「それで、茜さんとはどうなんだい？まんざらでもないんだろ？」「い、いきなり何を言うんですか！？」「君もいい年なんだから、そろそろ真面目な恋愛をしてもいいだろう。」「50過ぎて独身の師匠には言われたくないですね。」「私は恋愛は真面目にしてきたよ。」「そうは見えませんが……。」「私のことはいいんだよ！孫の顔だつてみたいじゃないか。」「何爺くさいこといつてんですか。」「温泉旅行は私からのプレゼントだ。有効に使うんだよ！」「そんなこと言つて、どーせ仕事絡みなんですよ？」「君のそういう鋭いところはあまり好きになれないな。」「凶星ですか……。で、俺に何をしろと？」「うん。その友人というのが、能力者ではないんだけど良質な『核』を持っていてね。昔から手助けをしてあげているんだけど、最近どーもあまりよろしくないものがあるうろついているようなんだ。もちろん人間じゃない。」「怪異ですか？」「怪異には違いないんだけど、どーも能力者の影を感じるんだよ。もろもろ調べてきてもらえるかな？」「師匠が行けばいいんじゃないんですか？」「そうしたいのはやまやまんだけど、私もいろいろと忙しくてね。最近暁の活動が活発なのは知っているだろう。やつらの動向から目が離せないんだ。」「何か掴めたんですか？」「いや、有力なものはまだね。君の出番がくる前になんとかしたいとは思っているんだけど……。」「俺もそう願ってますよ。」「とにかく頼むよ。君にかかればそう難しい案件じゃないだろうか

ら、パパツと終わらせて、露天風呂と豪華な料理とめくるめく夜を
楽しんできなさい。」「はいはい。」その日、夜明け前に修一郎は
去っていった。陵人は食器を流しに入れ、ゴミを片付けてから、シ
ヤワーを浴びた。湯上りにもう一杯飲もうとビールを取り出し、グ
ラスも使わずそのまま勢いよく流しこんだ。「旅行かー。まあ、悪
くないな。」「そう呟いた陵人の顔には優しい笑みがこぼれていた。
朝になって茜が起きてきた。「おはよー。私いつ寝た？全然覚えて
ないー。」「飲み過ぎたせいでダルそーな身体を揺らしながら陵人に
もたれてくる。「お前とりあえず風呂入ってこい。うちの風呂は二
日酔いに効くんだ。」「ホントにー？じゃあ行ってくるー。覗いて
もいいよー！」「ケタケタ笑いながら茜は浴室に向かつてフラフラと
歩き出し、途中ですっ転んだ。「いったーいもー！！」「お前まだ
酔っ払ってんのか？」「陵人が抱きかかえて起こしてやると、茜はそ
のまま陵人に抱きついた。「そんなことないよー！ちよつとふらつ
ただけー！ついでだしお風呂まで連れてってー。」「まったく・
連れていった。「陵人ゝ脱がしてゝ！」「いい加減にしる！さっさ
と入って来い！」「えー！ケチケチ陵人！」「茜はぶつくさいい
ながら浴槽に浸かった。するとみるうちに身体から酒の毒素が
抜かれていき、完全に素面の状態まで戻った。途端に茜に後悔と羞
恥心が襲ってきた。（ま、またやっちゃったー・・。）茜は正気に
戻ってからも、しばらく浴室から出る事が出来なかった。その数
時間後、駿が起きてきた。明らかに二日酔いだった。昨晚バケモノ
二人を相手にしていたのだから当然だ。起きると明らかにへこんで
いる茜が目に入った。（また何かやらかしたな・・。）しかし今は
自分も余裕がない。「陵人、風呂湧いてるか？」「ああ。タオルも
置いてあるから入ってこい。上がったらランチにするぞ。」「お
おー。」「頼りない返事をしてフラフラと浴室に向かう。普段ならし
ばらく食い物はいらなるところだが、陵人の浴室効果をすでに何度
か体験している駿は、陵人の作るランチが楽しみだった。30分

程で駿が浴室から出てくると、「ああーさっぱりしたー！相変わらず凄い効果だな！腹減ったー！で、茜ちゃんは何をやらかしたの？」茜から朝の出来事を聞いた駿は腹がよじれるほど笑い転げたあと、（先が楽しみだなー。）そんなことを考えながら、陵人の作ったスぺシャルプランチを堪能した。

「さて、腹もいっぱいになったことだし、温泉の打ち合わせでもするか！」「そ、そーだね！日にちは昨日話した日で大丈夫かな？」茜が元気を振り絞って話に参加する。「俺聞いてねーぞ。」「お前やる気なかったからな！ちようど一週間後だよ！」「そんな急なのか！？」「だって休み関係ねーって言うからよ！。」「そりゃそうだけど・・・。」「じゃあ日にちは決まりね！陵人の車で行くんでしょ？」「あ、ああ。」「よし！時間は早い方がいいよね？7時集合くらいかな？」「いいんじゃない！」「じゃあ来週の朝7時に陵人の家集合ねー！」茜と駿（ほぼ茜）によつてものの5分で予定が決定された。（こいつらどんだけ行きたいんだ・・・。こっちは仕事絡みだつてのに！）だが仕事の話は言わないでおこうと陵人は思った。どうせ行くなら楽しい方がいい。そんな気持ちにさせたのはやはり二人が陵人にとってかけがえの無い存在だからである。予定が決まった後は、三人でDVDを見ながらまつたり過ごした。夜から仕事が入っていた陵人は、二人を車で送って行き、そのまま依頼人のもとに向かった。それからメールや電話で連絡を取り合いながら、あつという間に一週間が過ぎた。

朝7時。珍しく駿も遅刻をすることなく、全員が陵人の家に集合していた。「お前こつうイベントの時は遅刻しないって小学生か！」陵人の突っ込みもまつたく気にせず、すでにウキウキ状態の駿。茜はとうとうなんと集合30分前からスタンバっていた。「よし、とりあえず『陽神』をかけるぞ。茜。そこに立て。」「ここでもいい？」「ああ。力を抜いてじつとしてる。」「茜の肩に左手を置き、右手を茜の横に出し集中する。」「『陽神』」左手から抽出された茜の念が、右手から徐々に練りだされていき、人型に形成されていく。あつと

いう間にその念の塊は茜になっていった。「す、すごいな！」真正面で見えていた駿は素直に驚いた。陵人の術はいくつもみてきたが、これほど分かりやすい術は初めて目にしたのだ。茜はすでに言葉を失っている。練成が完了し、茜のコピーが目を開いた。どこからどうみても茜そのものだった。「明日の夜には戻る。頼んだぞ。」陵人が茜のコピーに告げると、「わかりました。お気を付けて。」茜のコピーが茜の声で返事をする。「あ、あの、よろしくね。」茜が茜のコピーに話しかけた。「任せておいて！」茜のコピーは満面の笑みを浮かべて返答する。「茜。コピーに携帯やら私物を渡せ。」「え！？なんで！？」「こいつは今から明日の夜までお前になるんだぞ。東京で仕事をしているはずの人間が地方で携帯を使ったおかしいだろ？それに一文無しでこいつを東京で過ごさせるつもりか？」「あ、そっか！でもお財布も携帯もないんじゃないかと不安なんだけど・・・。」「安心しろ。とりあえず今回の旅費はすべて俺が出しといてやる。常に三人一緒にいれば携帯も必要ないだろ？運転も俺がするし、免許も必要ない。何かあったら俺がなんとかしてやる。」陵人にそう言われて茜は私物をコピーに預けた。続けて陵人は駿のコピーを作りだした。これまたどつからどうみても駿そのものだった。駿もコピーに私物を預け、陵人は本物の二人に『擬立』をかけた。全ての準備が整い、いよいよ三人の温泉旅行がはじまった。

都心のマンションから車で6時間。三人は目的地である宿、「月心館」に到着した。創業150年を超える老舗であるが、最近になって老朽化した建物を抜本的に改装し、現代的な要素と昔ながらの雰囲気が見事に融合されたその造りは、外観から訪れた者たちを圧倒する。その造りが功を奏し、改装後の客層は若い年代の客達が多く訪れるようになった。支配人が修一郎の友人ということだが、陵人は初めての場所である。「すごい！綺麗なとこだねー！」茜が長旅の疲れも忘れてはしゃいだ声を上げる。「雰囲気あるなー。なんか吸い込まれそうだ・・・。」駿も感嘆の声を漏らす。11月の終

わりであり、周りが山々に囲まれているため気温は都心に比べてかなり低い。まだ雪景色ではないが、冬の足音がすぐそこまで聞こえてくるような情緒溢れる雰囲気をかもし出している。二人は入り口ですでにテンションが上がっていた。しかし、陵人だけが不思議な違和感を感じていた。修一郎の依頼でやってきた陵人はまだ何かわからない胸騒ぎを覚えた。(やはり、何かあるな。。。)「陵人、どうしたの?」考えこんでいる様子の陵人に茜が声をかける。「ん?いや、なんでもない。見惚れてただけだ。さ、行こう。」「二人に依頼の件は内緒にしてある。気付かれないようにことに当たらないければならない。陵人は深く息を吸い、「月心館」に足を踏み入れた。外観の雰囲気とは一風変わって、内装はモダンな暖かい雰囲気を残しながらも、ソファやシャンデリアといった現代的な雰囲気が随所に取り入れられていた。三人はフロントに行き、受付を行っている。一人の男性が声をかけてきた。「この度は遠方からようこそお出でくださいました。私当旅館の支配人をさせていただきます。田所と申します。」年の頃は50代半ば、中肉中背の人のよさそうな男である。「お世話になります。」「三人は同時にお辞儀をし、挨拶をした。」「ところで、修さんの息子さんというのは?」「私です。父がいつもお世話になっていそう。」「いえいえ、お世話になっているのは私の方ですよ。彼から連絡があつて、息子が行くからよろしくと言われましてね。これは日頃の感謝を込めてしつかりと御もてなししなければと思ひまして。」「ありがとうございます。鳥居君、頼むよ。」「かしこまりました。それでは客室にご案内させていただきます。」「仲居の鳥居が三人を客室に案内する。茜と駿が鳥居のあとについて行くのを見計らつて、陵人は田所に話かけた。「後ほど伺います。詳しい依頼内容はそこで。」「わかりました。それでは後ほど支配人室で。」「はい。あ、それと、二人には今回の依頼の件は話してないので。。。」「かしこまりました。それでは。。。」「田所は温かみのある笑顔を残して仕事に戻つていった。

「陵人、おいてくよー!」「今行く。」すでにエレベーターに乗っている二人の元へ陵人は早歩きで向かっていった。

「月心館」はその名にもあるように、「月」をモチーフにした旅館であり、客室の一つ一つに月に関連する名が付けられている。三人が泊まる部屋は「十六夜の間」である。15畳の居間と8畳の床の間の二部屋から成るこの客室は、日当たりも良く、置かれている家具の一つ一つに高級感が漂っている。正面には優雅な自然で見溢れており、下を流れる川のせせらぎが心の隅々まで洗い流していくような気持ちにした。テラスには専用の露天風呂まで付いており、隅々まで満足のいく部屋だった。「なんかもう凄い、綺麗としか言えないね・・・。」「まったくだ・・・。」「茜と駿は自らのそのボキヤブラリーの無さに少々へこんでしまったが、すぐに切り替え、おもいつきり堪能することにした。陵人もこの部屋が気に入り、速攻で依頼内容を片付け、三人でのんびりしたいと思った。とりあえず腰を下ろし、鳥居を入れてくれたお茶をすすりながら、館内の案内や注意事項、食事の時間などの説明を聞いた。「それではごゆっくりどうぞ。」「鳥居が客室を出ていくとすぐに陵人は立ち上がった。「さて、お前ら温泉にでも入ってこいよ。俺は支配人と話があるから。」「ええー、陵人も一緒に行こうよー!」「早速茜がだだをこねる。」「師匠からの伝言があるんだ。さつさと済ませてのんびりした方がいいだろ?」「まーそうだな。じゃあ一足先に風呂行ってくるかー!茜ちゃんどうする?」「駿が立ち上がると、「じゃあ私も行くー。早く帰ってきてね、陵人。」「ああ。一応念のためにこれを渡しておく。もしもの時の連絡手段だ。」「そういつて陵人は二人にビー玉ほどの大きさで、淡い青色をした綺麗な水晶を渡した。「綺麗・・・。」「おもわず言葉を失うほど神秘的な光を放っていた。「俺の念を込めてある。もし何かあったら、その水晶を握って心の中で俺を呼べ。すぐに駆けつける。」「了解!」「二人は声を揃えて返事をし、三人は別行動をとることになった。

二人と別れた陵人は、田所が待つ支配人室へと向かった。ノックを

すると「どうぞ。」と中から田所の声がした。「失礼します。」
「お待ちしております。わざわざご足労いただき申し訳ございません。」田所が丁寧に頭を下げる。「いえ。早速なんです、依頼内容を詳しくお話していただけますか？父からはあまり話を聞いてないものですから。」無駄話をする気がない陵人はすぐに本題に話をもっていった。「はい。修さんから聞いていると思いますが、私は昔からいろいろと厄介なものが見えたり、絡まれたりする性質でこの旅館を継いだ時にもいろいろと引き入れてしまったようなんです。それを修さんに助けていただいて、この旅館の中にはそういった類の物が入ってこれないようにしていただいたんです。それからはこの旅館内には不可解な現象はなくなりました。それが、ちょうど三ヶ月前のことでしょうか。改築工事が終わって、営業を再開したところです。おかげさまで若い方々にもお越しいただけるようになりまして、それなりに起動に乗っていたんですが、どういうわけかお客様のトラブルが頻繁に起こるようになってしまったんです。」
「客のトラブル？クレームということですか？」「いえ、それが・・・お客様同士のトラブルといえますか・・・。」
「客同士？どういうことでしょうか？」「はい。ある若いカップルのお客様がお泊りになった時のことでございます。男性の方が他のお客様と、その・・・、浮気をしてしまったらしいのです。それを女性の方に見つかってしまつて・・・。」
「はあ。しかしそんなことは良く聞く話じゃないんですか？」「はい。それだけならば当方としても差ほど気に留めなかつたのですが。それ以降、同じようなことが何件も続いておりまして。若い方だけでなく、年配の方や家族連れの方まであらゆる年代で。しかも、これが一番気にかかることなのですが、相手方は全く身に覚えがないということなのです。どちらか一方は認められているのですが、もう一方は頑なに否定されるのです。それも毎回。これはおかしいと思ひまして、修さんに連絡しまして、あなたに来ていただいたということなんです。当方としましても、これ以上よからぬ噂が立ちますと、イメージにも関わりますので。」ここまで

話すと田所は大きなため息を吐いた。「そうですね。確かに不可解です。これまでに何件そういったことが起きてるんですか？」「私も確認しているだけでも、この三ヶ月で10件以上です。ことがことですので、口外しないお客様もいらつしやるでしょうから正確な数はわからないのですが。」「そうですね。」「陵人が考え込んでみると、それともう一つ不可解なことがあります。．．．」

「なんででしょう？」「ちょうどそういったことが起こるようになってからだと思うのですが、この旅館の周辺を得体の知れない物がうるつくようになったんです。」「得体の知れない物？人間ではないということですか？」「はい。私も人間と怪異との区別は付きません。確かめようと何度か調べてみたんですが、いっこうに姿をみせないのです。ただ怪しい気配だけがするといえますか。」（そういえば師匠もそんなことを言ってたな。）「わかりました。調べてみます。」

「よろしくお願いいたします。」「陵人は支配人室を出ると、ひとまずロビーに向かい、ソファーに腰を下ろした。田所の話から、恐らく変身系の『能力者』が絡んでいるのは間違いない。しかし、情報が少なすぎる。陵人はどうしたものかと頭を抱えていた。「変身系の能力者．．．不特定多数の被害者．．．辺りをうるつく怪異．．．」

「何一人でブツブツ言ってるの??」風呂上りの茜が不思議そうに陵人を見ていた。「ん？ああ。もう出てきたのか？どうだった?」「もう最高！大浴場はすんごい広くて、露天風呂も気持ちよかったですよー！陵人はお話もう終わったの?」「ああ。今さっきな。駿はまだか?」「ここにいますよ!」反対方向から缶ビール片手に駿が歩いてくる。「ずるーい!もう飲んでー!」「風呂上りはやっぱりビールだなー!美味すぎる!」「私も飲みたいー!陵人買ってー!」「まったくお前は．．．」茜に金を渡し陵人は深いため息をつく。茜は嬉しそうに売店に走っていった。「それで、今回はどんな依頼なんだ?」駿が唐突に切り出した。「お前．．．気付いてたのか?」「当たり前だ。何年の付き合いだと思ってるんだ?馬鹿たれ。」「そうだな．．．すまん。茜が戻ってきたら話そう。」「陵

人はこみ上げてくる嬉しさと顔がほころぶ。

そんな三人を遠くから見ている影が、ニヤリと笑っていた。

茜が戻ってきてから、三人は部屋に戻り、陵人は二人に今回の依頼の件を話した。まず二人は何故黙っていたんだと憤慨した。陵人は素直に謝り、それから二人も協力するといいだした。「それはダメだ。今回も恐らく『能力者』が絡んでるのは間違いない。しかもどんな能力かまだわからん。」「変身系の能力なんですよ?」「あくまで仮説だ。」「でもどうするんだ?今日中に片付けるんだろ?」「ああ。それはそうなんだけどな。」「まったく思いつかないと?」「そういうことだ。よし!とりあえず俺も風呂入ってくる!」「そうしろ。せっかくだからこの部屋の露天に入れよ陵人!」「お、いいなそれ!そうするか!」「ちよつ、ちよつと待つてよ!私がいるの忘れてない?」茜が動揺していると、「なんなら一緒に入るか?」「陵人はニヤニヤしながら服を脱ぎ始める。「ば、馬鹿言わないで!てか向こうで脱いでよー!」顔を真っ赤にしながら陵人に背を向ける。「いいじゃねーか。お前の裸は見たことあるんだぞ!」「あれは仕事だったじゃない!」「なんだお前らそういう関係!?」駿はわざとらしく驚いてみせる。「駿君まで馬鹿言わないで!早く入ってきなよ!」「はいはい。」「陵人は楽しそうに風呂に入っていた。

露天風呂の景色は最高だった。まだ紅葉が残っており、色とりどりの葉が見事なコントラストを描いていた。陵人は景色に酔いしれながら、今回の件を考え、そして一つの結論をだした。

20分ほどゆつくりと風呂に浸かった陵人は風呂上りのビールを美味そうに飲むと、「せっかくだからこの辺りを少し散歩するか!」

「いいねー!まだ紅葉も残ってるし!」「賛成!」「三人は旅館のすぐ横に広がる森に出かけることにした。旅館のすぐ横に広がる広大な森は遊歩道として整備されおり、月心館の一つの名所になっている。森も奥まで入っていくことができ、野鳥やリス、野うさぎをいった動物が多く生息しているため、写真や動物自然関係の人間

たちもよく足を踏み入れていた。平のためか今日はそれほど人がいない。三人は動物や自然を満喫しつつ、今日の夕食はなんだの夜は何して遊ぶだのとはしゃいでいた。そんな三人の様子を先ほどの影が遠くから窺っていた。当然陵人はその影の存在に気付いていたが、あえて気付かないふりをして、逆に様子を窺っていた。(一つ・、じゃないな。二つか・。)

陵人は木を観察するように見せ掛け、気付かれないように『追捜』を唱えた。慎重に影の様子を窺うと、陵人の術に全く気付く様子はなく、こちらの様子を窺っている。(よし。これでこっちはOKだな。)

陵人は目的を果たすと、再び三人の時間を楽しんだ。

1時間ほど散策し、三人は旅館に戻ることにした。時刻は午後4時を回ったところ。夕食は6時半からということだったため、まだ若干の余裕がある。「さて、夕食まで時間もあるし、もっかい風呂入っとくかな。こんどは大浴場にするか。お前らどうする？」

陵人が二人に尋ねると、「俺は付き合うよ!」「じゃ私この部屋の露天風呂に入る!」「よし!じゃあ行くか。」

陵人と駿は二人で大浴場に向かった。一人残った茜は、しばらくぼけーっとしたあと、「よし!誰もいないし、ここで脱いじゃおー!」着替えを準備し、服を脱ごうとしたそのとき、部屋のドアが開き、陵人が戻ってきた。今まさに服を脱ごうと思っていた茜は驚いた。

「ビックリしたー!何?忘れ物?」茜の問いに陵人は答えない。どこか様子が変わる。真っ直ぐ茜を見つめながら、少しずつ近づいてくる。「何?どうしたの??」

陵人は茜のすぐ目の前までくると、「茜。」そつと茜を抱きしめた。「ええ!?ちよつ、陵人!？」突然のことに驚きながらも茜の鼓動は早くなる。「ずつと、二人になりたいたいと思ってたんだ。茜。」

「何、急に・・!？」

「ずつとお前が好きだった。」突然の告白に茜は言葉を失う。「茜。一緒に風呂に入らないか?お前にも俺を見て欲しい。」

「ダ、ダメだよ!駿君は!？」

「駿には事情を話してある。しばらく帰ってこないよ。」

「そ、そうなんだ。でも、急にそんなこと言われても・・。恥ずか

しいよ……。」「茜が顔を赤らめる。「いいじゃないか。お前の裸はもう見てるんだぞ?」「だから、あれは仕方なく……。」「茜が困惑していると、陵人は茜の服に手をかけた。「大丈夫。素直になれよ。」「ちよつ、陵人……。ダメだつて……。」「そんな言葉に耳を貸さず、陵人は茜の上着をゆつくりと持ち上げはじめた。「おい。」「ふいに言葉をかけられた陵人は驚いて振り向くと、その瞬間強烈な一撃が顔面に叩きこまれ、吹っ飛んでしまった。「俺のものに気安く触るんじゃないね。」「そこには陵人と駿が立っていた。

「遅いよ陵人!」「茜がほつぺをぶんぶんに膨らましながらご立腹の表情を見せる。「わりー。完全に油断した状態じゃねーと意味がないからな。」「そう言つて優しく茜の頭を撫でてやった。茜は「俺のもの」という陵人の言葉が嬉しくて、怒りなどはじめからなかった。陵人に撫でられてすっかりいい気分になっていた。「さて、お前は少し下がつてろ。」「優しくかつた陵人の表情が一瞬で凍りつくような表情へと変化した。「いつまで寝てやがる。立てコラ。こんなもんじゃ済まさねーぞ。テメーにはまだ聞きたいことがあるんだからな。」「ドスの効いた陵人の声に駿と茜はただただ黙つて息を潜めていた。「く、くそ!なんでだ!?いつ分かつた!?」「さつきまで陵人だったその男は術が解けてもはや完全な別人になっていた。いや、本来の姿に戻っていた。中肉中背、脂ぎつたその顔は陵人の一撃で大きく腫れ上がつていたが、それを差し引いても陵人とは似ても似つかない顔。一言で言えば不細工な男であつた。「ロビーで二人と合流した時だ。お前ずつと俺たちの様子を窺つてたる?気付かないでも思つたか?豚野郎!」陵人の罵声が響きわたる。「くそ!でもお前たちはさつき大浴場に向かつたはずだ!俺の使い魔からは何の報告もなかつたのに……。」「そりゃあいつらのことか?」陵人が窓に視線をやると、二匹のコウモリを大きくしたような姿の使い魔がグルグル巻きで吊るされていた。「お、お前たち!」「さつき森に行つたときに布石を打つておいたんだよ。お前が部屋に入ると同時に捕縛しておいた。あれは、『坩堝の住人』だな?壺に

封印された怪異は開放された際、開放した者と主従の契約を結ぶことが出来る。どこで見つけた？いや、誰に貰った！？」「お、お前には関係ないだろ・・・！」その言葉が吐かれたと同時に陵人は『枯^{かう}湯』を唱えた。標的の周りの空気や水分を飛ばし、息はおるか、身体的水分まで奪っていく術である。「口の利き方に気をつけるよ。生きたまま地獄に落としてやることだつてできるんだぞ。」今まで見たこともない陵人に茜は恐怖で身体が震えていた。（これが、本当の陵人・・・？）「わ、わかっ・・・止めてっ・・・！」男は悶え苦しみながら陵人に懇願している。陵人は術を解き、質問を続ける。「どこから手に入れた？」男は苦しみながら、「あ、暁つて連中にもらったんだ・・・。」「やはりそうか・・・。暁の連中にその能力も開花してもらったのか？」「そ、そうだ。あ、ある日突然お前は能力者の素質があるからつて・・・。」「なぜこの旅館に目をつけた？」「さ、最初は客としてきたんだ。そ、そしたら若い客が結構来て、俺の能力を使えるのはこしかないつて思ったんだ。それで・・・。」「能力を使つて女とやりまくつてたつてののか？」「だ、だつて・・・、俺みたいな不細工じゃ誰も相手してくれないだろ！？幸せなやつは痛い目に合えばいいんだ！今までいい思いしてきたんだろ！俺にも少しくらいいい思いさせてくれたつていいだろ！」男はさすがのように陵人に視線をぶつけてきた。陵人は変わらず冷たい視線を、茜は軽蔑に満ちた目で男を見ている。駿は同情にも似た表情で男を見つめていた。「調子に乗つてんじゃねーよ変態やるー。何もかも人のせいかな！？あ？テメーで何の努力もせずになチネチしやがつて！そんなやつに女が寄ってくるわけねーだろー！お前が醜いのは外見じゃねー。心だ！だから暁に目を付けられたんだ。」「いいさ、暁には感謝してる。こんあすばらしい能力をくれたんだからな。俺を警察にでも突き出す気か？無駄だね。なんて言つて話すんだ？能力者なんて言つたつて誰が信用する？俺を裁くことは出来ないんだよ！！」「不法侵入してるじゃない。」茜がぼそつと呟く。「警察に行つたところでこの能力で簡単に出てこられるんだよ！さー、どう

する？」男は自信を取り戻したのか、高らかに吠える。「殺す。」
「え？」「殺すといつたんだ。俺は自分のものを傷つけられるのが一番嫌いなんだよ。テメーみたいなカス野郎は切り刻んでその使い魔どもの餌にしてやる。おいしく食べてもらえ。」この世のものとは思えないほど残酷な笑顔を浮かべる陵人に、男は言葉を失った。
（殺される・・・！）周りの空気が張り詰めるほどの殺気を放ちながら、ゆっくり近づいてくる恐怖！男は絶望のどん底に落ち、後悔と恐怖の波が全身をさらっていくような感覚に襲われ、そのまま気を失ってしまった。「チツ、根性ねーな。この程度で気絶かよ。」陵人はつまらなそうに吐き捨てる。畳に転がった男を端に移し、陵人は携帯で誰かを呼んでいる。電話を切ると、二人に視線を送る。「これで終了だ。なんとか夕飯前に片付いたな。」しかし二人は黙ったままだった。陵人の殺気に当てられ、言葉を失っていたのだ。陵人を見る二人の視線には明らかに「恐怖」が込められていた。（当然だな。やはり二人を巻き込むじゃなかった・・・）陵人は後悔しながらも、『息吹』を唱え、部屋の澱んだ空気を浄化した。空間が浄化されたことでなんとか動けるようになった二人は、大きくため息を吐いてその場にへたれこんだ。「大丈夫か？」「な、なんとか・・・」「しんどかった！」「悪かった。結局巻き込まれたな。」沈んだ陵人の表情を見て駿が切り出す。「気にするな。俺たちはその何倍も思えに助けられてるんだ。」「そうだよ。ちよつとビックリしただけ。」駿も茜もいつもの暖かい笑顔で陵人を見つめている。そんな二人に申し訳なさど感謝の気持ちでいっぱいになった陵人は、二人に最高の笑顔をプレゼントした。
（いつもの陵人だ・・・）二人はようやく安堵することができた。しばらくして阿頼耶式の間が男の身柄を引き取りにきた。先ほど陵人が話していたのは阿頼耶式だったようだ。手短かに事件の内容を話し、男と使い魔を引き渡す。去り際に阿頼耶式の男が陵人に向かって話し出した。「陵人様、総長からの伝言です。いい加減戻ってこい・・・と。」陵人は鼻で笑いながら「うっせー。そう伝える。」

阿頼耶式の男も笑みを浮かべ、「承知しました。」そう言って去っていった。それから陵人は田所に会いに行き、事件の詳細を伝えた。「ありがとうございます。さすが修さんの息子さんだ。今日は精一杯のサービスをさせていただきます。料理でもお酒でもなんなりとお申し付け下さい。」「ありがとうございます。」部屋に戻ると時間は午後5時を回ったところだった。三人は食事の前に風呂に入ろうということになり、今度は三人一緒に大浴場に向かった。風呂に入り、さっぱりした三人が部屋に戻ると、ちょうど夕食の準備が始まるころだった。豪勢な舟盛、季節の野菜をふんだんに使った天ぷらや煮物の創作料理、村上牛のしゃぶしゃぶ、その他にもとても食べきれないような量の超豪華な料理がずらりと並び、酒もビール、日本酒、焼酎と様々な種類の酒が用意された。

全ての料理が揃うと、田所が部屋に入ってきた。「本日は本当にありがとうございます。このようなことしかできませんが、ごゆっくりお楽しみください。」そういつて丁寧にお辞儀をして出ていった。「さて、それじゃー始めますか！」駿の一声で二人ともグラスを持ち、「セーの！カンパニー！！」盛大に宴会がスタートした。超豪華な料理と地酒に舌鼓を打ちながらいつものようにたわいも無い話をしながら馬鹿騒ぎをする三人。会話自体はいつも通りなのだが、旅行、温泉というフレーズが三人のテンションを上げに上げていた。「もう食べねー！」「私もお腹破裂しそうー！」「二人はお腹をさすりながら満足そうな顔を浮かべている。「茜、フロントに連絡してつまみになりそうな料理以外片してもらえ。」「はい！」「苦しそうにハイハイしながら内線電話まで這っていく。「あ、食事終わったんで、片付けお願いします！」「すぐに仲居の鳥居がやってきて、料理を片付けていく。陵人はついでに酒のお替りを頼んだ。「お前まだ飲むのか！？」「酒自体はそんな飲んでないだろーが！」「私ちよつと休憩。」「おい、食ってすぐ寝たら仕事に困るぞ！」「大丈夫、大丈夫！私どんだけ食べても太らない体質だからー！」「余裕しゃくしゃくで寝転ぶ茜。「まったく……。どこら辺がア

アイドルなんだ?」「この辺とかー、この辺ー!」自らの胸を揉みしだき、足を高々と上げ美脚を露にしてみせる。「やめんか!」「へへえー」タバコを吹かしながらいつものように微笑ましく二人のやり取りを眺めている駿。(まったくこいつらは・・・)そんなやり取りをしていると、鳥居がお替りの酒を持って現れた。慌てて茜は座り直す。「そろそろお布団の用意をさせていただいてもよろしいでしょうか?」「あ、はい!お願いします。」「かしこまりました。お布団はどのように敷いたらよろしいでしょうか?」「二つは床の間で、もう一つはその辺りに置いておいてください。」「陵人が返答すると、「ちよつと待って!その一つつてもしかして私!」「もしかしなくてもお前だ。」「私一人で寝るの!?やーだー!川の字で寝ようよー!」「馬鹿言つな。」「やーだー!こんな広いところで一人で寝るのやーだー!」「ダーまとわり付くな!」「あの、全部床の間でいいです。」「二人を他所に駿が鳥居にゴーサインをだす。「おいコラ駿!お前何言つて・・・!」「いいじゃねーか陵人!せつかく三人で来てんだから仲良く寝ようぜ!」駿はニヤニヤしながら親指をビシつと立てる。「やったー!」「茜は飛び上がった喜ぶ。鳥居は満面の笑みを浮かべ、「かしこまりました。それではご用意させていただきます。」「そういつて部屋を出ていった。」「川のつ字、川のつ字　!!」茜はまだ踊っている。「まったく・・・少しは女としての自覚を持て。」「呆れた表情を浮かべる陵人だが、普段の陵人ならこんなことは絶対に言わない。元来陵人は無類の女好き。むしろ同じ布団で寝ようと言い出してもおかしくないのだ。しかし茜に関しては違った。どうしても過剰に反応してしまう。ほとんどお父さんみたいだが、そうではないことに気付いているのは駿だけである。正確に言えば、碓水、修一郎、天美にいたるまで二人の仲を知っている誰もがそのことに気付いている。わかっ
つてないのは当人だけだ。

それから再び飲み直し、順番に部屋の露天に入っていた。時間は夜中の1時。朝からはしゃぎまくり、能力者と対決した二人は思っ

ていたより早く眠気がきた。明日もあるので、今日はそろそろ布団に入ろうということになり、何故かくじ引きで寝る場所を決めることになった。結果は陵人を真ん中に、左に茜、右に駿という並びになった。布団に入り、少しだけ話をしてから三人は眠りについた。駿と茜は疲れからか一瞬で眠りについた。両サイドから寝息が聞こえる。陵人はなんとも言えない幸せな気分だった。そして、暁のことを考えていた。(あいつら、そろそろ片付けなきゃいけない…。)

(その時、寝返りをうった茜の顔が目の前にきた。(可愛いな…。)

(超人気グラビアアイドルの無防備な寝顔をこんな至近距離で拝めるとはなんて贅沢なことだろう。ファンにはれたら確実に抹殺されてしまう。そんなことを考えて一人で笑っていると、茜が陵人の手を掴んできた。思わずドキッとした陵人だが、茜は完全に眠っている。無意識に掴んだだけだった。陵人はその手を払わず、そっとその手を握り返して眠りについた。幸せな気分のまま…。)

朝方、ふと目を覚ました茜は、陵人が自分の手を握っていることに気付くと、(夢かな…。それでもいいや…。)今度は茜が陵人の手を握り返し、再び眠りに付いた。幸せな気分のまま…。

翌朝、目覚めた三人は朝風呂を浴びに再度大浴場に向かった。昨夜の酒をお湯に流し、これまた超豪華な朝食を食べてから、三人はフロントでチェックアウトを行った。「お代は結構でございます。」そう田所が申ししたが、また利用させてもらいたいからと陵人は代金を払おうとした。「いえ、実は修さんからすでに振り込まれているのですよ。」「そうだったんですか。それじゃあ、お世話になりました。」「三人は丁寧にお礼を言って旅館を後にした。

後日修一郎に確認したが、料金など振り込んでいないということだった。東京に着き、二人のコピーの位置を確認してから、とりあえず自宅に送って行った。コピーが帰ってきたら、額を合わせることでコピーの記憶を取り込むことが出来ると説明し、陵人は自宅マンションに戻っていった。

また少し三人の絆が深まった満足感と、ちょっぴり焦燥感にかられ

ながら・・・そして、
陵人と茜の距離もまたちよびつとだけ短くな
った旅行だった。

第四章 接触

三人での旅行から三週間が経ち、相変わらず三人はそれぞれの仕事
が忙しく、電話やメールでの連絡のみで、会えない日々が続いてい
た。茜は陵人に会いたくて会いたくて禁断症状が出ているほどだ。
そんなある日。陵人は一人でNYXにいた。数名の客がテーブル席
を囲む中、陵人はカウンターに座り、碓水特性のイカの塩辛をつま
みに日本酒をちびちびと楽しんでいた。

「ところで陵人。茜ちゃんとはその後どうなのよー!？」

碓水が楽しそうに聞いてくる。

「どうもこうも何も無いよ。師匠みたいなこというなっつーの!」

「いいじゃない!母親代わりとしてはいろいろと心配なのよ。」

「まさか孫の顔が見たいなんていうんじゃないだろうね?」

「あら、よくわかったわねー!」

(ホントにこういう思考は師匠そっくりだ・・・)

などとたわいも無い話をしていると、突如邪悪な気配が店内に流れ
込んできた。

碓水、陵人はもちろん、店内にいた全ての能力者がそのことに気付
いた。

碓水のテリトリーに何者かが侵入したのだ。

碓水は自身の『隔絶』の能力でNYXの周囲一帯に大きな結界を作
り上げ、一般人や、邪悪な能力者の侵入を常に阻んでいる。その結
界が破られたのだ。

「全員戦闘態勢をとって!ただ者じゃない!」

陵人はとっくに警戒体制に入っている。他の能力者たちも碓水の一
言で非常警戒態勢をとった。

かつて最恐と恐れられた元阿頼耶式総長の結界が破られたのだ。

今店内にいる能力者の中でそんな芸当ができるのは陵人しかいない。
全能力者を合わせてもほんの一握りの能力者しかできないことを、

破られるまで気付けないほど迅速にやってのけた者がこちらに向かってくる。店内に異常な緊張が走った。

「来る・・・！」

陵人はいつでも術が発動できるよう集中力を高めた。

静かに店のドアが開き、一人の男が入ってきた。

「お邪魔します。」

「これはまた大物が来たわね・・・。」

「ご無沙汰しています。碓水さん。それに陵人。」

男は笑顔を絶やさず挨拶しているが、その笑顔は冷たく、凍りつくようである。

「随分舐めたマネしてくれるじゃない。覚悟は出来てるんでしょ
ね？鏡かがみ一いち？？」

「やだなー、そんな怖い顔しないでくださいよ。別にやり合おう
てんじゃないんですから。」

「だったら何しにきやがった！？返答しだいじゃ今すぐ殺すぞ。御み
堂どう。」

「まったく二人とも血の気が多いんだから。綺麗な顔が台無しだよ。」

「テメー・・・！」

戦闘態勢に入った陵人をひとまず碓水が抑える。

「それで、何のようなの？元MAINDS 鎮圧部隊 『獣神』副
隊長さん。暁の副総帥って言ったほうがいいかしら？」

「どちらでも構いませんよ。肩書きなんてあつてないようなもので
すからね。今日はほんの挨拶ですよ。久しぶりに昔の仲間の顔が見
たくなりました。」

「何が昔の仲間だコラ・・・！テメー自分が何したかわかってんのか
・・・！？」

「もちろん自覚しているよ。反省はしてないけどね。」

「貴様・・・！」

「まあそういきり立つなよ。君の相手は私じゃない。そうだろ？」

御堂は不敵な笑みを浮かべている。その笑いの意味が陵人にはわかっていた。

「近いうちに挨拶にくるそうだよ。あとうちにも血の気の多いのがいてね。どうしても君とやりたいうって聞かないんだ。そっちの方もよろしく頼むよ。殺しちゃって構わないから。」

陵人は湧き上がる感情を必死に押さえ、今は戦う時ではないと自身に言い聞かせた。

冷静さを取り戻し、

「ようするに宣戦布告ってことだな？」

「そう捉えてもらって構わないよ。といっても実際に動くのはもう少しあとだけだね。」

「容赦しねーからな。奴にもそう伝える。」

「伝えておくよ。彼も喜ぶ。」

二人は一切視線をそらさず、今にも殺し合いが始まりそうな緊張感と殺気を隠しめせず前面に出している。普通の人間ならこの場所にいるだけで命を失ってしまうほどの圧だ。

「じゃあ、あまり長いしてもなんだから私はそろそろ帰らせてもらうよ。碓水さん、また顔が見れてよかった。お邪魔しました。」

「二度とこないで頂戴。」

碓水が笑顔で返す。しかしその表情はかつて最恐といわれた頃の顔に戻っていた。

「それじゃ。」

終始笑顔を絶やさなかった御堂は静かにNYXから出ていった。

御堂が出ていったあとも、陵人と碓水はしばらく扉を睨んだまま拳を握り締めていた。

数分後、完全に御堂の気配が消えたのを確認し、陵人はようやく緊張を解いた。店内にいた他の能力者たちはたった数分の出来事に疲労困憊の様子だ。

陵人はとりあえず『息吹』を唱え、店内の空気を一掃した。

そして再び席に戻り、酒を飲み始めた。

「遂に向こうからしかけてきたわね。」

「好都合だよ。俺もそろそろだなんて思ってたしね。」

「挨拶にくるって、あいつがくるってことかしら？」

「だと思つよ。奴の相手は俺にしかできないからね。全面戦争になるにしろ、最後は俺と奴との一騎打ちになる。それは奴もわかってるはずだから……。」

「そうね……。」

これ以降、二人は会話をすることなく、この夜は静かに更けていった。

一方……

碓水のテリトリーから出た御堂は、その足でとあるBarに向かった。

地下への階段を下り、重苦し店の扉を開けると、カウンターに一人の男が座っていた。

「戻りました。」

そういつて隣に腰を下ろす。

「どうだった？」

「さすがにあの二人を前にすると緊張しますね。本気で殺されるんじゃないかと思いましたよ。」

「そうか。てことは陵人は相変わらずってことだな。」

「ええ。力を抑えてる状態であれだけの殺気を放つんですから、まいりましたよ。彼からの伝言です。『容赦しねー。』だそうです。」

「そうか。楽しくなってきたな。」

「あの二人はホントに行かせるんですか？」

「ああ。残りの面子が揃うまでちょうどいい暇つぶしになる。俺は陵人の方を見物してくる。ついでに挨拶もしてくるから、お前はもう一人の方につけ。後始末を頼む。」

「了解しました。しかし、どこの組織にも身の程を知らない奴ってのはいるんですねー。」

「いいんだよ。そういつのがいなければつまらんだろ。」

「まあそうですね。いつやらせるんですか？」

「二日後だ。」

「わかりました。」

こうしてもう一つの夜も、静かに更けていった。

翌日。陵人は都内で仕事を終え、久しぶりに駿と約束をしていた。

（久しぶりといってもたかだか三週間ほどだが。）

茜は残念ながら仕事で地方に行っているため不参加だった。事前にわかっていたため、あえて茜には連絡を入れていない。（自分だけ参加できないと泣きわめきかねないからである）

二人でNYXに向かって歩いてみると、陵人は背後に気配を感じた。攻撃的な気を隠そうともせず、真っ直ぐに陵人に向けられている。

「駿。どうやら客のようだ。」

「客？もしかしてつけられてるのか？」

「ああ。恐らく暁だ。一応心の準備だけはしといてくれ。」

「あいよ。」

駿がここまで冷静でいられるのは、こういったことが初めてではないからである。

陵人の職業上、同業者に狙われるのはそう珍しいことではない。ただ実際に襲ってくる度胸のあるやつはなかなかいなかった。何せ天上天下に轟く最強の能力者なのだから。

それでも身の程を知らない奴はいるもので、以前にも、二人でいるところをいきなり襲われたことがあった。

刺客からしたら、駿がいることで集中力が散漫になるだろうという浅はかな理由で。

当然そんなことくらいでは何の意味もなく、目の前でぼろくそにやられる能力者に駿は何度か遭遇したことがあった。

今回も同じだろうと思ったのだ。

しかし、陵人はいつもほど冷静ではなかった。

敵の気配がかなりの力の持ち主であるといっていたからだ。

轟と名乗るこの男。二メートル近い身長に筋肉隆々の身体。名は体を表すとはこの男のためにあるような、名前のカードと身体の写真を合わせるゲームがあったら、百人中百人が正解できるだろうわっかりやすい男だ。

（昨日御堂が言ってた馬鹿野郎はこいつか・・・。）

「テメーの名前なんてどうだっていいんだよ・・・。覚悟は出来てんだろーなー。」

「おめーをぶっ殺す覚悟ならとづくに出来てるぜ！」

（こいつ本物の馬鹿か・・・。）

何故こんなにも自身満々になれるのか陵人は理解に苦しむ。確かにその辺の能力者と比べれば力はある。しかし、本気になった陵人には遠く及ばないのは明らかだ。それとも何か他に作戦でもあるのだろうか？陵人は瞬時に頭をめぐらせるが、答えがでない。

「まあ安心しろ！今日はほんの挨拶だ！きつちりタイマンで勝負して勝たねーと意味ねーからな！」

（何を安心しろと??）

「明日の夕方。海沿いにある廃工場に来い！場所はわかんたる!?」海沿いの廃工場。なんともアバウトな説明だが、能力者の間で海沿いの廃工場と言えば一つしかない。そこは自然に出来た結果のおかげで、多少暴れても外部にそれが漏れることがないという能力者にとっては格好の場所だった。世界各地にそういった場所がいくつも存在し、訓練や実際の戦闘が繰り返されている。

「ああ。」

「よっしゃ！逃げるんじゃないぞ！今夜は最後の晩餐を楽しむこつた！けひゃひゃひゃ！」

（うつとーしい笑い方しやがって。）

「わかったわかった。とつとと失せる。」

陵人は轟をただの馬鹿と認定し、今日のところは至急お引取り願う方向で進めた。

「それじゃーなー！けひゃひゃひゃひゃ！」

馬鹿が馬鹿笑いしながら去っていく。普通に歩いて。その後ろ姿に馬鹿と書いてあるかのようだ。

少し下がったところで様子を見ていた駿が陵人の元に戻ると、

「なんだったんだ。あいつ。」

「わからん。気にするな。それより怪我はないか？」

「ああ。俺は問題ない。お前は？」

「あんな馬鹿相手に怪我なんかしねーよ。」

「だろーな。とりあえず行こうぜ。人が集まってくるかもしんねー。」

「

「ああ。行こう。」

二人は今の事はなかったことにしようと思い、足早にNXYへの道を急いだ。

それほど轟は馬鹿にしか見えなかった。

NXYに着くと、陵人は碓水に轟のことを話した。

碓水は予想通り苦笑いを浮かべている。ただの能力者なら腹を抱えて笑うところだが、相手が暁、しかも十二業の一人ということで、手放して笑うことが出来なかった。

「暁にもろくでもないのがいるのねー。まあ基本的にどうしようもないのの集まりだけ。」

「久しぶりにあんな馬鹿みたよ。明日殺してくる。」

「構う事無いから徹底的にやってやりなさい！二度と転生出来ないくらいにね！」

「もちろんそのつもりだ。」

「相変らずおつかない母子だなー。。。。」

「駿も被害を受けたんだから、言ってやればいいのよ！どうせ殺るのは陵人なんだから！」

「いやいや、俺はそこまでは。。。。」

「どうせ殺るのはつてのが若干気になるけど？」

「事実でしょ？今日はしっかり飲んでしっかり食べて、明日に備えて頂戴！とびっきりのサービスをするから！」

碓水は二人のために次々と料理を出していく。酒もじゃんじゃん注がれていった。

「な、なあ。なんで美影さんあんなに乗り気なんだ??」

「こないだちよつとな。もともと暁の連中が死ぬほど嫌いな人だから。」

「そ、そつか・・・。」

「お前は気にせずどんどん食って飲め！」

「そうだな！いやー美味い！そーいや最近茜ちゃんとは連絡とってんのか??」

「ああ。ほとんど毎日メールやら電話が来る。今はグラビアの撮影で沖縄にいるんだと。」

「それで今日は来れなかったのか。悔しがるだろうなー！」

「そう思っただけで連絡してない。」

「でもそのうち連絡くるだろう？」

「そうなんだよ。なんて言おうか・・・。」

そんなことを話していると、ホントに茜から着信が来た。

「うわっ、マジでかかってきた！」

「出るよ！切れちまうぞ！」

「いや、とりあえずここは放置でいこう・・・！」

「だー、じれつたい！」

駿は陵人から携帯を奪いとり、茜の電話をとってしまった。

「ちよつ、お前何勝手に・・・！」

「あらあら楽しくなってきたわねー！」

碓水も料理を作りながら興味津々だ。

「もしもし、茜ちゃん？久しぶりー！駿だよ！」

（え、駿君!?これ陵人の携帯だよね??もしかして一緒にいるの!?）

「そーゆーことー！今NYXにいるんだー！沖縄だって!?大変だねー！」

（ちよつとー!!ぬけがけー!?ずるいよー!）

「駿、私にも替わって！」

碓水がウキウキでしゃしゃり出る。

「もしも茜ちゃん？久しぶりー！元気！？」

（美影さん！私も行きたいですー！！）

「そうよねー！じゃあ来ちゃいなさいよ！」

（だって今沖縄なんですよー。。。）

「大丈夫よ！陵人に道を繋げてもらえば！」

（道ってなんですか！？）

「ちよつと美影さん！またそうやって勝手なことを・・・！」

「いいじゃない！私も茜ちゃんに会いたいもん！あ、もしも茜ち

ゃん??今から陵人に道を繋げさせるから、それを通ってこっちに

来てー！」

（な、なんかよくわかんないですけど、わかりましたー！）

「いやいやいや！誰もやるとは言っていないでしょ！？」

「いいからやりなさい。命令よ。」

碓水の表情が一瞬で『鬼女』に変わる。陵人はほとんどトラウマ化

しており、この時の碓水の言うことは聞かざるおえない。

「わ、わかりましたよ。。。電話を返してください。。。」

陵人は碓水から携帯を受け取ると、

「茜。今から・・・」

（ちよつと陵人　！！なーんで私に内緒でNYXに行ってるわ

けー！ホントありえないんですけどー！？）

喋る前に茜の金きり声が陵人の耳を貫く。

「だーもう、だから今から呼んでやるって言うてんだろっが！鼓膜

が破れたらどうすんだ！？」

（自業自得ですー！）

「ったく。いいか？今からこつちとお前のいるところの空間を繋げ

る。目の前に空間に歪みが出来たらその中に入って進んでいけ。い

いな？」

（了解　！早くやってー！）

「はぁー、なんでいつもこうなるんだ・・・」

陵人はブツブツ言いながら携帯をいったん駿に預け、両手を前にだし、人差し指と親指で三角形を描き、集中する。

「『亜空航路』」

指で描いた三角形の先から徐々に空間が歪んでいき、少しずつブラックホールのようなものが出来あがっていく。陵人は頭の中に茜を思い浮かべ、

「牧村 茜」

茜の名を呼んだ。

すると通話中の携帯の向こうから茜の反応があった。

（なんか、真つ黒いのが出てきたー！！これに入るの！？）

術を完成させた陵人が携帯を受け取り、

「そうだ。思い切って入ってこい。しばらく歩くと光が見えてくる。その先に俺たちがいる。」

（わかったー！じゃあ行くねー！）

茜は思い切って中に入り、道を進んで行った。『亜空航路』の中は大きな渦のようになっていた。砂粒のような小さな光が無数にちりばめられており、入り口からは想像できないほど明るかった。

「キレーイ！！」

茜は渦の中を見回しながらゆっくりと進んでいく。

しばらく歩くと、先に薄っすらと光が見えてきた。

「あ、あれが出口かな？」

茜は小走りで光に向かっていった。

そして勢い良く光に飛び込んで行くと、目の前に立っていた陵人の胸の中にたどり着いた。

「りよ、陵人・・・！」

突然陵人の胸の中に飛び込んでしまった茜の心臓はドッキンドッキンだ。

「どーせ勢い良く飛び込んでくるんだろうと思ったんだ。立ってて正解だったな。」

柔らかい笑顔の陵人が目の前にいる。会いたくて会いたくてしかたなかった陵人が目の前に。茜は天にも上る気持ちだった。

「いつまで抱き合ってるのかしらー??」

「あ、ご、ごめん・・・!」

確水に冷やかされ、ようやく我に返った茜は慌てて離れる。(本当はまだまだくつついていたかったのだが。)

「いらつしゃい、茜ちゃん!」

「お邪魔します!美影さん!駿君も久しぶり!」

「たかだか三週間だけどね!元気だった?」

「うん!駿君ドラマ見てるよー!」

現在駿は月九で主演をしている。視聴率も平均20%を越す最近では珍しいくらいの人気だ。

「ありがとう!」

「いいからお前も座れ。」

「はーい!」

こうしていつもの面子が揃い、宴が始まった。

「ねーねー、さっきのなんて術??」

「『亜空航路』だ。離れている相手と亜空間を繋げることで行き来することができる。」

「なーんでこんな便利な術を隠しとくかなー。」

「別に隠してたわけじゃねーよ。難しい術だから発動条件が細かいんだ。そう簡単に使える術じゃねーんだよ。」

「発動条件って??」

「まず大前提として相手があるということだ。何もないとこに道を繋げることはできない。そして、繋げる相手の名前と顔、そして現在地がある程度わかってることが必要だ。」

「その条件なら私たちには使えるんじゃないの??」

「もう一つある。お互いの意思が同じであるということだ。お互いが道を開くことを許可しなければ道は繋がらない。今までは俺がこの術を使う気がなかったから、この術は使えなかったんだ。」

「なんで使う気がなかったのよー!?」

「なんでもかんでも術に頼ってたら墮落するだけだろうが。自分でもなんだけど能力は表の人間からしたら反則技のオンパレードだからな。極力使わない方がいいんだよ。もともと緊急脱出ように作った術だしな。」

「まあそれはそーだな。」

駿がうなずく。

「まあそれはそうかも・・・。」

一応納得はしいてみる茜だったが、陵人に会えるならどんな反則技だつて使っちゃえ!というのが本音だ。

「だいたい最近のお前たちはだなー・・・。」

「はいはい、じじくさいこと言つてないでどんどん食べてどんどん飲みなさい!」

「そーしよー!」

碓水の助け舟に二人はウイנקで返し、宴を再開させた。

三人で集まるのは旅行以来のため、今夜は碓水も混ざつて大いに盛り上がった。

明日はあの馬鹿・・・いや轟との決戦が待っている。ほんの少しだけそのことを考えながら、陵人はこの仲間との宴を心行くまで楽しんだ。

深夜、再び茜を『亜空航路』で沖縄のホテルに送り返した。

駿と別れ、陵人は一人家路に着く。

明日、暁の馬鹿を片付ける。もしかしたら、あいつも来るかもしれない。そんな期待をしながら、騒がしい夜は静かに過ぎて行った。

次の日・・・。

十二月に入り、本格的な冬が訪れ、日が落ちるのが更に早くなった。現在時刻は16時。すでにあたりは薄暗くなっている。

陵人は指定された海沿いの廃工場に向かって車を走らせていた。

あと30分程で到着するだろう。

車の中で陵人は轟のことではなく、御堂の言葉を思い出していた。
「あいさつにくる」

暁の総帥であるあの男がもうじき現れるということだ。
陵人はこの男を知っている。

そしてそれはおそらく今日であると、陵人は感じていた。

轟は噛ませ犬でしかない。力はそれなりにあるだろうが、陵人の敵ではない。油断させしなれば問題なく倒せるだろう。

それよりもあの男の方が気になる。

そんなことを考えているうちに、陵人は目的地に到着した。

海沿いの廃工場は、寂れた漁村に存在し、周囲に民家はほとんど存在しない。さらに自然に出来た結果によって、能力者以外は見つけることが出来ないようになっていく。

元々は海鮮類を処理する工場だったが、過疎化の影響で住民がどんどん減少していき、遂にはつぶれてしまったということだ。

その後怪異のたまり場と化した工場が、能力者の念に反応し、結果が生まれることとなった。

陵人は工場の付近に車を止め、工場の敷地内へと入っていった。人はおろか猫一匹姿を見せない。陵人はかつて修一郎と共に修行でこの工場を使用していた。訪れるのは数年ぶりだ。

「なつかしいな。当たり前だけど変わってねーな。」

少しだけ昔のことを思い出しながら進んでいくと、工場の内部に轟が待っていた。

陵人を確認した轟は、小学生のように目をキラキラさせた。

まるでお父さんの帰りを待っていた子供のよう。

いったい何時間前から来ていたのだろうか。もしかしたら前日から泊まり込んでいたのかもしれない。

そんなことを考えてしまっくらい、轟は見事な笑顔を作った。

「待ちくたびれたぞ！ てつきり逃げ出したんじゃねーかと思ったぜ

！ けひゃひゃひゃ！」

「その笑い方なんかならねーのか？ 非常に不愉快だ。」

タバコに火をつけながらあからさまな表情を浮かべる。

「けひゃひゃひゃ！相変わらず威勢がいいな！だがなー！そんな余裕が浮かべてられるのも今のうちだぞ！武士の情けだ！この世で最後のタバコを存分に味わえ！」

呆れるしかない陵人はお言葉に甘えてゆっくりとタバコを吸っている。

しかし、陵人は妙な違和感を感じていた。

確かに目の前にいるのは二日前に会った轟本人のだが、この前とはどこか違うような気がする。馬鹿野郎っぷりは全く同じだが、二日前に会った時よりも力が上がっているような、そんな気がした。しかしそんなことよりも陵人には気になることあった。

「お前、本当に一人で来たのか？」

「んあ！？何だビビッてんのか？安心しろ！俺一人しかいねーよ！へたな小細工を使う気はねー！」

「そうか・・・」

周囲の様子を窺うが確かに気配は感じられない。

（期待し過ぎたか・・・）

大きく吸い込み、勢いよく煙を吐いた。

「さて、じゃあ始めるとするか。先に言っておくが、容赦しねーぞ。」

「

「上等だー！そっくりそのまま返してやるぜ！けひゃひゃひゃひゃ！」

「だからその笑いをやめろって言っただろうが・・・！『赤爆』！」
遂に二人の戦いが始まった。先にしかけたのは陵人。

轟は上空に跳び、攻撃をかわす。壁に激突した『赤爆』は大きな爆発とともに煙を上げる。

轟はそのまま陵人目がけて突っ込んできた。

「だーっしやー！！」

後方に跳び攻撃をかわす。間髪入れず次の術を発動させた。

「『斬鬼』」

目に見えない高速の刃が轟に襲い掛かる。

着地と同時に放たれたため、轟は避けることが出来ず、その場で防御の姿勢をとったものの『斬鬼』をまともに食らってしまった。にも関わらず、轟はかすり傷一つおっていない。

「何・・・!?」

「効かねーなー!!!」

更に轟は陵人目がけて突っ込んできた。二日前に会った時よりも数倍の速さだ。

陵人は避けきれず、防御の上から一撃をもらい、壁まで一気に吹っ飛ばされた。

「けひゃひゃひゃー!どうしたどうしたー!そんなもんかー?あー!?!」

壁に激突したが、常に肉体を強化しているため、それほどダメージは食らっていない。

すぐに起き上がり、

「くそが!調子に乗るなよ・・・!『隼』!」

瞬時に轟の背後に回り、

「『竜槌撃』!」

竜をも打ち落とす威力の拳を轟の顔面目がけて繰り出す。

だが、轟は陵人の動きにしっかりとついてきていた。陵人が拳を繰り出したと同時に、振り返りざまの一撃を放つ。

轟と陵人の拳が激突する。

威力は互角に見えた。拳と拳が均衡している。

しかし、陵人は全力で拳を放っているが、轟には余裕の笑みが浮かんでいる。

「けひゃひゃひゃー!やっぱりだ!お頭の言った通り、おめーの技は俺には通用しねー!」

「な、なんだと・・・!」

陵人はさらに力を込めるが、轟はビクともしない。

「効かねーって、言っただろーがー!」

轟は雄たけびと共に拳を一気に振り切った。

陵人はさっきの倍の速度で壁に吹っ飛ばされてしまった。

「く、くそ・・・が・・・！」

今度は思いのほかダメージを受けてしまった。

「けひゃひゃひゃー！おめーこの前の俺の動きが全力だったとでも思ってたのか？あん時はおめーがかわしやすいようにわざとスピードも威力も抑えてたんだよ！今の俺はあの時の十倍の力だ！」

「な、なんだと・・・！まさか『封刻』を施してやがったのか・・・！？」

「よく知ってんなー、その通りだ！お前が来る前に俺は封印を解いておいたんだよ！これが俺の真の実力つてやつだー！」

『封刻』とは、協力的な力を持った能力者が通常時の力を抑えるために、自らの身体に封印を施すことである。力の強い能力者はそれだけで周囲の怪異や人間に影響を与えてしまう。そのため、普段は自らの力を抑えなくてはならない。更に、この封印は他の者には全く分からないのである。そのため、陵人も轟の封刻に気付くことが出来なかったのだ。

「どうやら、お前を甘く見すぎていたようだな。まさか『封刻』を使つてやがったとは。」

「昨日お頭に言われてなー！封印を解けばおめーの術なんて怖くねーってよ！まったくその通りだぜ！おめーの攻撃は痛くも痒くもねー！けひゃひゃひゃー！」

「なるほど・・・。」

陵人は確信した。あの男は間違いなくきている。完全に気配を消しているが、どこかで様子を窺っている。

「上等だ・・・！いいだろう。俺も本気を見せてやる。」

「今更なにを強がつてやがる！おめーの攻撃は効かねーと言つてんだろーが。」

「お前、まさか『封刻』を使えるのは自分だけだと思つてんじゃねーだろうな？」

「なんだと???え、ま、まさかおめーも・・・!??」

「ホントに知らなかったのか？おめでたいやつだ。」

「陵人は自らの気を高めていく。」

「言うておくが、俺の『封刻』はお前とは比べ物にならんぞ。」

「く・・・させるかー！！」

轟は封印を解く暇を与えまいと、陵人目掛けて突っ込んでいく。

「無駄だ。『月影』」

陵人の『封刻』はそんなじよそこの封印ではない。天上理事会常任理事である陵人はいわば神と同等の力を持つ。その強大な力を抑えるため、四重の封印を自らに施しているのだ。

一つ一つの封印が術化しており、術を発動すると封印が解ける仕組みになっている。

一つの封印を解くと、力は数十倍にまで膨れ上がり、封印を解くことにより、通常時には使うことが出来ない高度な術を使うことができるようになる。

第一の封印を解く術『月影』。

発動させた時点で、轟の勝ち目はゼロとなった。

一方その頃・・・

ここは地方にあるゴルフ場。今使われておらず荒れ放題で、何故か広大な敷地だけが手付かずで残されていた。

「まったく、こんなところに呼び出すなんてどういう神経してるんだい？」

そうもらすのは神崎 修一郎。

「すみませんね。こんなところにまできていただいて。」

「ホントだよ。で、いったい何のようだい？まさか本気で私と戦いたいってわけじゃないだろ？」

「いえ、純粹にあなたと戦いたかっただけですよ。」

「そもそも君は何者だい？手紙には暁としか書いてなかったけど。」

「申遅れました。私は如月 和人。暁十二業の一人です。」

「暁十二業？君が？」

「ええ。ずっとあなたと戦ってみたかったです。今日ようやく叶えることができます。」

「なぜ私なんだい？他にも相手ならいくらでもいるだろう。MAI NDSの若手の方が実力も近いだろうに。」

「そんなんじや意味がないですよ。今この世界ではあなたの弟子である神崎 陵人が最強だと謳われています。しかし、真の最強は師であるあなただと私は思うのです。前線を退いたとはいえ、現在もMAINDS特別顧問という総統と同等の権力を持つあなたこそ、最強の名にふさわしい。違いますか？」

「君は私を買いかぶり過ぎだよ。陵人はとうに師である私の実力を超えている。彼が最強であることに間違いはない。師としては喜ばしい限りだよ。」

「あくまで謙遜されるのですね。いいでしょう。しかし、私の目的に変わりはありません。私の目標はあなただ。そして、今日。その目標を超える。」

「えらい自身だね！。まさか本気で私に勝てるとも思ってるのかい？」

「ええ。そのために必死で修行し、技を磨きました。暁に入ったのも、その方があなたと戦える可能性が増えると思ったからです。おかげさまで、今こうしてあなたの目の前の立つことが出来ています。」

「愚かなことをしたね。いいだろう。相手をしてあげよう。男からのラブコールは好きじゃないんだ。今日で終わりにさせてもらうよ。」

「ありがとうございます。では、行きます・・・！！」

もう一つの戦いの火蓋が切つて下ろされた。

「『散烈光弾』！！」
如月の両手の指から機関銃のように無数の念弾が修一郎目がけて発射された。

「ほう・・・。」

修一郎は右手をかざし、念で壁を作りあげた。

「やりますね……。それでは……。『はくげきそうこうだん迫撃操光弾』！」

如月は両手で念の塊を作り上げ、修一郎に投げつける。

「切り替えが早いね。」

修一郎は壁を解き、上空へとかわす。

「無駄ですよ！」

上空へとかわした修一郎の動きに合わせるように光弾が進路を変更させる。

「面白い……。」

追ってきた光弾を上空でひらりとかわす。

「そいつは命中するまであなたを追い続けます。」

如月の言葉通り、光弾はどこまでも修一郎を追ってくる。修一郎は紙一重で光弾を避け続けた。

「よく練りこんでいるね。それでは……！」

光弾とある程度の距離を取ると、修一郎は振り返り、右手に力を込めて後方から一気に前に突き出した。

その瞬間、光弾は爆発し、辺り一面に激しい閃光が降り注いだ。

「さすがですね……。しかしこれならどうですか？？」

如月は『迫撃操光弾』を今度は片手に一つずつ練りだした。それを同時に修一郎目がけて放つ。

光弾は上下左右と曲線を描きながら修一郎に襲い掛かる。

「なかなか器用じゃないか。だが無駄なこと。」

修一郎は避ける動作を一切せず、先ほど同様右手をかざし、光弾を二発まとめて爆発させた。

「く……！まだまだ……！」

如月は『散烈光弾』を発射しながら動き出す。上下左右あらゆる方向から発射し、辺り一面煙幕が広がり、視界が遮断されていく。何百、何千という弾を浴びせ、如月は止めに直径一メートルほどの巨大な光弾を作りあげた。

「これで終わりです！『ぜっしつだん絶光弾』……！」

躊躇なく修一郎に投げ放った。

弾は修一郎に直撃し、爆音と共に嵐のような爆風が巻き起こり、辺り一面煙塵が立ちこもる。

「はあ、はあ、どうですか……。私の力……」

如月もこれだけの力を使い、さすがに息を切らしていた。だが、手応えは感じていた。この爆発から考えても間違いなく『絶光弾』は命中した。当たりさえすれば、修一郎とてただではすまないはず。如月からは勝利の笑みがこぼれる。

徐々に砂埃が落ち着き始め、視界が開けていく。

だが次の瞬間、如月の笑みは絶望へと変わった。

「これで、終わりかい？」

そこには修一郎が無傷で立っていた。あれだけの『散烈光弾』を浴び、『絶光弾』も命中したはずなのに、かすり傷一つ負っていない。

「さすがは十二業の一人だね。なかなかの威力だ。」

「そ、そんな……！確かに命中したはず……！」

「命中？この程度の攻撃を私が食らうとでも？随分舐められたものだね。」

修一郎は苦笑いを浮かべる。

「く……くそ……！まだだ！まだ終わりじゃない！ここで終わるわけにはいかないんだ！」

「うおー！！！」

雄たけびと共に如月は両手を後ろに回し、『迫撃光弾』を放つと、ジェット噴射の要領で一気に修一郎の間合いへと飛び込んだ。

肉弾戦に持ち込もうというのだ。

「しつこいねー君も。」

如月はその勢いのまま突っ込み、全力で拳を握り、修一郎の顔面に叩きこむ。

だが、修一郎は紙一重でそれをかわす。

「ほう、拳の中で念を練り威力をあげているのか。肉弾戦のことも考えていたとは、優秀だね。」

まだまだ余裕の修一郎に、如月は次々に拳や蹴りを入れていく。しかしどの攻撃も全て紙一重でかわされてしまう。

「くそがー!!!」

顔面に向かって放った拳を始めて修一郎が受け止めた。

「く・・・!」

「さて、そろそろ終わりにしようか。如月君。」

修一郎の強烈な一発が如月のどてっ腹に叩きこまれる。

「があ・・・はあ・・・!」

更に反転し、如月の後方に回ると、延髄に強烈な蹴りを繰り出す。

如月は一気に十数メートル先まで吹っ飛ばされた。

「さて、どれくらい効いてるかな?」

修一郎はゆっくり如月に向かって歩いていく。

如月はなんとか気絶せずに済んだというレベルだった。たった二発の攻撃を食らっただけで、立ち上がることさえ出来ずにいた。

そんな如月にゆっくりと修一郎は近づいていく。

「満足したかい?」

如月は気力を振り絞り、どうにかこうにか立ち上がる。

「く・・・やはり・・・あなたは最強だ・・・ここ・・・まで・・・レベルが違うなん・・・で。」

「君の実力が足りな過ぎたんだよ。その程度でよく私に戦いを挑もうと思っただね。」

「総帥から・・・やってみる・・・価値は・・・あると・・・言われたんですよ・・・。」

「そうか。どうや君は暇つぶしの道具にされたようだね。」

「な・・・!?どういう意味ですか・・・!?」

「君程度の実力では私に傷一つ付けられないのは当たり前だ。私のことを知っている人間なら誰だっかわかる。そして、君のこの総帥と私は少なからず面識がある。つまり、こうなることは初めからわかっていたはずだ。にも拘らず、彼は君を行かせた。戦力が揃うまでの暇つぶしとしてね。」

「そ、そんな・・・！私は・・・、玩具にされたというのか・・・！？」
「まあ、そういうことだね。」

如月は真実を知り、再びその場に倒れこんだ。戦意は完全に失っていた。いや、もはや生きる希望させも。

「君には一緒に来てもらうよ。いろいろと聞きたいこともあるからね。」

如月に反応はない。

修一郎が如月に手をかけようとした時、後方から凄まじい力の塊が飛び込んできた。

次の瞬間・・・。

「があっ・・・！！！」

如月の心臓は破裂し、口から大量の吐血をすると、そのまま前に倒れこみ、動かなくなった。

「如月君！」

修一郎は如月を抱き起こすが、すでに手遅れだった。

如月の目には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「いやー、そいつを連れてかれるといろいろとまずいですよー。」

修一郎さん。」

こちらに向かつてゆっくりと歩いてくる見覚えのある男。

「相変わらずだね、君は。鏡一。」

「ご無沙汰してます。すみませんでした。こんな茶番につき合わせてしまつて。」

「やはり彼の仕業かい？」

「ええ。もちろん。でもまあ久しぶりに修一郎さんの動きが見れてよかったですよ。ついでにその始末もしてもらえます。持って帰るの面倒なんで。」

「君という男は・・・。」

「まあまあそう怖い顔しないで。この先はあなたに刺客を向けるよ。うなことにはなりませんから！安心してください。」

「そうしてくれると助かるよ。あまり表舞台に立つのは好きじゃな

いんだ。それにこの先は若い世代の時間だからね。」

「わかってますよ。それじゃ、皆にもよろしく言っておいてください。」

そう言い残し、御堂は消えていった。

「陵人。いよいよ始まりそうだよ。世界を賭けた戦いが・・・。」

そして舞台は再び陵人と轟へ・・・

「食らいやがれー！！！」

轟は全力で陵人の顔面目がけて拳を繰り出す。しかし、すでに遅かった。

陵人の第一の封印『月影』はすでに開放されていた。陵人は轟渾身の一撃を片手で軽々と受け止めている。

「お遊びはここまでだ。」

陵人の強烈な一撃が轟の顔面に叩き込まれる。

轟は一瞬で壁まで吹っ飛ばされた。

封印を解いた陵人は、通常時に使っていた術の全てを、発動条件を無視して使うことができる。詠唱しなくては使えなかった術が、動きの一つ一つに溶け込んでいる。つまり、今の一撃には『竜槌撃』が自動で付加されているのだ。

「立てよ。こんなもんじゃねーだろ？」

「あたりめーだー！！！」

轟は勢い良く立ち上がり、再び陵人目がけて突っ込んでくる。

「芸のない野郎だ。」

陵人は『隼』の速度で攻撃をかわす。

術の威力、性能も桁違いに上がっている。

あまりのスピードに轟は付いていくことが出来ず、空振りをしたあと陵人の姿を捉えることが出来ない。

「ここだ。」

後ろから突然声をかけられた轟は慌てて振り返るが、陵人は待って

はくれない。痛烈な一撃を轟のどてつ腹に叩き込み、轟を上空に飛ばすと、間髪入れずに『斬鬼』を放つ。

「ぐうおー！！！」

轟に無数の刃が襲い掛かり、体中が刻まれていく。

さらに陵人は攻撃の手を止めない。轟よりもさらに上空に跳び、数メートルの高さから轟を地面に叩きつけた。

さすがにこれだけの攻撃を食らってはひとたまりもない。轟は意識を失いかけていた。

「終わりか？」

陵人の声は聞こえていたが、身体がいうことを聞かない。

「所詮はこの程度か。手間掛けさせやがってこの馬鹿が。」

轟はやはり反応することが出来ない。

「さて、いい加減出てきたらどうだ？いるのはわかってんだよ！」

陵人の投げかけに応え、一人の男が工場内に入ってきた。

「久しぶりだなー陵人！元氣そうじゃないか！」

「お前もなー。元MAINDS 時の番人NO5、天童 忍！」

「何もフルネームで呼ぶことないだろー！恥ずかしいじゃねーか！」

「うるせーよ！舐めたマネしまくりやがって……！」

「心当たりが多すぎて分からねえ。」

「なぜこいつに嘘を吹き込んだ！？」

「嘘？なんことだ？」

「とぼけんじえねー！お前こいつに『封刻』は自分だけしか使えないって吹き込んだろー！？」

「あー、そのことか！だってその方が面白いだろ？」

「どこまで腐ってやがんだお前は……！」

「おいおい、せっかくの再開なんだから、こんなゴミの話はいいだろ？それよりもっと楽しい話をしようや！なあ、陵人！」

その時、意識を失いかけていた轟は、天童の言葉に反応し、残っていた力を振り絞り立ち上がった。

「お、お頭！今の……今の話は本当なのか……！？」

「なんだまーだ生きてやがったのか？もうお前の役目は終わったんだ。とつとと失せる。」

「ち、畜生　　！！！！」

轟は最後の力で天童に拳を放った。

「ゴミが……。『闇地獄』！」

「な、なんだ……。こりゃ……。！？あくあ……。！！がぁ……。！！」

轟の身体が徐々に黒く歪んでいく。

「轟！？」

「身体が……。俺の身体が消えて……。！！」

数秒後、轟の姿は跡形もなく消えていた。

「つたく、ゴミの分際で話の腰折りやがって。」

「テメーだけは必ず俺がこの手でぶち殺す……。！！」

「そうそう、そういう話だよ。もうじき全ての戦力が整う。もうじきだ！」

「ずいぶん長いこと待たせてくれんじゃねーか！そろそろ限界だぞコラ！」

「MINDSを抜けてここまで五年か！。まあ確かに時間はかかったな。だが安心しろ。もうそんなに待たせないからよ！そうだな。来年中には形になると思う。そうしたら、楽しいパーティーの始まりだ！」

「楽しみにしてるぜ……。俺だけじゃなく、MINDSの全てがな！」

「ああ。皆にもよろしくな！」

そして天童も消えていった。

（いよいよか……。）

こうして二つの戦いは終わり、陵人、修一郎はそれぞれの戦いを知らないまま、お互い迫り来る新たな戦いに心を揺さぶられていた。

第五章 天上理事会

暁との接触から一週間。十二月も半ばを過ぎ、街はクリスマスモード一色となっていた。

あちらこちらでイルミネーションが始まり、クリスマスケーキの予約だの今年のプレゼントは何にするだのと、浮き足立っている。天童たちとの接触以降、暁が表立って動いている気配はない。

陵人はその後、MAINDS本部へと足を運び、一件をMAINDS総帥 アルフレッド・シーカーに報告した。とりあえずいつでも動けるようにしておくよう言われただけで、時の番人の招集は先ず見送られた。

そして陵人は普段通り依頼をこなす日々に戻り、数日が経ったある日、仕事でテレビ局を訪れた際、たまたま廊下で茜と出くわした。

「陵人！何してんの！？こんなところで！？」

「仕事だよ。お前はこれから収録か？」

「うん！ねー、終わったら飲みいこうよ！」

「悪いな。今日は帰りが遅くなりそうなんだ。このあと仕事が詰まってる。」

「ええー。じゃあ次はいつ会えるの！？」

「さあな。お前も年末は特番とかで忙しいだろうが。」

「だからこそ元気もらいたいんだよー！」

「わかったわかった。時間作るようにするよ。」

「ホントに！？約束だからねー！」

「ああ。頑張れよ！」

「はいー！じゃあまたね！」

テレビ局の中でこんな会話してよかったのだからかとちょっと心配になった陵人だが、業界の間では陵人は有名人だし、知り合いも茜や駿だけではないから大丈夫だろうと、構わず仕事に向かうことにした。

そしてその夜。

茜に会ったあと、陵人は計3件の依頼を片付けて帰宅した。時計は午前二時を回っている。

風呂に入り疲れを逃がしたあと、お楽しみ晩酌をスタートさせた。今日は金目鯛の刺身が主役である。わさび醤油と、塩の二つの味付けを用意し、高知の名酒、南を徳利に並々を注いでいく。

テーブルに並べられ、まずは脂ののった金目を塩だけでいただく。口いっぱい甘みが広がり、それを辛口の酒で一気に流し込む。至福の時だ。

「さて、駿のドラマでも見るとするかな・・・。」

録画してあった駿が主演しているドラマを見ようとリモコンに手を伸ばしたとき、背後に気配を感じた。陵人は警戒する様子もなく、大きなため息を吐くと、

「ミカエルか。何のようだ？」

「大天使に向かって何のようだはないだろう。それにそのため息も引つかかるな。」

「いきなり人んち上がりこんで何言ってやがる。せつかく優雅な晩酌を楽しんでたのに。」

「付き合っただけよ！一人じゃ寂しいだろう？」

「結構だ。とつとと帰れ。」

「まあまあそういわずに！」

陵人と普通に話している図々しいこの男。その正体は天上理事会常任理事の一人、大天使ミカエルである。

天上界にも軍隊が存在し、東天騎士団、西天騎士団、南天騎士団、北天騎士団の四つに分けられている。それぞれに騎士団長が存在し、その全てを統括する最高司令官が、このミカエルなのである。

当然天界での地位も高く、その実力は神とほぼ同等と言われている。陵人とは同じ常任理事であるため、こうしてたまに下界に降りてきては上がりこんでいる。

本来、天上界の者が下界に下りてくるにはそれなりの手続きが必要

であり、そう簡単には来ることが出来ないのだが、ミカエルだけは、
陵人との連絡役として容認されていた。

ミカエルは慣れた様子で自分の箸とぐい呑みを用意すると、陵人の
横に座って飲みはじめた。

「ったく。で、何のようだ？」

「ん？何のようだったかな。この金目メチャクチャ美味しいね陵人
！」

「お前なー・・・」

「あー、思い出した！天上理事会定例会議が開かれるからそのお知
らせだった！」

「普通忘れるか、そういう大事なこと・・・」

「金目の美味さにどうでもよくなっちゃったんだよ！」

「あのなー・・・。しかし、もうそんな時期か。」

「一年ってホントあつという間だよなー。」

天上理事会定例会議。

毎年この時期に三日間かけて行われる会議で、神界、霊界、冥界、
魔界、幻獣会、そして人間界の情勢や動向について話し合われる。

問題が生じている場合、軍隊を派遣したり、然るべき処置を決定し
ている。

というのは建て前で、実際は大規模な飲み会である。

そもそも不老不死に近い天界の者たちに、年に一回のペースで何か
問題が起こるわけもない。

事実、陵人が加入する前の定例会は百年に一回あるかないかのペー
スで行われており、緊急時は臨時会議が開かれ、そこで対処してい
たのだ。

ではなぜ今は年に一回のペースで行われるようになったのか。

それは陵人の影響である。

天界の者は基本的に下界、というよりも人間界に対して口出しをし
てはならないことになっている。六つの世界で一番問題が起こると
したら人間界だ。それに口出しできないということは、ほぼやるこ

とが無いということである。つまりは暇人の集まりだ。これが理由の一つ。

そして、最大の理由は、皆陵人が好きだということ。

以前は暇を持って余している神々どもが、ちよこちよこ下界に降りてきていたのだが、陵人がそれを、

「ようもないのに降りてくるんじゃないか！」

と痛烈に批判したのだ。

いまだかつて神々にここまで言い放った人間は一人もいなかった。

当然といえば当然だ。何せ相手は神なのだから。

しかし陵人は、

「神々だって元は同じ人間じゃねーか！同じ立場になった以上言いたいことは言わせてもらおうぞ！文句があるなら相手してやる！」
と、初日の挨拶の時に言い放った。

神々たちはあつけにとられた。今までかなり好き放題やつても誰に何を言われることもなかった連中が、初めて怒られた。それも人間に。当然反発するものが出てきたが、陵人はマジでそいつらをコテンパンにしてやった。

以前も説明したが、天界と下界では、氣の流れが根本的に違うため、どれだけ下界で力を持っていても、天界の住人には一切通用しない。しかし、陵人の能力はそれを可能にできる。

まさか手を出されるとは思っていなかった神々は驚愕した。しかもとてつもなく強い。

理事会は陵人の意見を全面的に受け入れ、今後一切許可なく下界に降りることを禁じた。

その一方で、神々は陵人という男に非常に興味を持った。そしてその日の夜の宴会で、陵人の男気に触れ、陵人の料理を味わい、皆陵人の虜になってしまった。

それ以来、陵人と酒が飲みたいがために、神々は年に一度、定例会議という名目で宴会を開くようになったのだ。

今まで好き放題やっていた連中も、陵人に会えるならと、年に一回

の飲み会のために下界に降りるのを我慢しているほどである。

「で、いつなんだ？」

「来週だよ！皆さん楽しみにしてるからね！」

「わーってるよ。」

「あ、そうそう！理事長からの伝言があったんだ！」

「バハムートから？」

「うん！塩辛を忘れてくれって！あの人大好物だからねー！」

「そうだったな。頼んどいてやるよ。」

「喜ぶよ。しかしこの金目ホントに美味しいねー！酒との相性も最

高！」

「おいコラ！お前飲み過ぎなんだよ！用が済んだらとっとと帰れ！」

「まあまあ！前哨戦ってことでー！」

「なんでこう天界の連中つてのは・・・。」

こうして二人は朝まで飲み明かした。一週間後の前哨戦として・・・

次の日、陵人は仕事帰りにNYXへ立ち寄った。

「あら、陵人。いらっしやい！」

「美影さん、理事会用に例の塩辛用意してもらっていいかな？来週

なんだけど。」

「あー、もうそんな時期？わかったわ！」

「頼むよ！」

「了解！飲んでく？」

「じゃあ一杯だけ。」

「ちよつと待っててね！」

「ああ。」

「そういえばあれからどう？何か動きはあった？」

「いや、しばらくは動いてこないと思うよ。忍もそんなこと言って

たからね。」

「信用できるもんですか！」

「まあね。でも大丈夫だと思うよ。暇つぶしまでして時間稼いでくるくらいだから、まだ戦力が揃ってないのは確かだと思うし。」

「揃う前になんとかならないのかしら？」

「それができればとつくにやってるよ。」

「それもそうね。」

「まあその間にこっちもいろいろと準備させてもらおうよ。」

そして一週間後・・・。

陵人は碓氷から特性塩辛を大量に受け取り、全国各地から取り寄せた酒や食材を、『インフィニティー ポーチ』と呼ばれる天界の道具に詰め込んでいった。

この道具は言葉の通り無限に物を入れることが出来る袋である。

陵人は天界に昇る時には、こうして大量のお土産を持っていったやるのだ。

「さて、こんなもんかな。」

一通りお土産を詰め込んだ陵人は、天界への道を開き始めた。

「『天空航路』神界。」

陵人は一年ぶりに天界へと足を踏み入れた。

『天空航路』を抜けると、見渡す限りの大平原が広がっていた。

ここは神界。天上理事会は決まってこの神界で行われており、この神界に各界からの代表が集まる。

大平原を歩いていくと、目の前に巨大な城が見えてくる。

バロツク建築を想わせる優美で壮大な建物だ。

陵人は城に向かってゆつくりと歩いていく。

出口を場内につなげることもできるのだが、陵人はこの大平原を歩いきながら、天界の風を受けるのが好きだった。

天界といっても、人間界の遙か上空にあるというわけではない。

人間界とは別の次元に存在するのだ。

そのため、風一つとつてみても、人間界とはまるで違う。

天界の風は良質な気が豊富に含まれており、能力者は浴びるだけで力が回復したり、人によっては潜在的な力が上がることもある。

城の前までくると、ミカエルが入り口の前で待っていた。

「やあ陵人！よく来たね！」

「おう。皆はもう集まってるのか？」

「あらかたね！皆さん君に早く会いたいんだよ！」

「気持ちのわりーこというんじゃねーよ。行くぞ。」

「はいはい！」

ミカエルと共に城の中へと入り、二人はまず厨房へと向かった。

「おー、陵さん！来たね！」

「久しぶりだなグリエル！ほれ！土産だ。」

「ありがとよ！手伝ってくれんだろ！？」

「会議が終わつたらな！先に下ごしらえだけしといてくれ！」

「あいよ！久々にあんたの料理がみれんだなー！楽しみだー！」

「じゃああとでな！」

神界の食事関係の一切を取り仕切るグリエルに人間界から持ってきたお土産を預け、陵人はいよいよ本会議室に向かった。

「おー、陵人！やつときたか！」

本会議室にはすでに半数以上の理事たちが集まっていた。

天上理事会常任理事は、陵人を入れて計17名で構成されている。数字に特に意味はない。今はたまたまこの人数なだけだ。

幻獣会から1名、霊界から3名、神界から12名、そして人間界から陵人1名の比率だ。

「久しぶりだな。ゼウス！」

「ああ！会いたかったぞ！」

四大神の一人、ゼウス。ギリシャ神話における最高神であるが、実際は天界創造メンバーの一人である。

「陵人！土産は忘れてないだろーな！？」

「もうグリエルに渡してきた！お前の第一声は毎回それだな。オーデイン。」

「こちとらそれが楽しみで来てんだからよ！」

同じく四大神の一人、オーデイン。北欧神話における最高神だ。

ゼウスと同じく創造メンバーの一人である。

他のメンバーもぞくぞくと陵人の回りに集まってくる。

「やあ陵人ー！久しぶり！」

「陵人！元気そうだね！」

「お前の料理楽しみにしてるぞー！」

「ああ！皆も変わらないようだな！」

霊界代表の閻魔、ヘル、ヌトだ。

神々と1年ぶりの挨拶を交わしていると、本会議室に3人の神が入ってきた。

「や、やあ陵人。。。久しぶり。。。」

「ああ。お前らも元気そうだな！」

「あ、ああ。おかげさまでな。。。」

そういつてそそくさと自分たちの席に着くこの三人。

フラカン、シン、ウツコの三人組みは、かつて陵人にコテンパンにやられたメンバーだ。

それ以来陵人には頭が上がらない。

「相変わらずだずだな。あの3人も。」

陵人は苦笑いを浮かべる。

「そりゃそうだろ。あれだけばろくそにやられたら。」

ゼウスが笑いながら答えた。

そこに新たに三人の神が現れた。

「キヤー、陵人！会いたかったー！」

そういつて陵人に抱きついてきたこの女神は、四大神の一人アテナである。

「だー、いちいち抱きつくな！アテナ！」

「いいじゃない！たまにしか会えないんだからー！もっと遊びにくればいいのにー！」

「仕事で来てんだよ！つたく。。。」

「まあまあいいじゃないか陵人。」

そういつて入ってきたのは、四大神の一人ポセイドンと、元始天尊

だ。

「二人とも久しぶり！相変わらずじじくせーなー！」

「ほつとけ！おぬしの悪態も変わらんのー陵人。」

「変わってたら嫌だろ？元さん！」

「ぬかしよるわ！」

皆で笑っているところに最後のメンバーである、シヴァ、アマテラス、テラの三人が入ってきた。

「楽しそうですねー！皆さん！」

「おー、お前ら！久しぶりだなー！」

「陵人も元気そうですね！会えて嬉しいですよ！」

この丁寧な話し方をするのはテラだ。博学で、全世界の情勢に精通している。

これで、残すは理事長のバハムートを待つだけだ。

「皆さん、それでは一先ず席に着いてお待ちください。まもなく理事長もお越しになります。」

ミカエルの一言で、皆が席に着いた。ミカエルはこの会議の司会進行を努める。

しばらく雑談していると、遂に天上理事会理事長バハムートが現れた。

雑談がピタツと止み、皆の顔に緊張が走る。

「遅くなってすまない。皆元気そうだな。」

幻獣界の王。竜王バハムート。世界最古の神であり、人間が生まれる遙か以前より生と死を司り、世界の輪廻を守ってきた。

全ての神々の父とも言える存在だ。

「皆さんお集まりいただけただけですので、これより第138回、天上理事会定例会議を始めさせていただきます。」

議案は天界が管理している魔界、冥界、人間界の情勢である。

現在魔界、冥界に目立った動きがないことから、焦点は人間界にしばられた。

内容はもちろん暁の動きだ。

天界は先日の一仕事をすでに掴んでおり、今後の動きを敏感に察知していくよう陵人に言い渡した。

「敵の指導者は確か『古代種』だったな。勝算はついているのか陵人？」

バハムートが重い口を開く。

『古代種』

神々や陵人の『理』のように、世界を直接構成及び変動させることができる能力を持った者のことである。暁の天童 忍もまた、古代の強力な能力の持ち主ということだ。

「ええ。奴の相手が出るのは私しかいません。なんとしても抑えてみせます。」

「そうか。ならば頼んだぞ。問題は魔界や冥界と手を結ばれてしまった時だな。」

「そこなんです。魔界や冥界と手を結ばれてしまえば、人間界だけでは明らかに戦力不足です。」

「そうだな。ミカエル。こちらも準備をしておかなければならないかもしれないな。」

「はい。すでに全軍にBクラスの警戒態勢を取るように指示しています。」

「そうか。ならば引き続き魔界、冥界の動きにも注意していこう。元始。頼んだぞ。」

「承知いたしました。」

元始天尊は天界の最奥で能力の一つ『千里眼』を使い常に魔界、冥界の動きをチェックしている。

「皆も良いな？」

一同が一斉にうなづく。

「それでは、本日の会議はこれにて終了とさせていただきます。お疲れ様でした。」

会議時間はものの1時間程度。定例会議はだいたいこんなものだ。全員すでに夜の宴会に頭が切り替わっている。

理事長ですら・・・。

「陵人。」

厨房に向かおうとした陵人がバハムートに呼び止められる。

「なんですか？」

「その、例の・・・、塩辛は・・・？」

「もちろん用意してますよ！安心してください！」

「そうか。楽しみだ。」

子供ように嬉しそうな笑顔を浮かべるバハムートに、陵人も柔らかい表情を浮かべる。

「じやな準備をします。他に何か食べたいものありますか？」

「そうだな・・・。じゃあ、甘い玉子焼きを・・・。」

「わかりました！用意します！」

これまた可愛い笑顔で顔を浮かべるバハムート。この時の顔は威厳など全く感じられない。

「陵人！私はいつもの天ぷらが食べたいな！」

便乗してきたのはアマテラスだ。

「あー、納豆の天ぷらだな！」

「そうそう！あれが食べたくて食べたくて！」

「わかったよ。他に食べたいものがある奴はいつてくれ！」

その一言でわらわらと陵人の回りに神々が群がってきた。

「私はぶり大根が食べたい！」

「俺はもつ煮がいい！」

「わしはやっぱり刺身がいいのう！」

全員いいたい放題言ってくるが、そのどれもが日本食というのがまた面白い。

群集に混ざれず、自分たちの席でちらちらとこちらを見ているフランク、シン、ウツコに陵人が声を掛ける。

「おい、お前らも何か食べたいものあるか？」

突然声をかけられてビックリした三人だったが、ぼそぼそと申し訳なさそうに、

「じゃ、じゃあ里芋の煮つ転がしを・・・」

「わ、私は金目の煮付け・・・」

「金平ごぼう・・・」

「里芋の煮つ転がしに金目の煮付けに金平ごぼうだな！作ってやるよ！」

三人に幸せそうな笑顔が浮かぶ。

その三人を見て、他の神々たちにも笑顔がこぼれた。

「よし！じゃあ行ってくるわ！」

「頼んだぞー！」

「あー、早く食べたいなー！」

陵人は神々に見送られ、いざ厨房へ。

厨房では会議の間にグリエルが食材の下準備をしてくれていた。

「おー、会議は終わったかい陵さん！んじゃ頼むよ！あらかた仕込みは済ませておいたから！」

「サンキューグリエル！んじゃいつちよやるかー！」

陵人はグリエルと協力して次々と料理を作っていた。

約20名分の料理ともなるとかなりの量になる。

二人は息の合ったコンビネーションで、2時間で仕上げた。

「よし！とりあえずこんなもんだろ！おい、運んでくれ！」

控えていた天使たちに料理を運ばせ、陵人も宴会場へと向かった。

「準備ができたぞー！」

威勢よく入ってきた陵人に神々たちは拍手喝采で迎えた。

「待つてましたー！」

次々と運ばれていく料理に、神々たちは目をキラキラさせて生唾を飲んでいる。

一通りの料理と酒が用意され、陵人も席につく。

「足りないものがあつたら言ってくれ！んじゃ、派手に行くぞー！」

「おー！カンパーイ！！！」

陵人の音頭で宴が開始された。

皆一斉に料理に手を伸ばす。

「これこれ！かー！たまんねーなー！」

「う、美味すぎる・・・！」

「この日のために生きてるようなもんだからなー！幸せだー！」
皆待ちに待った陵人の手料理に歓声を上げている。

バハムートも目の前に並べられた好物に目をキラキラさせていた。
確水特性の塩辛を一切れ口に入れ、味を噛み締めたあと、一気に日本酒を放り込む。

そして一言、

「美味い・・・。」

まさに至福の顔だ。陵人はその顔を見て、自然と笑顔がこぼれた。

「ところで陵人。彼女とは上手くいつてるの？」

唐突にミカエルが仕掛けてきた。

陵人はあまりに突然の攻撃に思わずむせてしまった。

「な、いきなり何言い出すんだテメーは・・・！？」

「確か、茜ちゃんだっけ？可愛いらしいじゃない！」

「なにー！？陵人女が出来たのか！？」

「ちよっとー、聞いてないわよー！」

神々が一斉に食いついてきた。

「そんなんじゃないっつての！」

「隠すところがなお怪しいねー！」

「テメーミカエル！いい加減にしろよ！」

「いいじゃないか陵人。お前もそろそろ身を固めたら。」

「適当なこと言っつてんじゃないよドン！」

ドンとはポセイドンのことだ。陵人は神にさえあだ名を付ける。

「なんなら今度連れてこいよ陵人！」

「シヴァ・・・！テメー！」

「いいですよね！？理事長？」

「陵人の身内なら構わんぞ。幻獣界にも招待しよう。」

「な・・・！バハムートまでそんなことを・・・！」

神々が一斉に大笑いする。陵人を攻められる機会などめつたにない

ことだけに、皆の食いつきも半端なかった。しばらくその話題で引つ張られ、その後は次々と話題が変わっていった。

皆と盛り上がりながら楽しく酒を飲んでいると、ふとバハムートが視界に入った。

何故かバハムートは回りをチラチラ見ているだけで、あまり酒が進んでいない。

よくみると、バハムートの小鉢に入っていた塩辛がなくなっている。バハムートは会議や厳粛な場では威厳があり、たいへん大きな存在なのだが、舞台から降りたとたん、口数の少ないシャイボーイに変身する。

自分の塩辛がなくなっても、給仕の天使に声をかけることすら出来ないのだ。

見かねた陵人は、神々を残し、バハムートのもとにやってくると、壺から塩辛を取り出し、小鉢に入れてやった。

「ありがとう。」

嬉しそうに礼を言うバハムート。

「いえ。他に何か召し上がりますか？」

「いや、大丈夫だ。私のことは気にしないでくれ。」

「遠慮しないでください。何か暖かいものでもいかがですか？」

「そ、そうか？じゃ、じゃあ、向こうにおいてあった奴がいいな。」

「あー、もつ煮ですね？分かりました。すぐに暖かくしてもってきます！」

「すまんな。」

いったん席を外し、厨房に向かった陵人は、もつ煮を暖め直し、味を整えてからバハムートに持ってきた。

「どうぞ、召し上がってください！お好みでこの七味をかけると美味しいですよ！」

「そうか。これをかけるんだな？これくらいでいいか？」

「ええ！味を見てください！」

バハムートがもつを一切れ口に運ぶ。

味を噛み締めてから、酒を口に運んだ。なんとも言えない奥深い味わいにバハムートはただ一言、

「美味しい。」

陵人にはそれで十分だった。

バハムートの隣の席に座り、陵人も飲みはじめた。

「お前は不思議な男だな、陵人。」

「そうですか？俺からしたらここにいる皆のほうがよくばど不思議な連中に見えますけど。」

「お前が来る前はこうして酒を飲みながらくだらない話で盛り上がるなどなかった。皆長すぎる人生に飽き飽きしていたのだよ。

人間のように夢や希望を持つことも、大した楽しみもなく、ただ時が流れていくだけ。何の意味もなく毎日が無駄に過ぎていった。」

「まあ神なんてそんなものでしょう。」

「お前が来てからはがらっと変わった。皆に生きがいが生まれた。お前と会うため、お前と酒を飲むため、お前と戦い、腕を磨きたいと思うものもいる。」

お前は皆に生きる目的と夢を与えてくれた。皆お前には心から感謝しているよ。私も含めてな。」

「やめてくださいよ。俺はただ、こうして皆で楽しく酒が飲みたいだけです。人間だろうが神だろうが天使だろうが、そんなもん何の意味もない。一緒にいて楽しいかどうか。それだけです。」

「そんなお前に皆引かれているのであろうな。」

「どうですかね。」

その後も宴会は大いに盛り上がり、初日の定例飲み会は幕を閉じた。

翌日、初日同様会議は一時間で終了し、陵人は闘技場にきていた。

二日目の今日は、天界軍の各騎士団長との戦闘訓練が行われる。

格騎士団長はこの日のために、日々腕を磨いているといってもいい。陵人に勝つために。

「本日はよろしくお願いします。陵人様！」

挨拶をしてきたのは北天騎士団長 イオス・ディスクェンスだ。

「久しぶりだなイオス。子供は元気か？」

「はい。おかげさまで！今度会ってやってください！」

「ああ！他の連中はどうした？」

「まもなく来るかと。皆ギリギリまで鍛錬しているはずですから。」

「気合い入ってんなー！」

「当然です。皆この日のために厳しい鍛錬をしているのですから。イオスと話をしていると、そこに残りの三名が到着した。」

東天騎士団長 ジャック・ストーム、西天騎士団長 ウィリアム・レッド、

南天騎士団長 アイザック・ガンツ。

「皆元気そうだな！」

「この日が来るのをどれだか待ちわびたことか！覚悟してもらえ！
陵さん！」

ジャックの威勢が轟く。

「全力でぶつからせてもらいますよー！」

「ああ！」

ウィリアムも闘志をむき出しにしている。

「必ずあなたを倒してみせます！」

「上等だ！」

アイザックも負けてはいない。

「さて、全員揃ったところで始めましょうか！」

「ああ！」

5人は闘技場の中へと入っていった。

各々身体をほぐし、精神と集中させていく。

「さて、今日はどうする？いつもの感じで一人ずつか？」

「そうですね。それをお願いします。」

「わかった。誰から来る？」

「もちろん俺からだ！いいだろ？」

真つ先に名乗り出たのは東天騎士団長ジャックだ。

「構いませんよ。」

「よっしゃ！」

「いつでもいいぞ。どっからでもかかってこい！」

ジャックは大きく深呼吸し、精神を集中する。

初めて陵人にあつた五年前、完膚なきまでに叩きのめされて以来、ずっと陵人を目標に必死で鍛錬を続けてきた。

ジャックだけではない。他の三人も同じ気持ちで鍛錬を続けてきた。

（かなり腕を上げたようだな・・・こつちも本気で行くか・・・）

「『月影』」

陵人は戦う前から封刻を解き、戦いに挑む。

深く息を吐いたジャックの目つきが変わった。

「行くぜ・・・！」

遂に鍛錬の成果を見せる戦いが始まった。

ジャックは真つ向から陵人に突つ込んでいった。

陵人の顔面目がけて拳を繰り出していく。

陵人もそれに応え、避けることなく拳を繰り出した。

二人の拳が激突し、辺りに激しい衝撃波が生まれる。

二人は拳を激突させながら、笑っていた。

次の瞬間二人は瞬時に間合いとる。

「お、始まったなー！」

闘技場の見物席では、神々たちが試合を見守っていた。

「さて、今年はどうなるかな？」

二人は間合いを取っては攻撃をしかけ、激しい打ち合いのあと、再び間合いを取るといふパターンを繰り返していた。

お互い相手の出方を窺っているのだ。

陵人は拳を交えながら思った。

（スピード、パワー共に1年前とは比べ物にならない。よく鍛錬されている。）

数回このパターンを繰り返すと、先にジャックが動いた。

「そろそろ本気で行かせてもらうぜ！！『バーストフォーゼ』！」
ジャックが能力を開放した。ジャックの能力は自らの肉体に気を充満させ、パワー、スピードを何倍にも膨れ上げることが出来る。見る見るジャックの身体が膨れ上がり、筋肉が盛り上がっていく。あつという間に約二倍の大きさになった。

前回戦った轟と同系の能力だが、質は比べものにならない。

「行くぞ！！『バーストクラッシュ』！」

ジャックはその巨大な拳を一気に前を振り出す。

その衝撃により、大砲のような衝撃波が陵人目がけて発射された。

陵人は瞬時に上空に避ける。

しかしジャックは上空の陵人目がけて『バーストクラッシュ』を連打してくる。

無数の大砲が陵人に襲い掛かった。

さすがにすべてを避けることはできない陵人は真っ向から勝負を仕掛けた。

「『虚空乱撃』！」

ジャックの大砲とほぼ同等の威力の衝撃波の乱打を打ち返し、『バーストクラッシュ』は相殺される。しかし、そこにジャックの姿はなかった。

次に瞬間、陵人は背後に強烈な気配を感じる。

「もらったー！！！」

ジャックは渾身の一撃を陵人に叩き込んだ。

陵人はガードもろとも闘技場の端まで吹っ飛ばされてしまった。

「よっしゃー！初めてクリーンヒットしたぜ！」

バラバラと外壁が崩れ落ちる中、立ち上がった陵人には笑みがこぼれている。

「やってくれんじゃねーか……。お返しにいいもん見せてやるよ……！」

「何！？」

陵人の身体から強烈な気が溢れ出していく。そして鍵となる術と共

に、押さえ込んでいた気を一気に放出させた。

「第二形態つてやつだ・・・! 『煉獄』!」

陵人は第二の封結を開放した。

「な、なんだと・・・!?」

『煉獄』を発動させた陵人は、ついさつきまでとはまるで別人のようだった。

荒々しく闘志をむき出しにし、全身から強大な気がとめど無く溢れ出している。

「行くぞ・・・!」

そう言った瞬間、ジャックは遙か後方に吹っ飛ばされていた。

何が起きたか分からないまま、腹部に強烈な痛みを感じる。

「な・・・!?」

なんとか壁への激突は避け、体制を整えることができた。

しかし、さらに次に瞬間にはもう自分の身体は外壁にめり込まれていた。

腹部にはさらに強烈な痛みが走っている。

「ぐはっ・・・!」

激痛に膝をつくジャック。目の前には陵人が立っている。

「どうした? もう終わりか?」

余裕の笑みで見下す陵人。

ジャックも黙ってはいない。

「ん、んなわけねーだろー・・・!!」

目の前の陵人にありつただけの力を込めて拳を繰り出す。

が、その渾身の一撃を陵人は片手で受け止めた。

「な・・・!?!? バカな・・・」

「終わりだ。ジャック。」

陵人は巨大なジャックの身体を片手でいとも簡単に上空へと放り投げた。

ジャックはなすすべなく舞い上がる。

陵人は舞い上がったジャックに右手をかざし、詠唱なしで強力な衝

撃波を放った。

ジャックは観客席に吹っ飛ばされ、そのまま動かなくなった。

「さて、次はどいつだ・・・？」

陵人はすでに残りの三人に視線を向けられている。

「私が行きます。」

名乗り出たのは西天騎士団長 ウィリアム・レッドだ。

「ウィルか。来い。」

ウィリアムは愛刀のブラッディー・マミーを抜いた。その名の通り赤黒い刀身をした剣だ。

天使の剣というよりは悪魔が持つ魔剣のような形状をしている。

「相変わらず気味の悪い剣だな。『天剣』」

陵人も『天剣』を呼び出す。しかし、以前使用した『天剣』とは形状が違う。

『天剣』は封結を解くごとにその形状も変化するのだ。

『煉獄』を開放した時の『天剣』は通常時の二倍の大きさで、柄にはゴツゴツとした装飾が施されている。

「行きます！」

ウィリアムの強みはスピードと多彩な技の数々である。力はジャックよりも大分劣るが、スピードはジャックを遥かに凌ぐ。

初撃はウィリアム。高速で陵人に切りつける。

しかし、『煉獄』を開放した陵人にはその自慢のスピードは通用しない。

あっさり払われると、逆に切りつけられてしまい、なんと真つ二つにされてしまった。

が、真つ二つに分かれたウィリアムの身体が瞬時に赤黒い薔薇に変化し、陵人に襲い掛かってきた。

「『ブラッディーローズ』」

ウィリアム本体は陵人の背後に回っていた。

「舐めたマネを・・・！『風神演舞』！」

陵人の周囲を巨大な竜巻が覆い尽くし、『ブラッディーローズ』を

弾き飛ばす。

体勢を整え、ウィリアムに向かって一直線に切り込む。

が、ウィリアムは直前で再び薔薇と化す。

「ちよこまかと・・・！」

陵人はウィリアムの姿を追う。

そこに新たな攻撃が仕掛けられた。

「『クロスロード』」

十字の赤黒い斬撃が繰り出された。

「ござかしい！『十字の鉄槌』」

同様の術を繰り出し『クロスロード』を相殺する。

「さすがに通用しませんか。ならば・・・！」

ウィリアムはブラッディ・マミーを構えると、徐々に剣がその姿を崩し、さらにウィリアムの身体までもが漆黒の薔薇へと変化していった。

数万に及ぶウィリアムの薔薇が陵人を取り囲む。

「これは・・・。」

「『エターナルローズ』あなたのために編み出した技ですよ。」

薔薇の一つひとつからウィリアムの声がする。

「この漆黒の薔薇の一つひとつが全て私自身なのです。周囲の薔薇

を蹴散らしても何の意味もありませんよ。」

「なかなか派手なもん作ったじゃないか。」

「行きます・・・！」

数万の薔薇が一斉に陵人目掛けて襲い掛かる。

さすがの陵人も避けることが出来ず、身体が徐々に刻まれていく。

「ちっ・・・！『風神演舞』！」

薔薇は一度は竜巻で吹き飛ばされるが、すぐに陵人の周囲を取り囲んでしまう。

「しつこい野郎だ。いいだろう！死んでも文句言っんじゃねーぞ・・・！」

陵人は天剣を地面に突き刺し、両の掌を強く打ち合わせた。

「燃え尽きる！ 炎帝 火竜の豪放」！

陵人の身体から巨大な火竜が姿を現し、雄叫びと共に凄まじい炎を吐き散らす。

「な、なんだと・・・!?」

『エターナルローズ』は次々とその凄まじい炎で灰になっていく。

「ぐっ、ぐあー！！」

陵人は一枚の薔薇だけを残し、全てを焼き尽くした。

一枚残った薔薇の花びらは、ゆらゆらと揺れ落ちながら、ウィリアムへと戻っていく。

強烈な炎で焼かれたウィリアムは大きなダメージを受け、地面に叩きつけられ、そのまま動かなくなった。

「ふうー。さて、次はどっちだ？」

「俺が行かせてもらいます！」

南天騎士団長 アイザック・ガンツだ。

アイザックの武器は『パレインランス』という槍である。

長さにして3メートルはあるであろう巨大な槍を軽々と振り回す。

「行きます！ 『サンダークラッシュ』！」

アイザックは槍の先端に巨大な雷の塊を作り出し、陵人目掛けて投げ放った。

陵人はその雷を余裕で避けるが、次の瞬間塊が数千の個体に砕け散り、その一つが陵人に直撃してしまった。

「し、しまっ・・・！ くっ・・・があ・・・！」

普通の人間なら一瞬で黒こげになってしまっほどの電圧をもろにくらってしまった陵人は、その場に崩れ落ちる。

だが、この程度の電圧では陵人に致命的なダメージを与えることは出来ない。

「な、舐めたマネを・・・」

陵人は直ぐに起き上がるうとするが、なぜか身体が思い通りに動いてくれない。

「な、なんだと・・・!?」

「無駄ですよー！」

その間にアイザックが陵人目掛けて突っ込んでくる。

避けることも出来ず、また咄嗟のことで術も発動することが出来なかったため、陵人はアイザックの一撃をまともに喰らってしまい、勢いよく吹っ飛ばす。

「おおー！！！」

見物席の神々もどよめく。

吹っ飛ばされた陵人はすぐに立ち上がるが、やはり身体の様子がおかしい。

「これは、まさか・・・!?」

「気付きましたか？そうです。あなたの身体の回路をメチャクチャにしたんですよ！」

「やはりそうか・・・。」

陵人が先ほど受けた『サンダークラッシュ』は人体の運動機能に直接ダメージを与え、本来繋がっている回路をメチャクチャに書き換えてしまうことができる。

つまり、陵人が右手を動かそうとすれば左足が動き、左手を動かそうとすれば目が閉じてしまうというように、自らの意思とはまるで違う箇所が動いてしまうのだ。

「なるほどな・・・。なかなか面白い感覚だ。」

「効果は一時的ですけどね。この戦いの間は元には戻らない！さあ、どうします!？」

アイザックは既に勝利を確信したような笑みを浮かべている。

さすがの陵人も満足に身体を動かすことができなければ、大したことは出来ないという計算だろう。

しかし、アイザックの予想とはうらはらに、陵人は興味深そうに自分の身体を動かしている。

「それでは、止めと行きましょう・・・！急所は外して差し上げますよ・・・！」

アイザックは全身の気を高め、槍全体に電流を流し込んでいく。

「これで終わりです！『サンダーラスト』！」
突きの構えで陵人に突っ込んでいく。そして躊躇なく陵人の身体を串刺しにした。

「や、やった・・・！遂にやったぞ・・・！」
「何をやったんだ？」

槍の先端は壁に突き刺さっており、そこに陵人の姿はない。

「そ、そんな馬鹿な・・・！？」

次の瞬間陵人はアイザックの目前に現れた。

「甘いんだよ！馬鹿が・・・！」

アイザックの顔面目がけて強烈な蹴りが叩き込まれる。

無防備のまま陵人の蹴りを喰らったアイザックは一気に反対方向の壁まで吹っ飛ばされた。

「な・・・ど・・・どう・・・して・・・！？」

「確かに面白い技だ。現に今も感覚は戻っていない。だが、この程度俺には大した意味を持たない。俺は完全に自分の身体を支配しているからな。ちょっとくらい回路が変わったところですぐに修正できるんだよ。」

「そ・・・そんな・・・。」

アイザックの意識はここで途切れた。

残すは北天騎士団長 イオス・デイスケンスのみ。

「やっぱりお前がトリなんだな！。イオス！」

「ええ。さすがですね陵人様。彼らはこの1年で相当なレベルアップを果たしたというのに。」

「確かにな。だが、この程度ではまだまだ俺に遠く及ばんぞ。」

「そのようですね。それでは、私も胸をお借りします！」

「ああ。来い！」

イオスは愛刀の『オルファ』を抜いた。陵人も再び『天剣』を構える。

「行きます・・・！」

イオスもまた、真正面から突っ込んでいく。

しかし、今までの三人とは、スピードも身のこなしも段違いだ。陵人と互角に剣を交えている。

二人の華麗な舞が繰り広げられる。

「相変わらずいい太刀筋だなーあいつは。」

「ええ。剣の腕なら私とも大差ありませんからね。」

見物席のオーディンとミカエルが二人の戦いを興味深く観戦している。

「また腕を上げたなーイオス！」

「陵人様も相変わらずですね！」

二人は剣を交えながら互いの実力を確かめ合い、賞賛した。

数分にわたり攻防が繰り広げられた後、二人は一度間合いをとった。

「やはり剣技だけではラチがあきませんね。」

「そうだな。どうする？」

「もちろん仕掛けさせてもらいますよ。私もこの一年間あなたを倒すことを目標に鍛錬を積んできたのですから。」

「ほう。それは楽しみだ。」

「『スターダスト』」

イオスの右手から無数の小さなガラス片のようなものが勢いよく飛び出し、陵人の回りを取り囲んでいく。

この欠片は体内に吸い込むと、内側から身体を刻んでいき、最後には内臓全てを切り刻む。

一粒でも欠片を吸い込んだら終わりだ。

が、陵人は冷静だった。この技は昨年も見ているからである。当然対処方もわかっている。

陵人は『風穴^{かさあな}』というブラックホールのようにあらゆるものを吸い込んでしまう穴を生み出した。そこに『スターダスト』が次々に吸い込まれていく。

「この技が通用しないことはわかっているはずだろう？」

「ええ。とりあえずおさらいをと思ひまして。本番はこれからです。」

「本番だと？」

「ええ。」

イオスは剣を鞘に戻し、両手を広げて精神を集中させた。

「『スペースワールド』！」

陵人の周囲に真つ黒なドーム状の世界が広がっていく。

「な、なんだ・・・？」

あつという間に陵人は闇の世界に引き込まれてしまった。

「聞こえますか？」

「ああ。なんなんだこりゃ？」

「私の力で作りだした宇宙空間ですよ。その中からは一切外部に攻撃をしかけることは出来ません。当然外に出ることも不可能です。ために何か攻撃を試みてください。」

イオスに言われ、陵人は天上目がけて『赤爆』を打ってみた。

が、ドームには全く変化はない。

「どうですか？」

「確かにビクともしねーな。で、こんなとくに閉じ込めて何しようってんだ？」

「もちろんあなたを倒すに決まってるじゃないですか。このドームは、外からなら攻撃を加えることが出来るんですよ。こんな風にね！『スターダスト』」

ドーム内にどこからともなく『スターダスト』が入り込んでくる。

一瞬でドームの天上に欠片が散りばめられ、まるで満点の星空のように美しい情景を生み出した。

しかし、その美しさとはうらはらに、この密閉された空間では死の欠片と化す。

「ずいぶんえげつねーことしてくれんんじゃないか・・・『風穴』！」

『風穴』により『スターダスト』は再びかき消される。

「あくまで例ですよ。私が言ってる攻撃はこつちですから。」

イオスの話が終わったと同時に鋭い斬撃が陵人の左肩を切りつけた。

「どうですか？全く気付かなかったでしょ？」

確かに陵人は切りつけられるまで攻撃されたことに全く気付くことが出来なかった。

「なるほど。これでじわじわなぶっていかうってか・・・？」

「ええ。あなたの体力が奪われるまでですが。その後は、このドームごとあなたを押しつぶします。」

「まあ、そうなるわな。さて、どうしたもんか・・・。」

「悪いですが考える暇は与えませんよ。」

イオスは次々に斬撃を繰り出していく。

陵人はなすすべなく攻撃を受け続ける。

しかし、限界が訪れるのは早かった。

体力の限界ではない。我慢の限界である。

「ちょ、調子に・・・、乗るんじゃ・・・ねー！！！」

遂に陵人が切れた。

「つけあがりやがって！！上等だコラっ！！！」

陵人の気がドンドン上がっていく。

絶対的に有利な立場にいたイオスが危機を感じるほどに。

「何もさせませんよ！このまま終わりにします！『クローズ』！」

イオスが『スペースワールド』を閉じ始めた。じわじわとドームが小さくなっていく。

「無駄だ！後悔させてやるよ！『大いなる航海』！！！」

陵人は地面に両手をつけると、その下から巨大な帆船が姿を現し始めた。

帆船が押し迫るドームと激しく衝突する。突き破ろうとする力と押さえ込む力。

「く、なんて力だ・・・！」

イオスは全力でドームを閉じていかうとするが、突き破る力が強く、思うようにいかない。

陵人の力はなおも上がり続け、ついにはドームに亀裂が生じ始めた。

「だ、ダメだ・・・！抑えきれない・・・！」

「無駄だつて言つてんだろーがー!!」

その雄叫びと共に陵人の船はドームを突き破り、『スペースワールド』は完全に崩壊した。

その衝撃でイオスは外壁まで吹っ飛ばされてしまった。

陵人は船の甲板に立ち、まるで海賊船の船長のようだ。

「ずいぶんやつてくれたじゃねーか！覚悟はできてんだろーな！」

「く、くそっ・・・！ここで終わるわけにはいかない・・・！」

「まだあがくか。いいだろう！これで終わりにしてやる！」大いなる航海 発動」

船の先端に備え付けられた巨大な大砲がイオスに照準を合わせる。

イオスもまた最後の力を振り絞り、剣を構えた。

「これで終わりにしましょう。『ライトニング』！」

剣の先端にエネルギーの塊を作り出した。

「行くぞ！『砲撃』！」

大砲から凄まじいエネルギー弾が放たれた。

「おおー!!」

同時にイオスも『ライトニング』を放つ。

二つの強力なエネルギー弾が衝突する。

均衡しているかに見えたが、やはり陵人の力が勝っていた。イオス

の『ライトニング』はどんどん押されていく。

残された力を全て注ぎ込み、懸命に耐えるイオスだが、限界は確実に近づいていた。

「く、く・・・そ・・・！」

「終わりだ。」

陵人は吐き捨てるように言い放ち、一気にパワーを上げた。

砲撃は『ライトニング』ごとイオスを飲み込み、決着がついた。

陵人は『大いなる航海』を解き、上空からゆっくりと降りてきた。

イオスはもはや立ち上がる気力もなく、なんとか一命を取り留めたというくらいダメージを負っていた。

「ちよつとやりすぎたか・・・。ミカエル、手を貸してくれ！」

「はいはい。」

「結局例年通りの結果か。おい、誰か救護班を呼んで来い！」
オーディンが控えていた天使に命ずる。

「また派手にやりましたねー。」

「つい熱くなっちまってな。」

「中々楽しそうでしたよ！」

「ああ！来年が楽しみだ！」

こうして今年の訓練は、陵人の圧勝で終了した。

瀕死の重傷を負った4人はすぐさま救護班によって治療され、夜にはなんとか動けるようになるだろうということだったので、宴会に出席することを許可された。

今日のネタはやはりコテンパンにのされた4人だった。

「しかし陵人も容赦ねーなー！イオスなんて生きてるのが不思議なくらいだったしよー！」

「本気でやらねーと意味がないだろーが！まあ多少ムキになったとこはあったけどよ・・・。」

「大人げないのー。」

「何千年も生きてるじじいに言われたかねーよ！」

わいわい盛り上がり上がっていると、治療を終えた騎士団長たちが宴会場に姿を現した。

「おー、お前ら！もう動いていいのか？」

「ええ！おかげさまで。」

「そうか！」

陵人が安堵の表情を浮かべる。やはりちよつとやりすぎた感があったのだろう。

「まだ体中ギシギシですけどね。」

アイザックが爽快な笑顔を見せる。

「そりゃそーだろ！あんだけ派手にやられたら！フラカンたちん時は丸一日動けなかったもんねー！」

フラカン、シン、ウツコの三人は顔を青くして大きくうなずいた。

お前たちの痛みはよく分かります・・・。

「あん時はマジで殺す気だったからなー！」『黒牙』^{こくが}まで解放してたしよー！」

『黒牙』とは、三つ目の封刻のことである。

「しかし、今回は自信があっただんですけどね。」
「イオスが感慨深げに漏らす。」

「甘いんだよ。お前から今日それぞれ新技を出してきたけど、どれも完璧に使いこなせてなかったじゃねーか。」

「確かに。一応完成はさせていたんですが。」

「あれじゃ完成とは言えねーよ。」

「厳しいですねー。」

「たりめーだ。」

「しかし、来年こそは必ず！」

「ああ。楽しみにしてるぞ！よし！飲むか！」

「はい！」

騎士団長たちが加わり、宴会は昨日よりもさらに盛り上がった。

いよいよ明日は最終日。ちなみに明日は会議も訓練も予定されていない。

明日の予定。それは・・・。

皆でピクニックだった。

翌日、朝から陵人はグリエルと共に厨房にいた。今日のピクニックの弁当を作っているのだ。

しかし、何故に定例会議でピクニックなのか。

それは4年前。以外にも理事長であるバハムートの一言から始まった。

「たまには皆で外に出て、昼間から飲んでみたいものだな。」

この一言をきっかけに、毎年最終日には皆で出かけ、昼間からどんちゃん騒ぎをするのがお決まりになったのだ。

陵人は皆のために毎年こうして弁当を作ってる。

人間界から米をどつさり持ってきておにぎりを作り、から揚げやバ
ハムートも大好物の玉子焼き、その他にも煮付けやらちらし寿司な
ど、色も鮮やか超豪華な特性弁当だ。

「陵人ー、お弁当できたー??」

待っていていられずアテナが様子を窺いにきた。

「もうすぐだ。皆は集まってるか?」

「もうとつくに全員集合してるよー!理事長なんて朝ごはん抜いて
待ってるんだから!」

「そ、そうか……。すぐに行くから!」

「はい!」

陵人は大急ぎで弁当を仕上げ、神々のもとへ急いだ。

「待たせたな!んじゃ行くか!」

「おおー!!」

陵人と神々は一斉に歩き出し、30分ほどで到着する丘の上で宴会
の準備を始めた。

椅子やテーブルは使わず、莫座やシートを敷くだけの簡単な準備を、
皆楽しそうに行っている。

そして、朝早くから陵人が丹精込めて作った弁当がオープンされる
と、一斉に歓声が上がった。

バハムートは目をキラキラさせて、

「玉子焼きもある。」

と嬉しそうに呟いた。

「よし!じゃあ皆準備はいいか?」

それぞれ酒を用意し、陵人の合図を待っている。完全に遠足にきた
先生と生徒のようだ。

「最終日、カンパニー!」

盛大に宴会がスタートした。

皆それぞれ陵人の作った弁当を美味そうにほっばる。

わいわいと賑やかに宴会は進む中、シンがバハムートの前に置かれ
た玉子焼きに手を伸ばそうとした。

バハムートは大好きな玉子焼きが目の前でさらわれようとしているのを、驚愕の顔でただただ見ているしかなかった。

その時、陵人からするどい一喝が入った。

「シン！それはバハムートの玉子焼きだ。手出すんじゃない……！！」

「は、はい！すみません！！」

シンは条件反射で思わず背筋を伸ばして謝ってしまった。

バハムートは大好きな玉子焼きが守られると、陵人に向かってにっこりと微笑んだ。

「ほんと陵人にはかなわねーなー！」

神々が皆大笑いする。

こうして最終日の宴会は笑い声が耐えぬまま、何時間も続いていき、いよいよ終わりの時が近づいた。

最終日は夜の部は行われず、このまま解散となる。

神々はみな満足そうな笑みを浮かべながら城へと戻っていく。反面、これで楽しい時間も終わってしまったという寂しさも皆背中に抱えていた。

「じゃあ、俺は行くわ！」

城の前で陵人は皆に挨拶をする。

「楽しかったぞ陵人！また来年な！」

「ああ！」

「陵人。人間界を頼んだぞ。」

最後の最後でバハムートに威厳が戻った。

「はい。お任せを！」

「何かあったらいつでもこい！必ず力になる！」

「神の力なんて借りるかよ！」

そう言いつつ、陵人はオーディンと堅い握手を交わした。

陵人はその後一人ひとりに挨拶をし、『天空航路』を通って人間界に帰っていった。

残された神々は、皆来年の定例会議を生きがいに、精一杯やっつい

こうと心に近い、第138回、天上理事会定例会議は無事終了した。
しかし、この半年後、彼らは再び顔を合わせることになる。臨時会
議の招集によって・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4213x/>

「理」の能力者陵人

2011年11月24日00時46分発行